

妙高山

妙高山は此國第一の高山にて、しかも北海雪多きに面すれば、千年の雪山の一隅に燦爛として鹿子斑にかゝり、頗る美觀なり、赤倉黒姫兩山の間には名位瀑といふあり、溪間に懸垂して長さ十丈幅五丈飛沫雪の如しといふ。

關山

汽車は愈々進みて雪除の間を出て、はくいり、くいりては出て、遂に關山停車場に着す。之より西二里半宇湯河原の地に關山温泉あり此泉源より引きて關山町に浴場を設く、燕温泉などいへるは實に此等をいふなり。此地は彼の北越雪譜に見ゆる恠談の本場にて、所謂毛塚といへるいと恠げなるものも村端に存在せりといふ。概して此附近は地高燥に、大氣清良鑛泉多くして實に避暑の好適地といふべし。之より鐵路は漸次下り勾配となり、蜿蜒荒川に沿ひて北下す、川を渡り山腹を穿ち、雪除をぬけ、遂に越後の平坦なる野に出でぬ

新井

一驛あり新井といふ、此所に下車して東方針村に向ふ。

針村

北越の旅といふと雖、暑さは更に上信の地と異なるなく、烈日背を焦し苦さ名狀すべからず。乃ち新井の町端に暫しやすらひ、始めて北國の雪といへるものを味ひ、涼氣を入れ荒川を涉りて高柳北條などの村々を過ぎ、一里半許にて針村に入る。此邊一帶北は漠々たる平野にして、原頭悉く青緑の衣を着け、穗既に孕みて未だ破れず、穰々たる田圃の間所々に散在する靜閑なる村落、葱々たる竹林など、一に此暑さなくば頗る快哉を呼ばしむる所なるも、赫々たる炎暑は何等の風物にも眼を止めしめず、吾人はたゞひたすら針村に急ぎ、村に入りて有恒學舎を尋ね、此地に吻の舊友を訪ひ久し振の快談をなし、遂に鄭重なる待遇に預りて、いと安く一夜を明しぬ。有恒學舎は私立中學にて校主を増村度次氏となす、氏は此地の豪農なるが、

單身一學舎を建築し學者を備聘して、公立の中學と更に勝るとも劣らざる教育を此地方の子弟に施し、年々此校費として數千圓を支出すといふ、其教育上に熱心なる此の如きは實に稀に見る所にして、世の豪農豪商の輩が徒に貯當にのみ心を用ひ、更にかゝる有益なる事に資を投すべき道を知らざる者には、爪の垢なりとも煎じて吞ませたまき心地するなり。

(十一) 高田と春日山

五日は針村を出發して昨日來りし途を再び引返し、新井停車場に至る。直に乗車して高田たかたに向ふ、鐵路の過ぐる處兩側一望平坦にして禾穀の綠葉獨り威を逞うせるを見るのみ。高田に下車して直に城址に向ふ。此地はもと榊原さかきばら氏の城市にして越後第一の大藩十五萬石の

高田

城下なり。徳川氏が王朝以來統治權の集中せる此處に譜代の臣をすゑて、一は北國の要路に於て奥羽東山北陸三道の連絡を保ち、一は一向宗いっしやうしゆの再び亂るゝことあるに備へ、東北は奥羽西は加越能の外様に備ふる爲の要衝を撰みしものにて、其真意のあ



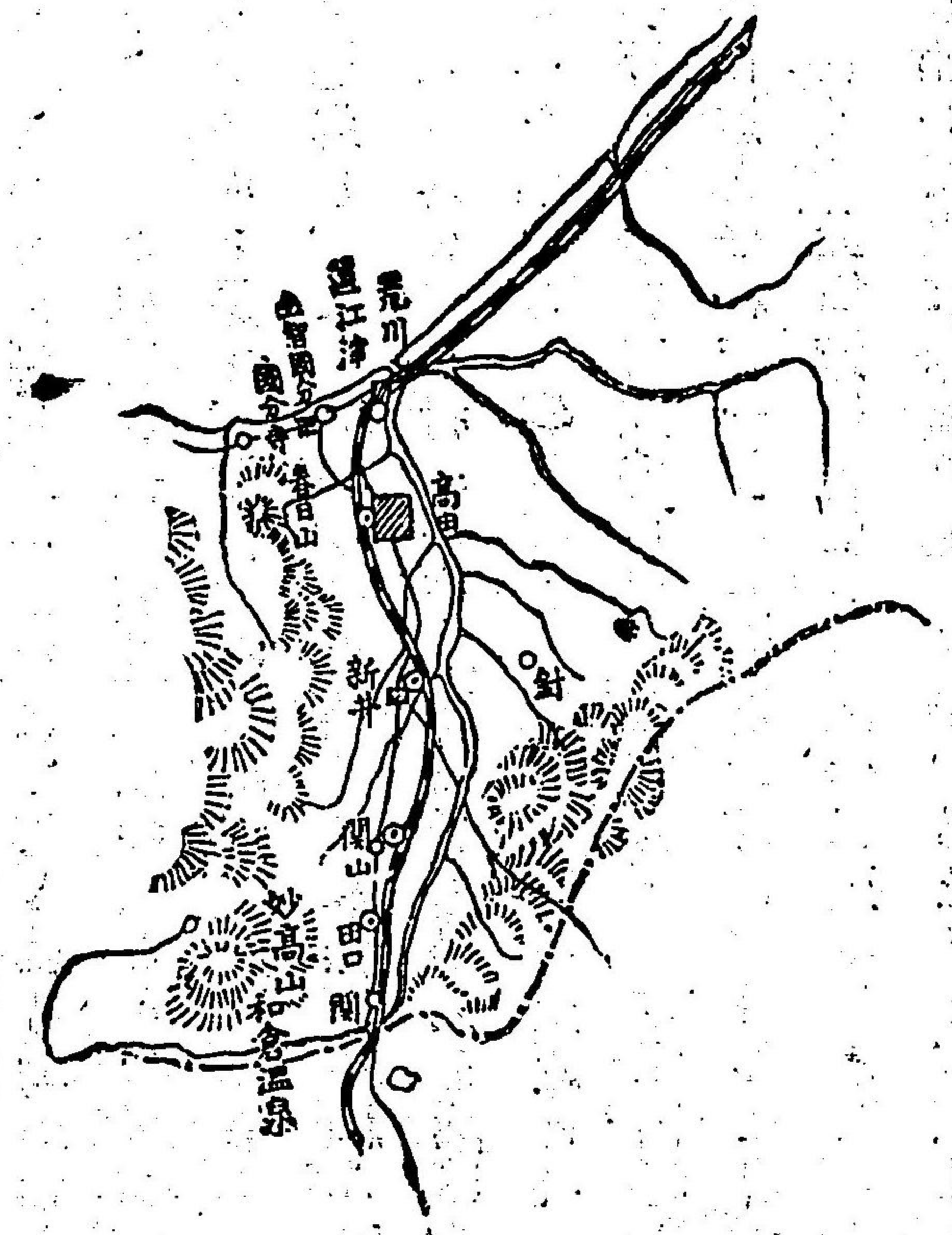
る所を解せざるべからざるなり。今猶市坊頗る多く、諸官省學校等悉く備る所なれども、市街には更に進歩の模様も認めざるは、漸次衰微の兆を示せるものにあらざや。市街家屋の建築法は一般に雷除の装置にて、軒深く屋上は板を以て葺き石を

載せられたれば、市觀甚だ美ならず。市街衰微の勢は更に新建築の家を見ず、加之此驛は近年作業局さくぎやうきよくより途中下車驛たることを廢したるを以ても、其一斑を知るべきなり。今や貨物は皆此地を去て悉く直

高田城址

江津に堆積し、繁華の中心は漸次高田を去て直江津に赴き、今は本願寺派寺院の存在すると木綿織物類の繁盛を見るのみに過ぎず。綽如上人の開基なる瑞泉寺、親鸞上人を開山とする稲田禪坊の名ある淨興寺の如きあり、何れも眞宗にして頗る壯大なり。大手門より城址に入る。城は一に關城又は鮫城ともいふ、慶長十二年松平忠輝此處に居住し、十年を経て更に北國奥羽の諸侯に土工を命じ、始て城を築くを得たり。大阪陣の時忠輝罪あり、元和二年國除せられ、酒井家次代て此地を治す。子忠勝信州松代に移り、松平忠昌の有となる。同九年忠昌福井に移り、忠昌の從子光長在城す。天和元年光長改易せられ、同三年より貞享元年までは御番の城となり、貞享二年稻葉正通小田原より來り、元祿十四年戸田忠直佐倉より來りて之に代り、寶永七年松平定重桑名より來り五代相つぎ、寛

保元年榊原政永奥州白川より移封をうけ、遂に維新に及び、今猶四方



に濠渠を繞らし壘壁の跡を止む。然れども此城の如きは眞の平城なれば今城址内には諸官衙神社學校病院等あり人家あり畑地あり、殆ど何處に天主閣本丸二丸等の跡を止むるやを

疑ふばかりに荒廢せり、唯外廓濠渠見附等の少しく痕跡を止むる

ものあるを見るのみ。

中學校は新潟縣第二中學校にてこゝにも叻が知人ありしも、恰も不在なりしかば直に去て病院監獄の間より、新潟縣第二師範學校を新築せる所を過ぎ、遂に市中に出て、先づ繁華なりと稱せらるゝ町々を通過し、こゝかして此地の名産木綿を織れる家々を見、漸く町端となり遂に土橋村に出づ。高田名産粟飴を鬻げる間口十四五間もあるべう思はるゝ家數軒あり。京に歸る土産となさばやと思ひしも、荷添うを憂ひて立寄らず。藤巻村を過ぎ木田村に入る頃ほひ、直江津往還と分れ、一條の並木道に沿ひ、野外に出て、遂に春日山城址を仰ぐ。此街道は實に五智國分に至るものにして、直江津道は鐵路に沿ひて共に繁盛を極むと雖、もとく直江津は新開の地なれば、王朝以來足利徳川の時代を通じて此道こそ最も古き往還なるべけれ

春日山

是より二三の小村を過ぎ、中屋敷村に於て路を左し、春日山々下に至る山甚高きにあらざるも時既に正午を過ぎて日光赫々威を逞うし、飢渴交々至り登山の苦しさに實に名狀すべからず。漸くにして山腹にある一茶店に着し、直に涼を入れ徐に城址を探らんとして、先づ晝飯を命ず、此處は即ち舊城馬場の址なれば、地廣く眺望頗る佳なり、傍に不識神社あり霜臺公を祀る、此處は舊老母の宅址なりといふ。食を了へ猶數町許山徑を辿り攀登すれば、即ち天守閣の址なり、是れ蓋し山の最高點にして廣さ凡そ十間四方位なり、徐に徘徊して眼を放てば、前に茶店より見しに勝りて眼界更に開け、天風衣を拂ひ爽快いはん方なし、北海の波瀾、荒川一帯の平野は盡く脚下に朝し、山あり野あり海あり川あり家あり、彼方遙に海をこえて髣髴たるものは是れ順徳帝の昔より名高き四十五里波の上にある佐渡

が島なり、之と相つゞき押寄する北海の海波を排して突出たるものは是れ音にきこへし薬師の米山及越後一宮といふ名だゝる社をいける彌彦山なり。此間に點々白鷗の眠るが如きは北海を通ふ帆影にやあらん、黒蛇の走るが如きは波を排して馳せちがふ汽船の煙にやあらん、更に眼を東南の方に轉せば、近くは荒川の平野を俯瞰し、遠くは上信の界をなせる群山隙間もなく起伏し、其間に田園村舎到る處に散在し、田畝林叢茅舎白壁參差として點在し、高田直江津の市街は手にとるが如く、其間を連ぬる一條の鐵路は蜿蜒として馳走し、直江津よりは更に之と直角をなして東北に走れる北越鐵道あり、蛇の如き荒川南より迂回し來り、高田の北をすぎ鐵路に平行して直江津に



入れるをみる、後は透選たる群山重疊し、己が立てる所は獨り突兀として高く、遙に隔つる同じ高さの山々は屏風の如く此處を打圍み北方林泉寺の後山は更に高くして北海に對する一面を防禦し、南方岩木村の後山は甚だ高きにあらざるも妙高山の餘脈に相連續し、却て南方の平野を見渡すに適し、其状いはゞ大小形を異にせる兩翼を張て廣野を睥睨せる暴鷲の狀に髣髴たり。實に北海の一端より直江津高田を含て妙高山麓に至るまで、殆ど荒川飯田川保倉川の平野を一眸の間に聚めて指點するを得べき、天然の地勢完備せる北越第一の要害の地といふを憚らざるなり。宜なる哉一時北越の一怪物として其名を逞ふし、一たびは北越を夷げて都に打入り、或は信州の地に甲州の怪物と争て其威を發揚せし上杉霜臺公の此處に其居を卜したるは、此城の規模頗る廣大にして到底一々古今を比較して精査する

暇なかりしも、今大跡の形勢をのべんに、城は又蜂峰城とも府内城とも云ひ長尾氏の創築にかゝる。當時謙信の時代に於ては未だ高田の如き城市もなければ、路は大田中屋敷寺分より岩木瀧寺の傍を過ぎ前に述べし並木路の附近より飯村大貫京田灰塚乙吉五日市を経て新井に出でしものなり。故に新井より來れば所謂正善寺街道より出て、追手に入るなり。麓の廣原は小峯原といひて勢揃をなしたる跡なり。檜木坂を上り大手、馬場、三九二丸謙信の母邸景勝邸等を経て初めて本丸に達するなり。之より南方の一面は高さにより低きに從て米藏若くは諸士の宅地となりをれりしものゝ如し。謙信の主殿といふものも少しく下方に當りて此間に其址をとむ。二丸より本丸を過ぎて絶巖には天守臺の址あり。之より更に林泉寺の方面に降るには、本丸の地に笹井と云ふ井を見、一段下りて城樓の跡次に龜

割清水北條丹後守の宅址あり。更に其下には長尾越前守の宅址、次に直江兼續邸次に黒金權左衛門の邸址等此邊一面臣下の宅地なりしなり。要するに當時は此處悉く將土工匠等の居宅を以て蔽はれたるものなるべし。當時の盛大は今唯簇立せる尖峯の上部に地を平げたる地殻の状況によりて僅に之を察知し得るのみにて、物換り星移り往事渺茫夢の如く、憐むべし春日山巔宏壯牢固の臺閣も悉く煙蕪に委して復見るべからず。蜂峯山上復叱咤の聲を聞かず府内城裡復軍馬の嘶を耳にせず、唯聞く老梟峰に叫び、晚鴉樹上に喧しく、無爲の天風梢を掃て飄々たるを、僅に名残をとむる山頂一株の老柏山野の形勢と共に、其當時の舊態を告ぐるものあるのみ。左顧右眎感慨の情油然として湧き來り、彼北越の天地に雄飛し、一度將軍の知遇を受けては平安城外の花を眺め、足利季世戰國騷擾の巷

に獨り牛耳を執りし英雄も、今や去て枯骨と化し亦杳として其聲咳に接すべきにあらず。無情の山河空しく壯士の心を傷ましめ征人志士をして轉た悲嘆に堪へざらしむ。寧靜子曾て公を詠じて曰く、

春日山頭鎖晚霞、驪嘶嘶龍有啼鴉、憐君獨賦龍州月、不詠平安城外花、

と、げに此地に至り此風光に接し、北越未曾有の此英雄の爲、豈想古懷舊の涙を灑がざるを得んや。室巢鳩曾て此處に遊び賦して曰く

越國山河繞故壘、英雄割據百年餘、當時臺榭空荒廢、今日眞爲樂處居、

(十二) 五智國分

春日山を東北に向て下るれば一小村落あり、之につづいて一寺あり林泉寺といふ。曹洞宗にて文明中上杉の家臣長尾能景父重景の菩提の爲として、其法號を以て建立せしものにて、開山は一州正許大

林泉寺

和尚といふ。創建の當時は七堂伽藍巍々として頗る壯嚴にして、天文五年謙信七歳の時此處に書を學び、屈指の大寺たりしなり。然るに弘化中回祿の災に罹りて全く燒燼し、今は本堂庫裡鐘樓通用門等を残せるのみにて甚荒廢に歸したり。長尾爲景の寄附するところ七萬餘坪の地も今は僅かに三千坪許となり、山間の一小寺に過ぎず、荒涼凄愴亦今昔の感に勝へざる所なり。寺内には爲景の墓を存せり、寶物には謙信の自畫自贊の一幅をはじめ、上杉氏に關するもの數種ありといふ。余等前程を急ぎ一々調査の暇なく、再び並木路を北向して五智國分に出づ、此邊田畝の間又は山に接し村に連りて家根のみ厚く莖き柱なき、いはば北海道にある堅穴とはかゝるものならんと思はるゝ家どころぐに散在せり。是れ蓋し吾人が新井以來御馳走にあづかりし夏季の料として冬季の雪をそのまゝ蓄ふる所

雪穴

にて、之を雪穴ゆきあなといひ冬間山の如く堆積したる雪の一部を以て此處に入れ置き、烈暑りつじゆ燬くが如きの頃之を取出し、以て飲料となし涼を入るゝものにて、氷の如く匏かんなを以て之を削る必要もなく、頗る便利にしかも味佳に、又廉價なるは驚くばかりなり。但し土地の心ある人は曰く冬季數月の間身を苦めたる此の如きものいかに暑さ烈しとはいへ、金を投じて買ふを快とせずと、蓋し其價の廉なるは其供給の多きにもよれども、一はかゝる所に源因せるを知るなり。又高田以來沿道遇ふ人毎に其容貌をみもて行くに、男女共に一般に色白く鬚少く顔だちやさしく、所謂越後美人の本場とはこれらの地をいふならん。つくづく考ふるに越後は北半南半人種の別あるが如く、此地の如きは恐く亞細亞大陸より直接渡來せしものにて北半のアイノに近き人種とは別物ならんと思はるゝ感を起しつ。天うらゝかに風

人物

國分寺

吹かず、北海の波浪穩にして、海上一碧縹渺として限を知らず。先づ國分寺に詣づ、是れ聖武帝天平てんぺうの時、各國に開創せし遺址の一にして、素より建築は當時のものにあらざれども、五智如來として其名甚高し。之を五智山花藏院ごちざんくわざうと號し徳川代には二百石許の寺領を有したる寺院なりき。古は堂宇壯嚴諸國しよこくの國分寺と同じく美觀を極めしものならんも、度々の火災にて頗る荒廢に歸したるを永祿九年七月再興さいきうの事あり、元祿元年にも亦雷火らいわに罹り、又同二年には佛像經卷きやうけんも悉く烏有に歸し、今は其後に興立したる本堂三層塔經藏仁王門親鸞堂等わうもんしんらんたうを存せるのみにて、往時の壯觀今見るべからず。其親鸞堂といふは聖人配流の時暫く此地にありて後山の鏡の池に姿を寫し自像を彫刻せりとか傳へらるゝ所にて此堂には其像を安置せりとす。

五智如來

清風軒

五智如來三尊の金銅佛を拜し、王朝時代の隆盛を想起し、再びもと來し道へ立歸り、右方五智堂浦濱端の一亭、割烹邸並旅館と標掲せる清風軒に今宵の宿を定めぬ。先づ北海の波濤に浴して積日の勞を醫し、旗亭必しも珍珠嘉肴を網羅せりといふにあらざるも、風景絶佳にして北海の風光亦賞美するに足る。見渡す限り目も廻に、まさか鳥港も見えざれども、海上漫々蒼波萬里に連り、黄金に名だゝる佐渡の山は雲煙縹渺の間に浮び出で、「佐渡と越後はすじ向ひ、橋をかけたや船橋を」「佐渡は四十五里波の上」と俚歌に唱ふもげにまことなれや。あはれ彼山こそ承久亂に一天萬乗の君主が北條氏の爲にさすらひ給ひし處かよ、稚き阿新丸が父を慕ひて遙々尋ね來し甲斐もなく、父に遇ふ能はずして死に分れ、健氣や其仇をうちとり此越後國府まで遁げしといへるも彼處の事なるか、豊臣徳川の以來金碧

燦爛たる建築物工藝品貨幣の供給を仰ぎ、今なほ絶えせぬ黄金白銀の産出するも亦此處かな、あはれゆかしきたふとき國ぞかし。東方に屹然聳ゆるは山に稻田のあるといふ米山ぞ、行かうか參らんしやうかの薬師もげに此處なるぞ、あゝ身の爲主の爲參詣するの日を得ざりしはいと遺憾にこそ。渺茫たる蒼海夏の海波高からず、白帆來往して木の葉の如く、冲通ふ汽船は淡き烟を空に残して水煙の間に入るをみる。旅館兼料理屋の事なれば、我等を説て一席の客となして遇せんとせしはいと滑稽の種なりき。此夜直江津に米穀取引所の開業式あり、寝ながら蚊帳を貫きて煙火の昇るを見るも亦時にとりて興あり、北越暑氣激烈をさく東都に劣る所なきが如きも、時々吹き來る海風之を醫し快いふべからず。

(十三) 歸 京

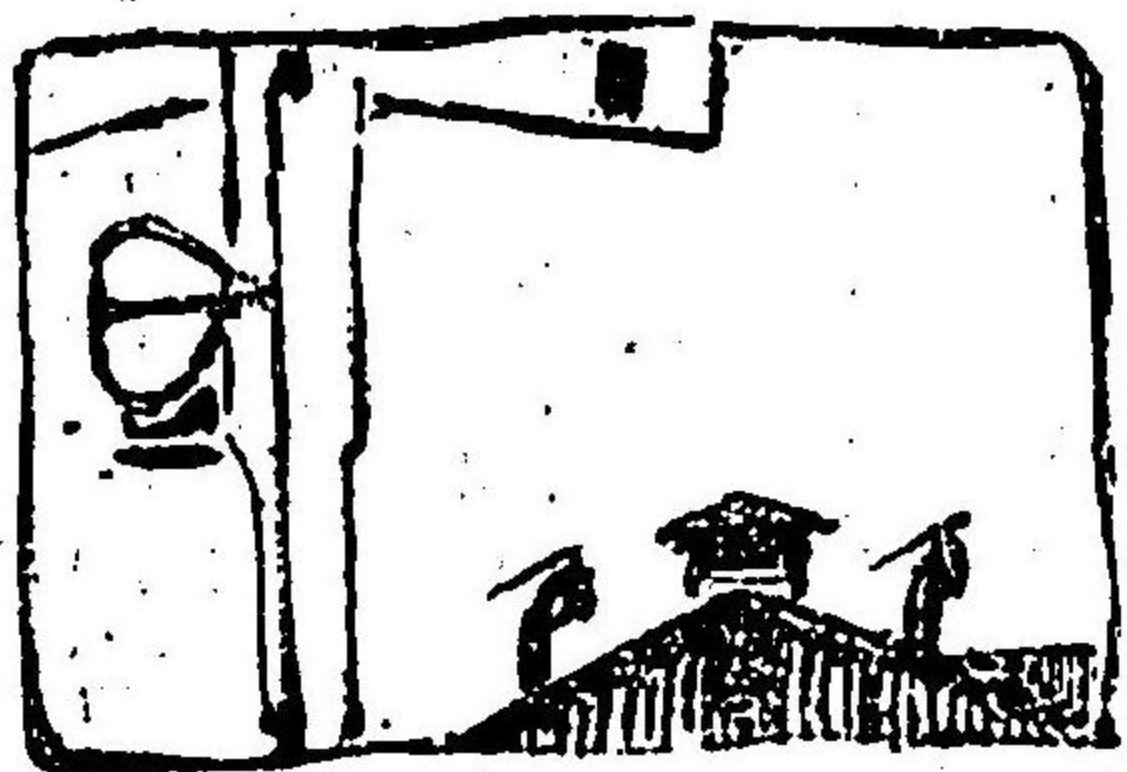
國府址

六日晨起滯風軒を發して東向直江津に向ふ、此間あさしのやしんでん字鹽谷新田の地は古へ國府のありし舊址にして、一帶田園相望み、廣漠にして當時國司館設立せられし壯觀を思ひやらるゝばかりなり。思ふに王朝時代より上杉霜臺公が春日山城德川氏榊原氏の高田城等、皆此荒川の流域に沿ひたる地といふべく、げにや北越に於て此平野は統治權の集中せし古來最早く開けたる地といふべきなり。

直江津

五智國分より凡そ二十町直江津に着す。此地は荒川の河口にある港にして官設信越鐵道の北端なり。此處よりは日々えつちうふしき越中伏木に定期航海の汽船あり、然れども北海波高くして冬季は定期の航行を絶つことあり、港口は遠淺にして大船巨船を碇繋ていけいするに適せず、船は常に

遙沖合に碇を卸し、風波稍や暴るゝときは直に佐渡に遁るゝを常とす、然れども猶ほ北陸と關東とを連絡する一大要津にして、新潟を措ては北端唯一の商業地なれば、不完全ながらも此地を除ては他に求むべからず。商業殷賑物貨堆積し、將に徳川代に於ける高田の繁盛を殆ど此地に移さんとし、新造の家屋軒を接して高田の狀況と正反對の狀を呈續々此鐵道によりて關東に運ば出す所となれり。兩鐵道を連結する廣大なる停車場新に成り、新潟以北の貨物も僅々二十時間許を以て東都の市場に上るを得るに至りたり。



せるを見る。今や北越鐵道新に成り、北に進では新潟に至るを得べく、中間には柏崎かしき鉢崎はちまき柿崎かきまき長岡等ながおかの町々あり、何れも石油業の繁盛を以て名を得

午前六時汽車は發しぬ。例の如く天氣はいと朗にして、昨日見し山も野も海も川も皆之を背後に送り、米山春日山妙高山さては高田の市街荒川の水皆數日來の遊を追懐し、車窓の瞥見に通過し去り、信濃に入りては善光寺の伽藍、川中島の古戰場、上田小諸の城々、淺間山の煙、碓氷の隧道上野妙義の奇峰等を皆一瞥の間に過ぎ、或は數日來の疲勞一時に發して、醉魔頻りに襲ひ來り、陶然として車中の夢を結び、彼の山彼の川歸途見ばやと思ひしものも、いつしか過ぎ去り、遂に高崎に達したるは午後三時頃なりき。是より日本鐵道に乗りかへ、東京に歸る。上野に着したるは實に午後七時、是に於て僅に十二三時間を以て吾人は本州の一部を縦斷し北海より東京灣まで出づるを得たるなり。古の碓氷嶺を踰ゆるに一日を費し、暢氣なる旅に比すべくもあらず、文明の利器げにありがたき限とこそいふべけれ。

(十四) むすび

此行日を閱すること六日、僅に一週間足らずの日を以て百有餘里の長程を跋躑し、淺間の山の煙を呑み、妙義の岳の奇を探り、信越の間に英雄が驅逐交戦せし跡を訪ひ、春日山頭霜臺公の古を慕ひ、草鞋を踏みしだき汽車中に眠り、雪を噛み氷を吐き、山を踏み谷を越え海に浴し川を涉り、學校に入り寺に詣で、或は海を抜く數十尺の高きに登り或は海の中數尺の下にもぐる、或は飢渴に襲はれ或は飽食腹を鼓したることあり。千變萬化余等の如き秃筆悉く書き盡しべうも見えず、唯謝すべきは善光寺様の御利益か、五智如來の御保護か、但しは甲越兩雄が吾等の跡を吊ひくる、殊勝の者よと草葉の蔭

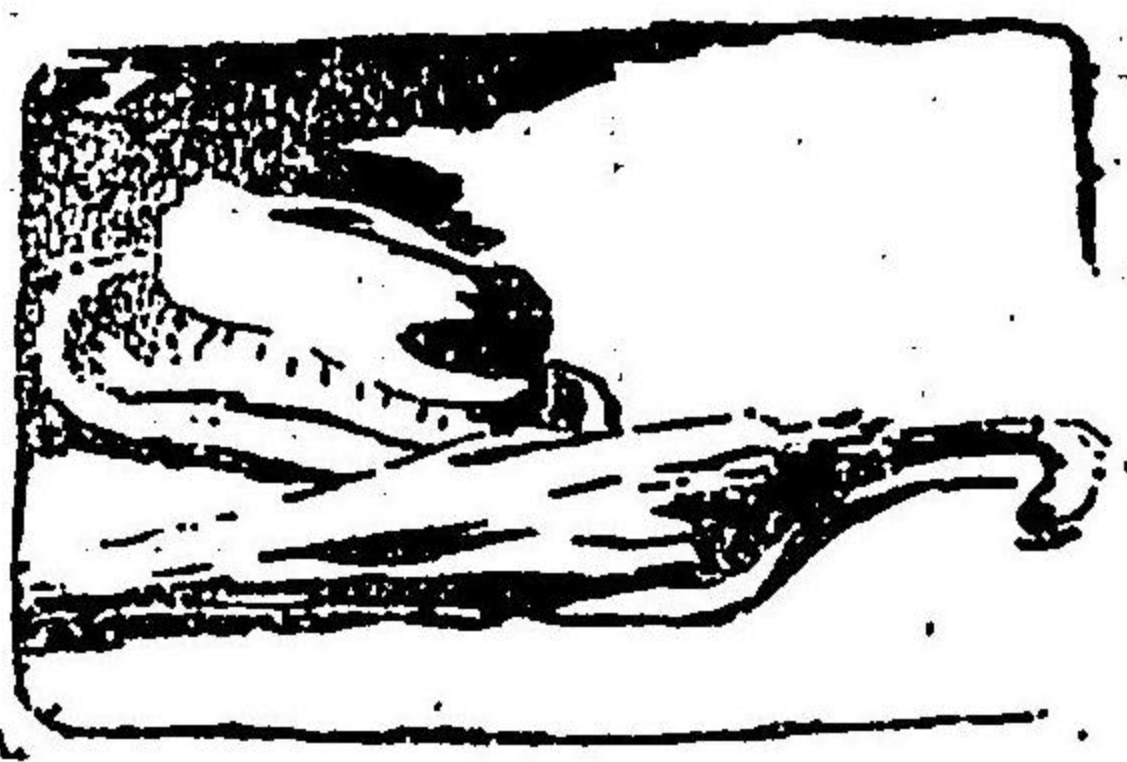
より護りくれしものか、六日の間唯の一滴の雨にもかゝらず無事に此行を終へしことなり。之と同時に悪口いへば炎天つゞきにて暑さは暑し、汗は出るくさながら身は焦るばかり其苦しき名状すべからず、然れども幸にして二人共に焦つきもせず、濡鼠にもならず歸りつき得しは、實にいひしらずのうれしさにてやはり神佛の御利益か何かなるべし。

東海道汽車の旅

叻 鷗

静岡附近に一日——志賀の大津に半日

山達者川達者に鍛ひ上げられし鐵脚に鐵鞋信を穿ち、越三國の山上野を跋渉し六日の勇を試みし我等兩人は、猶も勇氣勃々として禁じがたく、いかに炎帝威を逞うするも、残れる月餘に近き休暇を徒に東都紅塵萬丈の巷に費すの愚を學ぶ能はず、急に今回は關西の方面へ向け再遊を企つ。其目的とする處、東海道鐵道沿路の名蹟を探り、猶進みては近畿地方の史蹟に實地踏査を行はんとの旨意なり。かくて益々約束も定まりたれば、黄道吉日を撰むといふ如き暢氣なる門途に

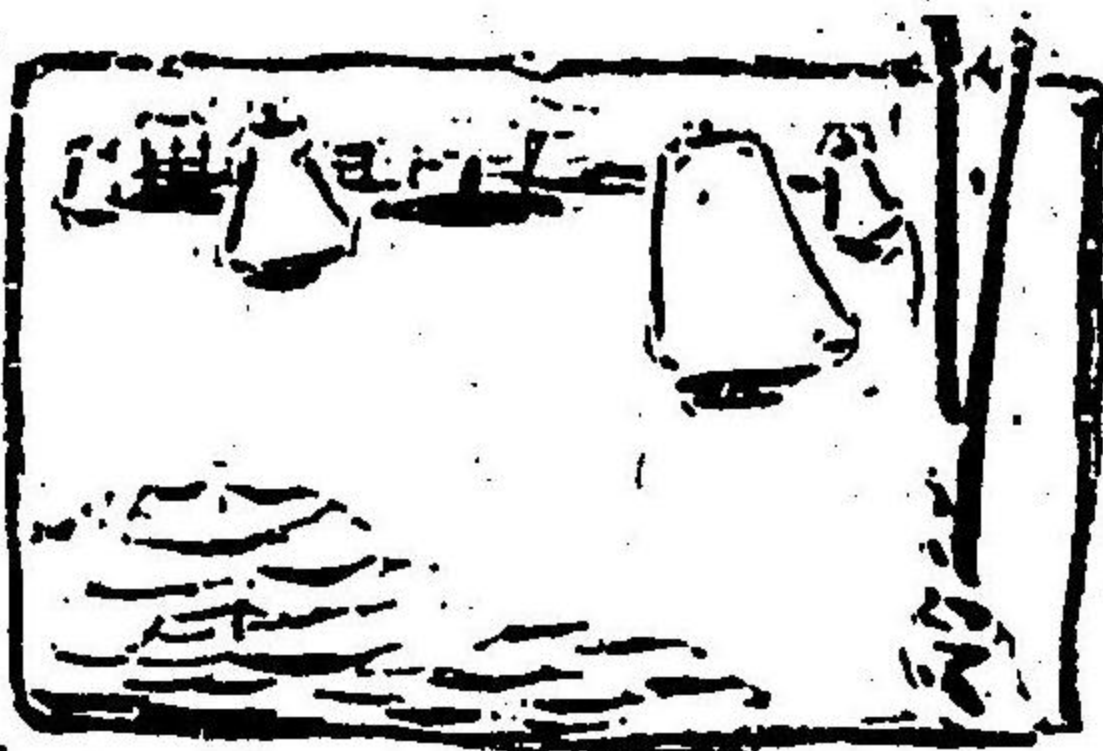


東海道汽車の旅

はあらで、兩人の用務落着を告ぐると共に、直に出發す。恰も是れ明治三十三年八月十日の夜の事なりき。

品川灣

やがて同夜午後十時、汽車は吾等兩人を載せて新橋を發す。此日は舊曆下弦に近き晩夕夜なれば、汽車の品川灣に沿ひて進みし頃は、恰も皓月房總の山端を離れ、灣内一帯の海面を照し、天空一掃風牙え氣澄み渡り月にもやうく飽氣つきたれば、兩人爰に車内の一隅を占領して徐に眠に就く。車内の夢動揺して眞の夢にあらず。



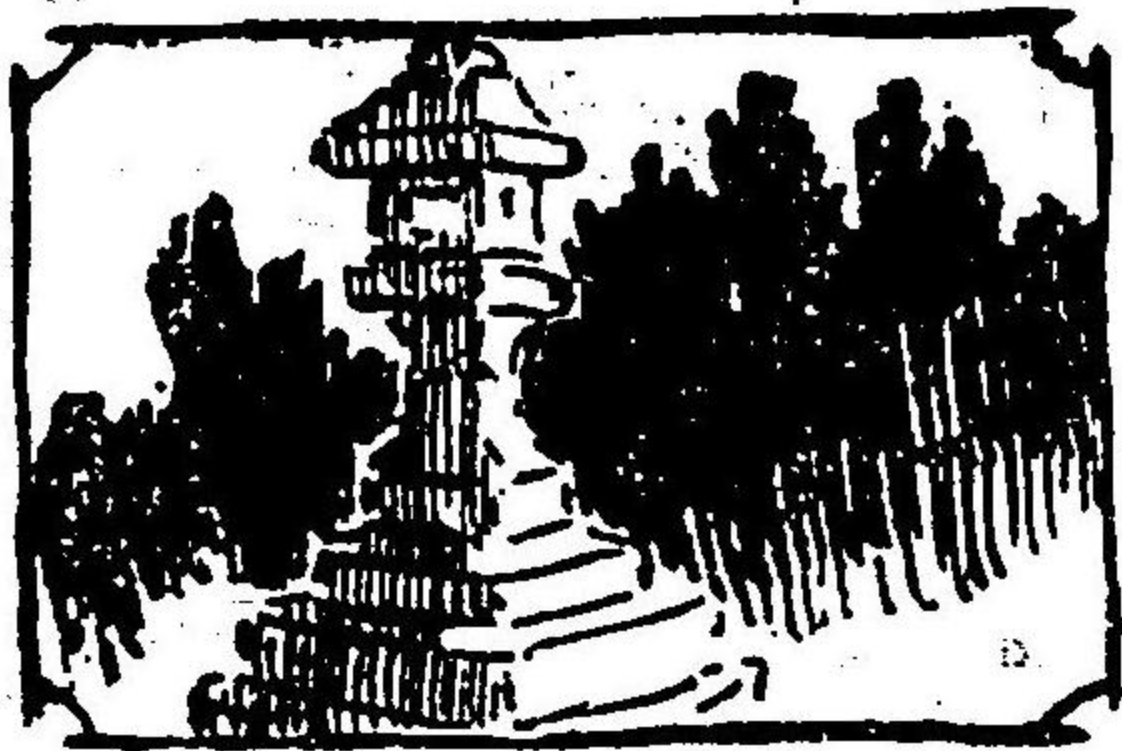
て、金波蕩搖湮水淪漣として月と上下し、宛ら仲秋の如き感あり。やがて汽車は品川も過ぎ大森ともなり、海濱を離れて風景漸く其美を失ふ

静岡市

いつしか過ぎ去りしと見え、静岡々々といふ驛夫の聲に驚きて、倉皇裝

淺間神社

を整へ下車したるは、午後四時半頃の事なりき。停車場前の一旗亭に朝餐を了へ、直に静岡市街を通過して淺間神社に詣づ。社は賤機山一帯の丘陵に據り結構頗る莊麗を極む、總社を神部神社と號し大己貴命を祭るといふ。社殿の前に三層閣あり、棟宇高く半霄に聳え、欄間には神仙龍鳳の類を刻み、甚精緻を極む。閣前に舞殿あり長廊之を圍みて直に樓門に接す、此等の廊殿には嘉永安政の頃國家多難の時に際し、列侯繪馬を奉納して平安を祈りたるものを掲ぐ。其畫く處或は故事を歴史に採り、或は寓意を人事に諷す、其數數百を以て數ふべく最も趣味ある活歴史を語る如き心地す。此社はもと志津機神社といひ、此國の惣社にして、



志津機神社

賤機山

續紀類聚國史等に散見する所たり。延喜中大宮の地より淺間宮を遷して、彼を本宮といひ之を淺間新宮と稱す。今川記を初め足利代の諸書此社に付て語れるもの少なからず。此三層閣は建築上亦頗る注意すべきものなるべければ、閣内を一見せまほしかりしも、未だ時早く社務所開かず、吾人も前途を急がるれば、遂に割愛して去り、直に賤機山に登る。急磴あり芝愛宕の磴道に似たり、躋り盡せば眼界忽ち開け風景頗る佳なり。左方一小塚あり其由緒を明にせず、傍に茶店あり、暫し之に憩ひ更に山に登る、山は峯を傳ひて路あり蜿蜒として盡くる所を知らず、是れ賤機山の城址にして、今川氏の據りし所といふは恐く此處なるべし、登るに従て眼界愈々開け静岡市街は固より阿倍川宇津谷嶺の如き皆手に



駿府城址

取るが如く見ゆ。富士山は遙に東北の一面に於て天空を摩し、峭然として孤立せり。東及南の二面は有渡一帯の連山峯を列ねて重疊し、其間清水山八幡山の如き四五の丘陵處々に起伏せるものあるを見る。舊駿府城址の今兵營となれる所は、即ち王朝時代國司の館舎ありし地にて、今川武田の頃にも其舎宅の地なりき、家康の駿府に城を定むるや、此地に城を築き東海道往還の要衝を占めて、所謂大御所様退隱の地と定められたり、今賤機山の一角に立て、遙に静岡市街を俯瞰すれば、城内の状況殆ど手に取るが如く見え、實に何等の要害もなき野城なり。是れ今川氏代の如く亂世の間にあらざれば、敢て峻嶮要害に富む山上の城を要せず、唯大規模を廣げて往還の諸侯を威服せしむる爲の如き城なるを要す、之に適するには廣漠なる野城を可とす、宜なるかな此京江の中央に於て、十五萬坪以上の地を以て七層の天守

山城と野城

賤機城址

閣を築き、唯外向の裝飾をのみ旨として以て其退隱の地と定めたるは、其今残れる内外を觀察せば蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん。賤機山の今川が城址といへるものは、此眺望に富める山上を利用して後方に安倍川を控へ、前方一帶の平野を下瞰し、最も要險の地たり。實に峯を這ひたる長蛇の如き城地にて處々に平坦なる空地を殘せるは蓋し當時の屋舎の址なるべし。山頂馬背の如き通路、往けども往けども盡くべうも見えず、臨濟寺の後山に來りし頃、一通路を見出して辿り下る、時盛夏の事なれば雜草路を埋め、朝露に濕ひて頗る下山に苦む。加之半にして路絶え往くべき所を知らず、樹蔭を過ぎ、藪を貫き、叢に入り、漸くにして一小農舎の後庭に出づ、即ち裏口より御免を蒙り、表に出て 臨濟寺に達す。寺は禪宗臨濟派に屬し、天文の中今川義元の創立にかゝる、開山は大

臨濟寺

家康勉學の處

休國師にて、當時後奈良帝の勅願所たりき。現存の方丈は天正中徳川家康の造營したる處にて、家康が幼時今川氏の許にありし時、勉學したる一室は、書院の一隅にありて今猶存すといふ、此寺の建築は實に當時のものにて、頗る注意すべきものなりといふ。寺内瀟洒清麗甚だ風致に富む。藏する處の寶物類亦少なからざるを知るも、前途に制せられ見る暇なし、乃ち堂後の今川氏輝及中村一氏の墓に詣で直に寺を辭して二三町西し、今川義元の首塚に至る。傳へ云ふ、義元の桶狭間に敗死するや、侍臣其首を携へ來り、賤機山城に入らんとして得ず、遂に首を天澤寺の床下に投じ去る、後天澤寺廢せられて此所に塚を築き小堂を設けたるものなりと、今方二間計の一宇ありて、中に義元及び桶狭間戦死者の位牌を安置せり。唯見得るものはこれのみにて、更に塚らしきさまはなし。位牌の表面に記して曰

今川氏輝及中村一氏の墓
今川義元首塚

現今の駿府城内

「大澤寺殿四品前禮部侍郎兼駿州刺史秀峯哲公大居士神儀」と。

之より一直線に駿府城棟の傍に出づ、今城内には兵營あり監獄あり縣廳あり其他諸官衙學校を連ねて相列するを見る、城濠内は清水湧出して流をなし、頗る清潔にして、兵士の戯に釣を投ずるもの、口漱ぐもの、參々五々水邊に見ゆ。之より久能往還に出て、路傍の梨樹を培植せる小舎に立寄りて渴を醫し、八幡山の麓を過ぎて高松大谷平松などいへる村を經、海岸に出づ。駿河灣頭一碧の海水、漫々として蒼波萬里に連り、長汀曲浦、雲煙縹緲として風致限なし、猶二三の漁村を過ぐれば左方の連山漸く恠偉を示し、斬るが如き絶壁の屹立せるものあるを見る。午後一時頃久能村大字根古屋に達す、是れ久能神社の麓、蓋根古屋は古城に伴ふの名、此村名以て山に久能古城

駿河頭致の風

根古屋

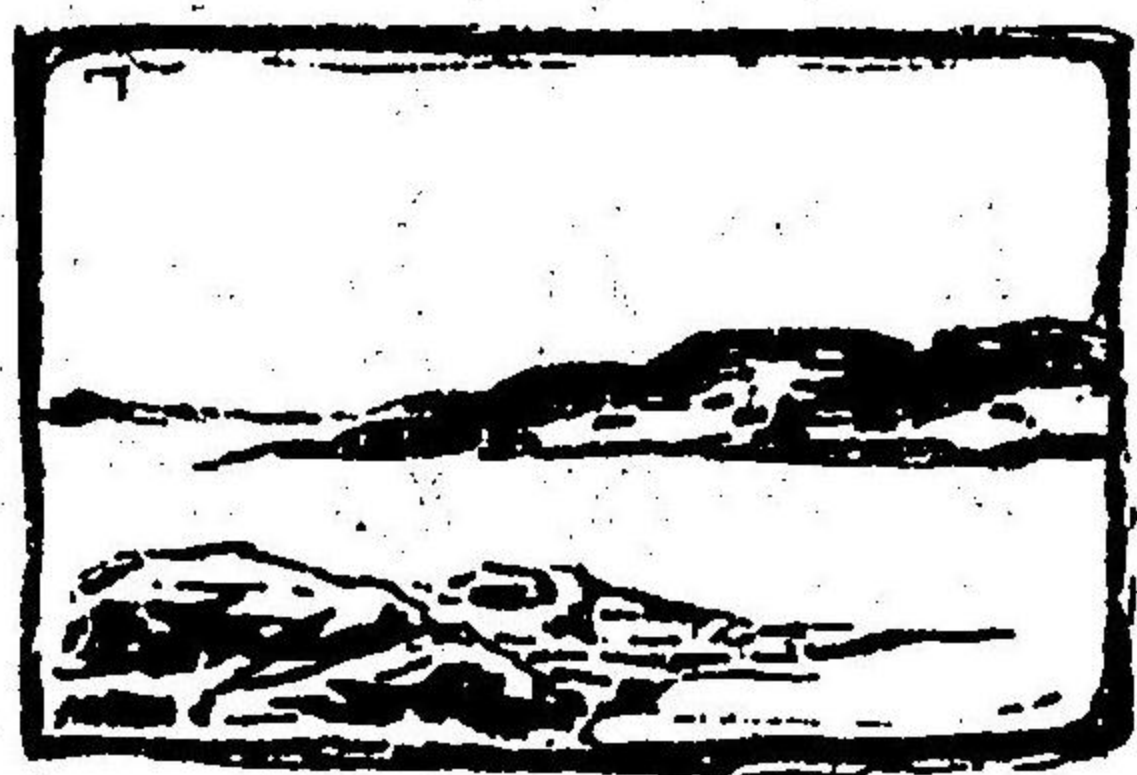
久能山の絶壁

物見松

ありしを示す。

仰げば嵯峨たる高崖、巉然として側立し、嶄巖宛ら刀して削れるが如し、宛轉たる一條の磴道、羊腸として之に通じ、絶點の樹間に東照宮の朱殿紅欄隱現出沒せり、磴道千三十六段、六町半なりと稱せらる、時恰も炎暑熾くが如く、之に登るに流汗津々、眼鏡爲に曇り、不快堪ふべからず漸くにして第一門に至る。

第壹門に入りて左方、峻崖の上に於て地に蟠れる物見松といふあり、其傍に矗立し試に眸を放ち四



顧せんか、東南には伊豆半島を雲煙靄鬱なる間に望み、西南には阿倍の河口、大崩の林巒、城の腰の曲灣を眺め、遠くは大井河の河口、遠州御前崎の邊、亦水天髣髴たる間に收まり、遠くは駿河灣内の水

久能寺

光、波靜にして漁舟の所々に散點せるを見る。傳へ云ふ、此地は推古帝の時、駿河の國主久能忠仁といへる者開創し、行基菩薩其手刻の觀音像を安置したるなりといふ、固より盡く信じ難きも、西行法師の山家集に、「駿河の國久能の山寺にて月をみてよめる」といふ一首あれば、此頃は既に盛なる道場なりしが如し。戰國の時、今川氏亡び、武田氏此地を領し、其形勢を相して城を築き、寺を村松に移す（今の鐵舟寺是なり）、天正中城主今福丹波守、城を徳川氏に納れたるを以て、家康時々此處に遊び、大に其形勝を愛したり、遂に遺言して此山上に葬らしむ。墓前に一祠を建て、後遺骸を日光山に移すに及び、祠を東照宮と稱して此所に其靈を留め、今實に別格官幣社久能山東照宮といふ。此地要害に富み、天險自ら備はり、甲陽軍鑑に山本勘介が言として、久能は弓鐵砲を以て十人守らば、日本中

久能城

東照宮

は攻めても適ふまじとの事あり。げに當時此要險に據り、静岡南端の押へとして、無二の城地なりしならん。家康亦此險を利用して、駿府城の門衝となしたるならんとの事は、曾て三上博士の談に聽きし所なり。



第一門を入りて梅林あり、大井あり、地に入ると十餘丈、山本道鬼の穿ちし所といふ、石燈を昇れば廟門あり、結構莊麗を極む、後水尾帝の宸額を掲ぐ。社務所に至りて廟内の拜觀を依頼し、拜殿に入りて神酒を拜し、承塵に環らせる三十六歌仙の額の艶麗なる、畫棟繪欄一に精美を極めたる、日光よりは其規模遙に小なりといへども、其結構は彼と酷似せるものあるを見る、金銀を以て鍍せる棟梁欄柱、金碧燦然皆人目を射る類にあらざるは

家康の墓

なし。廟後は即ち東照公が英靈を置きし所、長二十五間の石欄を匝し、中に一丈五尺の石塔を置く。當時侯伯の献進したる銅石の燈籠凡そ十八基あり、松杉鬱茂風物頗る幽靜なり。元和二年四月十七日家康の駿府に薨ずるや、内記榊原照久遺命を奉じて齋主となり、同十九日城を廢して此地に葬る。三年十二月社殿落成す。同年二月には權現號の勅賜あり、正一位を贈らる。三月十五日改葬の議あり、天海僧正其局に當り、野州日光山に移す。當時の天海僧正の歌なりとて「あればあるなければなしと駿府なる久能の御山の神うつしかな」といひ傳ふるものあり、同地にては猶眞實御遺骸鎮まれるは此地なりといへり。此移葬の事は國師日記にも見ゆる所にて正確なりと信ずる所なるも、猶此を以て政畧中の政畧なりと稱するに至りては到底知るべからざるなり。

家康の事

家康の遺骸の所

東照宮寶物

有波濱

榊原氏の後神職を拜し、與力八騎同心三十人之に附屬して此地を護衛し、駿河新風土記等を見れば、當時登山さへ一々關所改を受け、頗る嚴重なるものなりしといふ。廟を下りて鼓樓あり、攝社あり、寶庫あり、寶庫の傍の一字に公の遺愛品を陳列せり、固より此社に藏する品目中の一小部分に過ぎざるも、尙珍奇なるもの少なからず、殊に公が常用の硯箱の如き在中の鉛筆、僅に三四寸の竹に小鉛塊を置きたるものなれども、三百年前の品として頗る注意すべきものたり。

之より下山して一茶亭に晝食を了へ、三保の方面に向つて出發す。炎熱蒸すが如く暑氣頗る堪へ難しと雖、此邊一帶の海岸は所謂有波濱にして、駿河灣の蒼波を眺めて僅に苦熱を醫するを得るなり。蛇塚、増、駒越等の村々を過ぎて忽ち岐路に出で、村松村龍華寺に至

三保松原

らんか、三保半島に赴かんかの大評定となり、遂に決する所を知らず、抽籤して遂に三保半島に進まんとの事に定まる。是より有名な三保松原に入りしも、此地の松は所々に散點し一處に多く連れるものなければ、遠望してこそ美觀なれ、松林其物の中に在りては、何等の趣もなし、殊に路は海を離れて通過すれば、白砂青松波に映ずるの奇を見村のある所なり。社は郷社にて大己貴神、三穗津姫命を祀るといふ、其創建の年蓋し甚だ遼遠なるが如し、社殿額を掲げて「御穂神社」と榜す。附記して曰く、



る能はず、唯芋畑相望みて、暑熱に疾むの悲狀を認むるのみ。著名なる羽衣の松も、到頭見落して御穂神社に達す。是れ三保半島の尖端にして三保

御穂神社

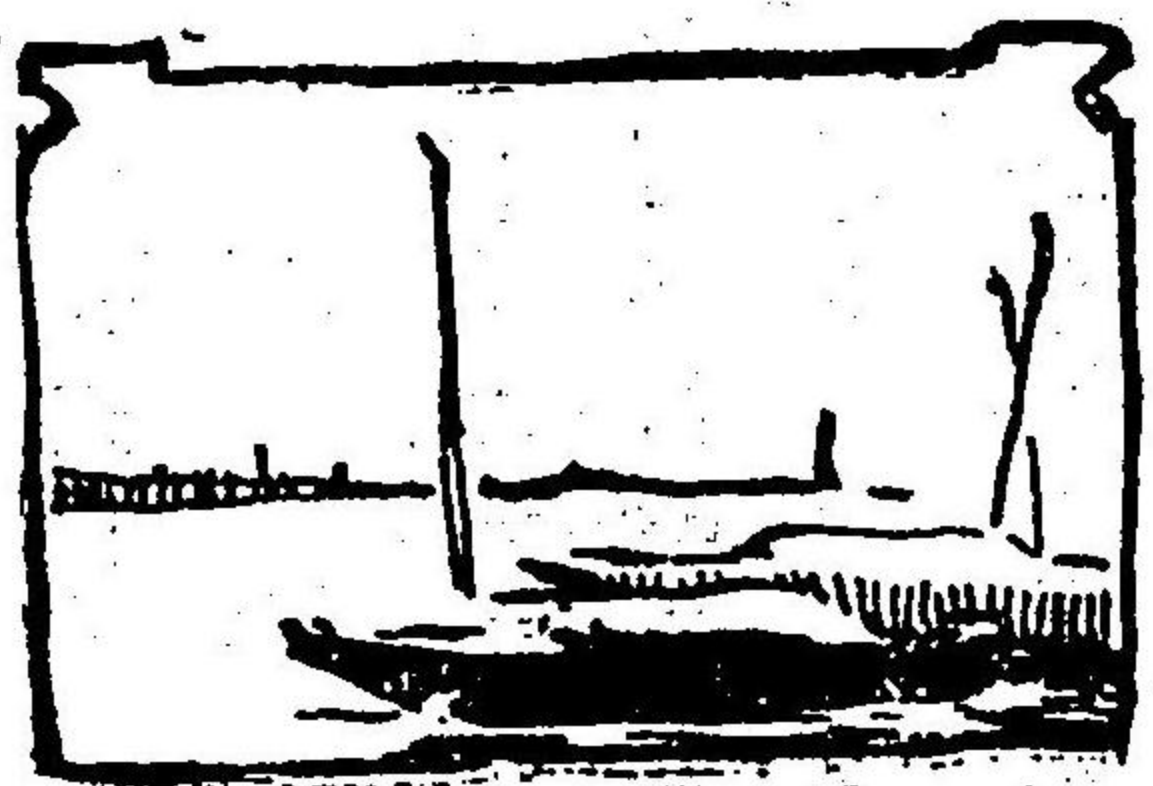
江尻港の景

江尻海水浴場

御穂神社の眷屬八千彦命、神主にかゝりて書す、

大己貴神を八千矛神といふ由は聞きたれど、其眷屬八千彦神とは珍らし、神ぬし殿のお顔を拜見したいものなり。

之より一舟に賃して江尻港に渡る、船は順風に帆を揚げ、げにや、風と波とに送られて、夏も残らぬ舟の中の風情自ら其間に存し、右には富岳天の一端に孤立し、清見瀨、興津、蒲原、江尻、清水に至る間の長汀曲浦、あるは清見寺、あるは龍華寺、久能寺の堂塔、影獨り霞みて夢よりも淡く、



左には三保松原の風景、前と異りて蜿蜒一叢となり、松林海上に浮泛せるに似、三保の絶景爰に於て漸く知らるべきものなり。やがて船は江尻に着しぬ、此地は海水浴場として、最も適當の地た

るを以て、地方より夥多の浴客集まり來り、頗る騒鬧を極む。此日適々鮪の大漁ありしと見え、十數の小舟各數十尾を載せ來り、皆此地よりして陸揚し、直に汽車積に附せり、巨大なる魚躰累々として頗る壯觀、其錫を海岸に抜くや、海水血の爲に紅し、船頭曰く、一日の漁二千兩がものはあると、盛なりと云ふべし。

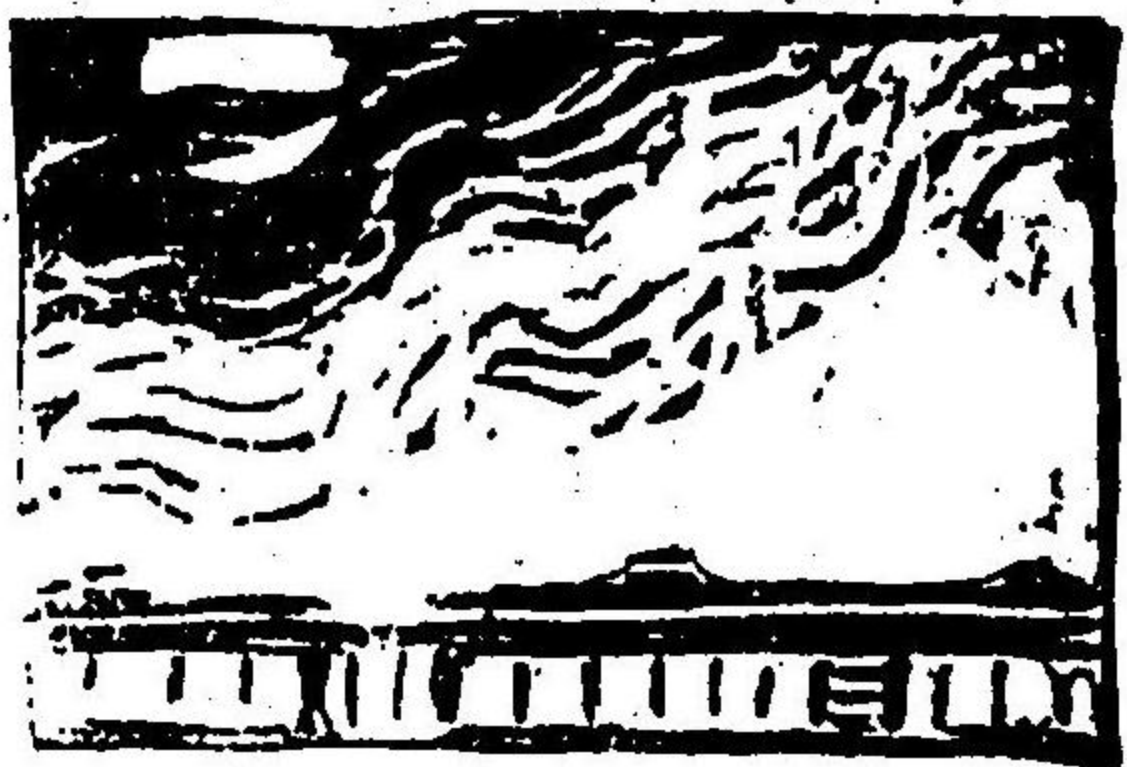
夜間の
汽車路

江尻は今興津静岡間の停車場ある地にして、古は武田氏の臣穴山梅雪の城ありし處なり、舊五十三驛の一なるも、今は僅に漁村の躰を備ふるに過ぎず。繁榮は寧ろ傍なる清水港に集中せるが如し。午後四時江尻を發し、静岡に着し、夕餐を了へて直に乗車し、近畿方面に向つて走る。宵闇の事なれば、車窓を開くも四隣暗燭、燒津島田の驛々も暗中に没し去る。時々蟲送りをなす燈火の、暉々として田野に輝くを見るは、時にとりての好景なり。大井天龍もいつし

濱名湖

彦根城

義仲寺



か過ぎぬ。濱名湖を渡る頃は、漸く月出て、湖上の風景頗る佳なり、然れども四隣の状況は雲煙模糊たる間に之を認め得るのみ。彼所は濱名橋の遺跡ぞや、こゝが寶永年間に切れ去りたる跡なりや、源太夫山、關所址等もよくも見えず、汽車は唯韋陀天の如く西走す。かくて眺めもいつしか果て去り、凡庸なる三河の山々、見るべき所もなく、蒲郡海濱の眺望も常に見る處なれば、寧ろ眠るを可とすと、二人室内人なきを幸に、身を伸して暫くガタ／＼夢を結ぶ。關原の寒さに心付き、彦根城を東天紅の間に眺め、野洲、愛知川の邊、琵琶湖の東岸を茫然たる間に通過し、勢田長鐵橋を打渡り午前七時頃馬場驛に着す。停車場を距る數町にして、義仲寺あり、壽永三年木曾義仲の粟津原

に戦死するや、此處に葬り德音院義山大居士と謚す。馬場の一僧此處に庵を結び義仲寺と稱す、義仲の石塔は寶篋印形の小形なるものにて、其建設年代はもとより後世のものなるべく、亦屢修覆を加へたる跡あり、然れどもその此地に葬りたるものなることは、蓋し疑を容れべきものにあらざるべし、

義仲の塚に並びて俳祖芭蕉翁の墳あり、芭蕉が諸國に行脚して、遂に大阪御堂前花屋に歿し、「木曾殿と背中合せの寒さかな」の句を遺して、此地に葬らしむ。其角乃ち「なきがらを笠にかくすや枯尾花」と吟じて、此處に收む、げに俳人の所行、事の巨細を論ぜず、さすがに詩趣に富めるを見る。



大津市

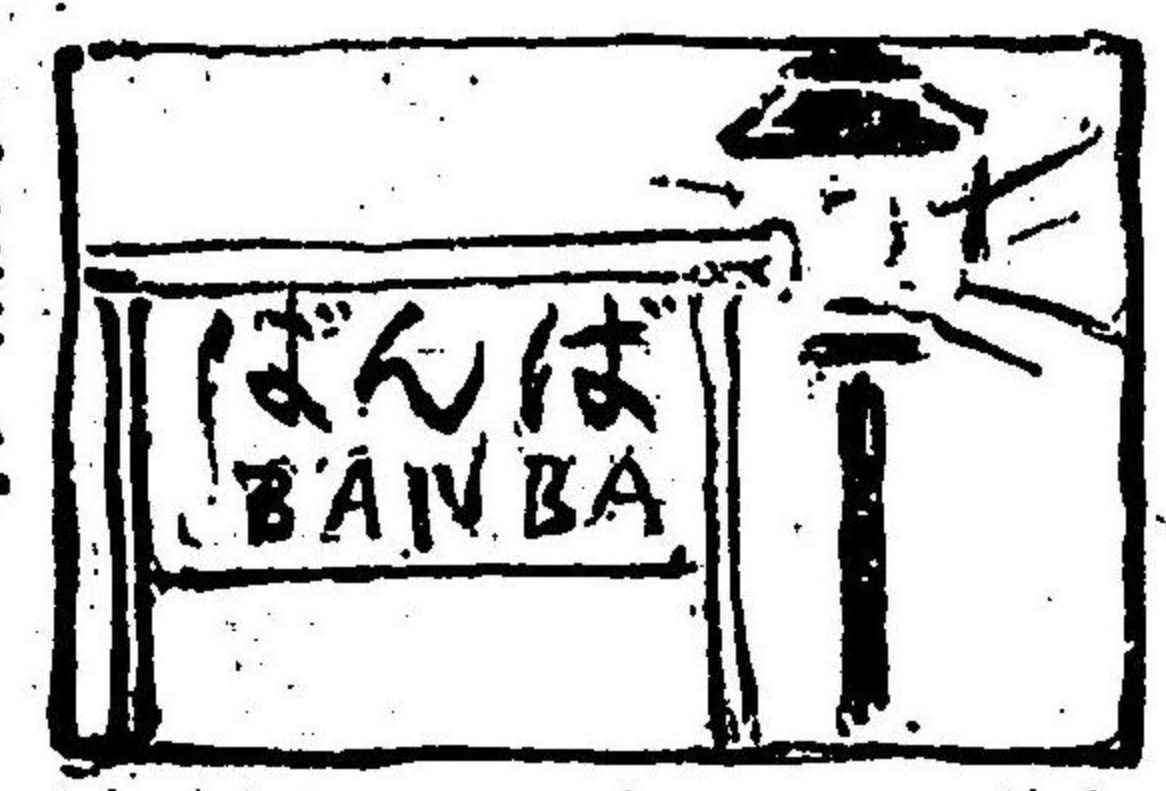
芭蕉の墳

近江の固め

逢坂關 三關

高穴穂宮 大津宮

湖上に泛ひてこゝに荷掲げするの所なれば、交通上、商業上極めて必要の地にして、近くに京都の繁榮なるに拘らず、こゝも相當の繁榮を保ち、今やすでに市制を執行せり、加之、此近江の國は、中央に大湖を控え四方は山を以て圍まれ、四境已に天然の固めあり、山城との間には逢坂關ありて之を守るべく、東海道に鈴鹿東山道に不破、北陸道にの地に都し給ひ、之を志賀高穴穂宮と申しよし、古史に見え、天智天皇またこの志賀の大津に都し給ひし事は、史上最も著しき事實なりとす。天智天皇のこゝに都遷し給ひし理由は種々あるべけれど

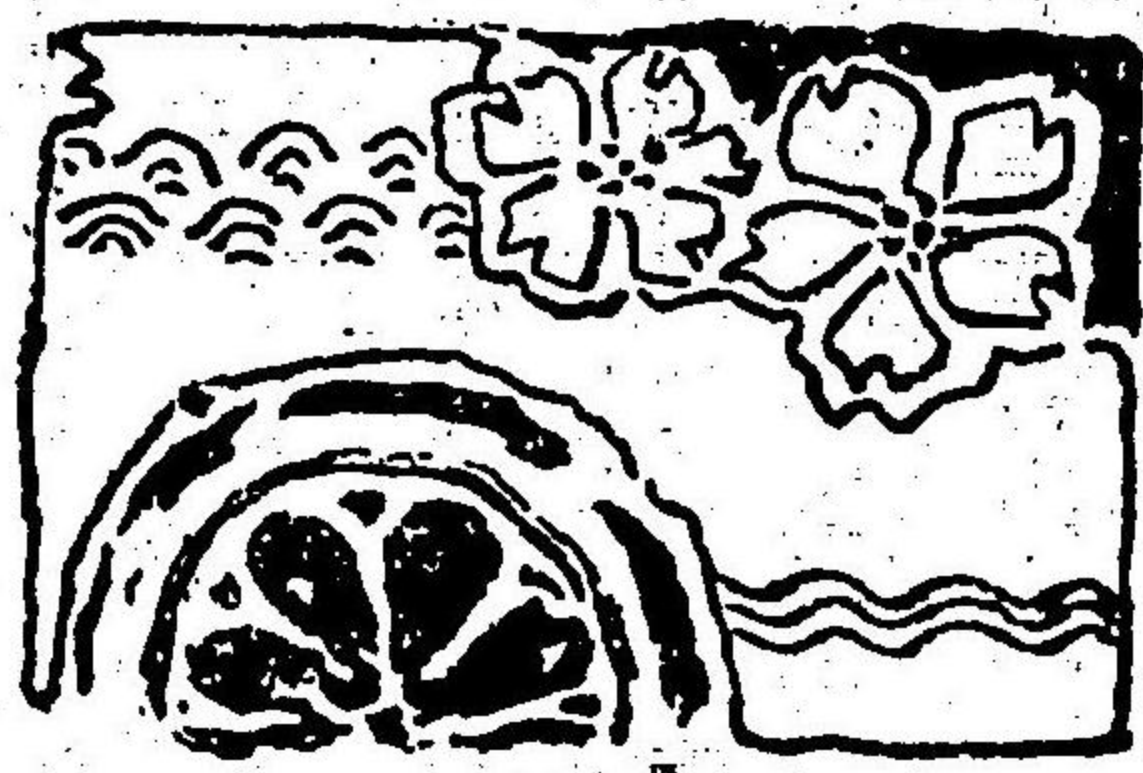


近江荒都

蝦夷征服東北開拓の當時、東方、殊に北陸、越の國への交通の便を圖り給ひし事、主なる原因なるへし。或は大和に於ける、改革反對者の鋒を避け給はん爲に、此要害の地に移り給しの理由もあるへし、とに角、要害と交通とに重きを置かせ給ひしは明なり。然るに天皇崩御の後、忽ち大津吉野の争となり。弘文天皇山前に崩し給ひてより、

漣の志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山櫻かな



の嘆あらしむるに至れり、而も天皇の御紀念としては園城寺の残れるあり。大津の市街また、多少其位置を變じたるの赴はあるも、尙天智天皇の遺徳を千載の後に残す。

大津の市街は前に琵琶湖を擁し、街衢頗る繁盛、商家豊を列して甚

園城寺

だ般昌なり。直に長等山園城寺に詣づ、亦例の險磴を攀ぢて寺境に入る、時猶早うして茶肆人氣なし、寺境眺望絶佳にして四顧洞達、湖上の波靜にして鏡の如く、旭日之に影じて暉々燦爛たり、大津市



街脚下に集まり、近江八景の風色一眸の間にあるが如し。園城寺は三井寺と稱す、天台宗寺門派の本山にして、弘文天皇の皇子大友與多王の創建にかゝり、大友村主の氏寺たり。貞觀中僧圓珍中興し延曆寺の別院に列せしめ、台教傳法の道場となす。其由緒歴々として古來頗る著名の寺刹なるも

山門延曆寺と屢々疾惡して鬭争し、爲に火災毀壞に遇ひ、大に衰微したり。之を舊史に徴するに、其昔正曆四年に於て慈覺智證の兩門徒分離し、智證の徒叡山を擯出せられ、承保元年には山徒當寺に

三井寺
焼亡

押寄せ放火す、當時焚焼したるもの二千四百餘所、小堂二字僧房十
四字を僅に残したるのみといひ、其慘狀細さに扶桑略記及び塙囊抄
に見ゆ。其後山門の徒に焚毀せられしもの一々數ふべからず。前大
僧正行尊が

住み馴れし我がふる寺は此ころや

淺茅が原にうつら鳴らん

と詠じたる新古今集に見ゆるもの、是れ應保三年の焚焼なり。治承
の時以仁王の事によりて亦放火せらる、其後猶屢々あり、凡そ千年
間に十度の炎上を受けしといふ。現今の堂宇は豊臣徳川の助力によ
りて成りしものなり。實に王朝の末より鎌倉の終に至る頃まで、當
時は延暦興福寺の諸寺と並び、當時の史上に著名なる僧兵を繰出す
本營にして、名こそ僧なれ、俗兵と何等の撰ぶ所なく、實に驚くべ

僧兵

き亂暴狼藉を極めたる處にて、扶桑略記の所謂、承保元年山門の徒
が放火したる以前の壯觀果して如何、峯を越え谷に渡りて壯麗なる
伽藍莊嚴なる堂舎檐を接して此一山の間を埋めしものならむ。今存
する堂宇には金堂を中央にして、唐院、三層塔、
五層塔、大講堂、法華堂、大師廟、寶藏、經藏、
鐘樓等之を繞れり。有名なる三井の晚鐘は八景の
一にて、もとは關伽井の南にありしに、今は金堂
の左方にあり、慶長中道澄法親王の寄附せられた
るものなりといふ。暇もなければ直に去て音にき
く辨慶の曳鐘といふものを見る、寺中の北隅なる裏坂の中腹に在り
今は周圍に小舎を作りて見料を取れり。中に立板に水を流すが如き
油を一升も呑みしといふ如き、頗る附の辯士あり、見物人來る毎に



辨慶の
曳鐘

種々の奇説を遠慮會釋もなくレビトせり、暫時拜聽せしも、遂に堪ふる能はず、兩人金二錢宛を差出して御免を蒙る。思ふに此鐘の由來甚だ明かならざるも、もと鐘樓にありし鐘の火災に際して墜落し、焚燒して谿谷の間に落ちたるを後に曳上げしものならん。辨慶は強力無雙の引合に出さるゝ人として、又かゝる所へも持出され、嘸かし地下に迷惑せること甚しからん。寺には又辨慶の汁鍋といふあり、僧兵時代の陣鍋にや、寺の盛なりし時、一山の衆の爲に臺所に用ひしにや、とも角之も大食の點にて辨慶を引き出すは、返へすくも氣の毒なり。三井寺を出て、疏水運河の水源に赴き所々の見物を了へたれば、逢坂山を踰えて城州に入らんと談一決して、西向して徐々に逢坂山の小勾配を登る、大津町の南端、片原町、關寺町、清水町などの町々を経て海拔百五十米突計の切通の隘道を通

辨慶の汁鍋

逢坂山

ず、是れ有名なる逢坂山なり。今は鐵道線隧道を穿て之を通じ、此往還を通行する者は、唯京津間に米穀を運搬する車を見るのみ、其の他は吾人の如き特志者にあらずは通行する者なし。此山は南は音羽、笠取、岩間の諸嶺に連り、北は比叡、比良につゞきて、江城兩國の境界をなす。逢坂の名の初めて物に見ゆるは書紀に、神功皇后武内宿禰、忍熊を追て此處に遇ひたり、故に逢坂と號すとあるを始とし、大化二年詔に近江狹々波合坂以西を畿内となすとあり、其名の古くより存したること明なり。相坂關の初めておかれしは何の頃かを詳にせず、日本紀畧延暦十四年の條に廢相坂剗とあり、文德實錄天安元年四月の條に近江國相坂大石龍華の三處に關剗を置くとあり、爾後廢せらるゝとなく京都を出て東向するに第一の關門たりしなり、されば王朝時代より此關所に付て歷代の歌集記錄物語の類に見ゆる

逢坂關

所少からず。江談抄の夢の談の如き、或は百人一首に見えて最も人口に膾炙せる和歌既に三首に上る、清少納言か孟嘗君の故事によりて、

夜をこめて鳥のそら音をほかるとも

夜にあふさかの關はゆるさじ

といひ、又伊勢家集に

夜こゆと誰か告げん逢坂の

關固むなり早くかへりぬ

といふ如き、當時關所の固め猶嚴重に行はれしさま知らるゝなり、

然るに關址に付ては沿革甚だ明かならず、名所圖會には、逢坂峠の東にて、大津の上片原町にあり、尼寺の邊とあり。



關址

關寺

後藤記に永祿八年六角氏が新關をちきしといふは、此上片原町の所なり。其以前の關は傳へて今の大谷町の西部にありしものといふ。源氏物語花鳥餘情に逢坂の關は杉の小蔭を通るといへり、古の關門ありし地と今の官道とは大差あるが如し。今の道の西山を相坂といひ、古は山下に茶店ありし跡あり、茶屋ヶ谷といふといへば、六角氏以後の關所と地の異なることを知らざるべからず。三井寺寺門記補錄に關寺は近松寺の南逢坂關の東に在り、關山を背にし東閭里に接すといへり。是等を以て考ふれば、清水町及上中下の關寺町は往古關寺の境内なりしが如し。關寺の遺址に付て先づ清水町近傍なりしが如し、牛塔といへるもの今長安寺の傍に形ばかり存ず。榮花物語扶桑畧記等に見ゆるもの是なり。中古の關址は猶考ふべきが如し。参考源平盛衰記に大關小關といへりとあり、されば吉田氏の説の如

關清水

く、大谷と藤尾との二路に設けしものか。俊基朝臣東下りに關清水に袖ぬれてとある清水とは何處か、拾遺集に貫之が

あふ坂の關のしみづに影見えて

今や引こんもち月のこま

といひ、壬生忠岑は古今集に、

君か代に逢坂山の岩清水

こかくれたりさおもひけるかな

とある如く、古來頗る著名のものなり。されども鴨長明の無名抄にさへ「さだかならず」とあり、今固より分らず。此邊一般に山の中腹より水湧き出で、溜まれるが如き所多し、此の如きは固より時によりにて涸渇する事あり、急に湧出し始むることあり、されば是なりと定むるが如き頗る愚の至なり。今關明神の鳥居の中に石を積みて中

を湛へて關清水なりといへるが如き、亦何人かの附會に出でしなり、従ふべからず。吾人一西瓜店に休し、水瓜を喫しながら主人に勧めて、汝の家の噴水を宜しく關の清水と稱して世に吹聴すべしと、主人笑て諾せり、亦一興なり。

これやこの行くも歸るも分れては

知るも知らぬも逢坂の關

とは蟬丸が關の傍に庵を作りて、往來の人を見てよめる歌なりといふ、然るに此蟬丸の祠は三箇の競争者あり、何れを真なりとも分らず、何れも蟬丸の庵址に建てしものといへり、一は上片原町、一は清水町、一は大谷町にあり、大谷町のは上片原町のを移したるなりといふ。なれども他の二は何れを何れとも區別する能はず、此の如き

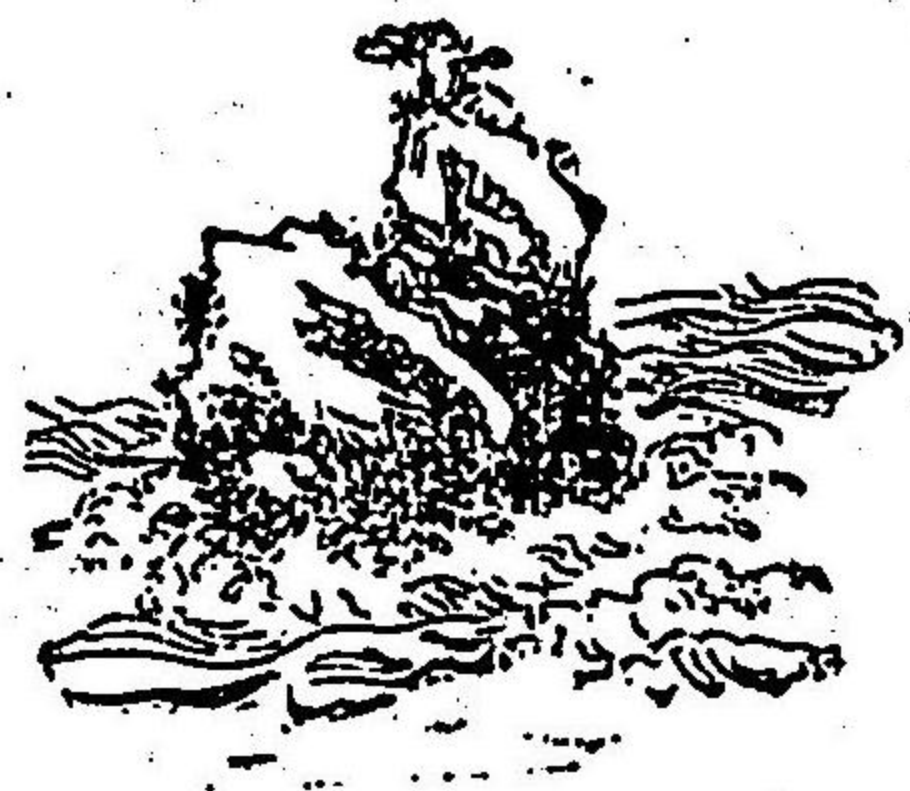


蟬丸の競争社

逢坂の
地理

は分らざること、却て事實なるべけれ、徒に牽強は申すまじ。上野磯部なる大野九郎兵衛の墓と並べて、競争の好一對なるべし。熟ら相坂山の地勢をみるに、崖高く谷廣き絶壁に似て、道路甚幽鬱なり、僅に數町に過ぎざれども、實に關を設けて往來の人を要するに屈竟の地たり。東は比叡比良の高峯相連り、南は音羽一帯の連脈ありて勢田川の一面に開くる所あるのみなり、されば此一路を通過するにあらざれば、江城兩國の交通、固よりなし得べきにあらず、猶箱根の關址が芦湖と箱根山彙との一小狹隘を扼せるが如き、衝點を占め居れるものなり、猶關址關寺其他交通の地理等に付て考證せまほしきも、紀行の本旨ならねば之を略きつ。かくて大谷停車場に出づ、汽車は十分前に發車せしと聞き、兩人の絶望甚しく、今更西瓜店に關清水の講義をなし、を悔ゆるも、亦及

ばず。猶次の發車に二時間餘もあれば遂に此地方に何處かの古址を吊はんなど、徒に歩を進め、追分に至る。叻は車を得て京都に飛ばし、鷗は再び大谷に歸り阪地に向ふ。之より一日を隔て、叻、鷗、兩人泉州堺に會し、更に杖を畿内五ヶ國に振る、事は題を改めて畿内横斷四日の旅として記すべし。



畿内横斷四日の旅

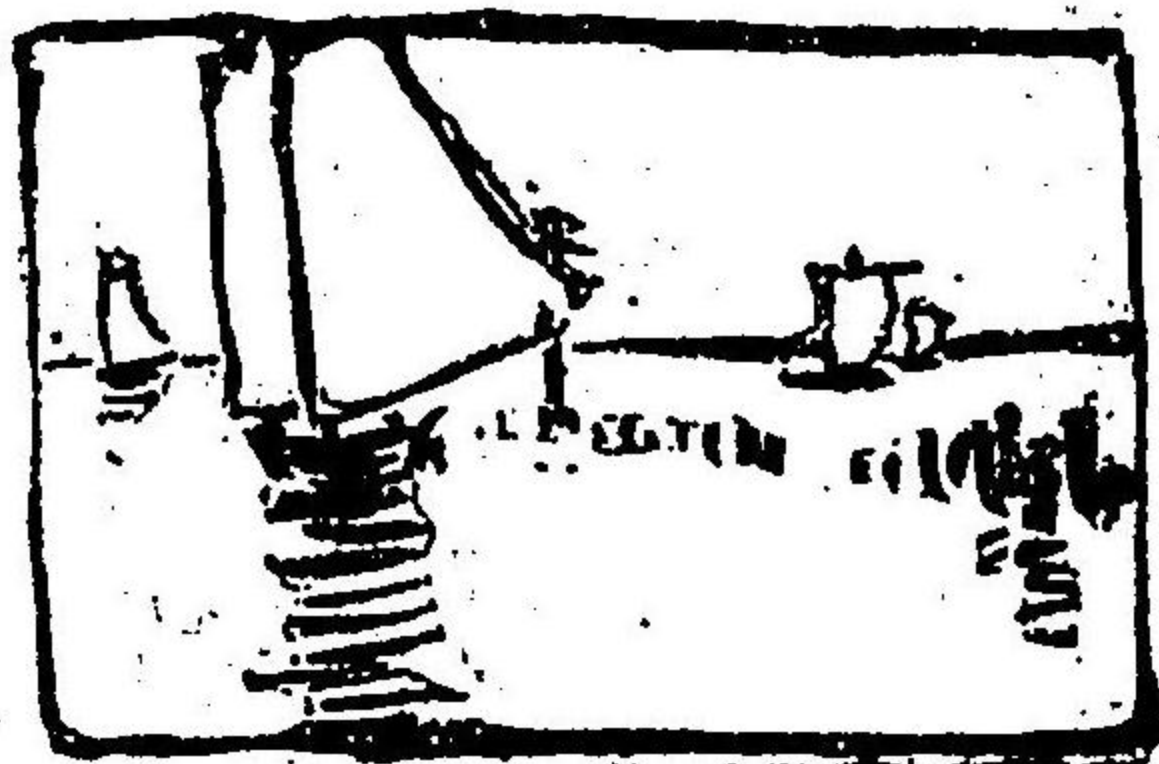
(東海道汽車の旅のつゞき)

吻 鷗

朝飯前に三井寺界隈を駆け廻りて、十分に減らしたる腹を、漸く逢坂越の水菓子屋に、西瓜とビスケットとを以て療しつ、關の清水のいらざる講釋に、マンマと汽車を先立たせては、今更後悔は先に立たず、一層の事此後れたるを利用して天智天皇の山陵を拜せばやと、負け惜しみ半分に出かけしも、さて歩行いて見れば地圖で見る程にも道は近からず、時計の針の運びと、親譲りのコムバスの運びとを比較するに、コムバスの方兎角遅くて、悪くすれば次の列車をも先立たせるといふ懸念頻りに起り、追分の道しるべの前に暫く評定

兩人の
分合

界



するに、鷗は、私は大谷まで帰りませうと云ふ、共に引き返しては追分を自今、後返りなど、改名せねばならぬ事と成るべしなど、減らず口たきつ、矢張り追分の名だけに、吻は之より分れて脚車で京都に入る。明後日は泉州堺に落ち合はん約束なり。かくて二日、吻、鷗約の如く堺に會す。道筋の奇談、及び踏査したる史蹟等は別録にゆづる。堺はもと攝津と和泉との境上にあれば此名ありと傳ふ、今は新大和川を以て兩國の堺とし、此市は全く和泉の部となれども、こは寶永年間新大和川開鑿以後の事にて、其前は、今の堺の中央を東西に横貫する大小路以北は攝津住吉郡の中なりきといふ、さる事もありしにや、此和泉と攝津との境界に就て

は、古來まばく變遷あり、嘗て天長二年に於ては、淀川以南の攝津の四郡、即ち東生、西成、百濟、住吉等の地方を和泉に編入せし事すらありしが、それは人民の輿望に反して、止めとなれり。堺の港は足利時代にありては、明國との貿易場として、商工業大に發達し、文學も亦頗る興れり、然るに秀吉大阪に移りて、繁華其方へ吸収せられ、新大和川こゝに開きて、港は無暗に淺くなり、妙國寺の蘇鐵は今も昔ながらに鯨子張つては居れど、昔の繁榮は今に見難く、金襴緞子を織り出して、大明風の美術の粹を極めし織り屋も、段通と聞いては、頭の上から足の下へ踏まれに下がつた感あり。音に名高かりし鐵炮鍛冶も、今はホンの響も無くなりて、庖丁と鍋釜のみでは、おなじ鐵器でも威勢わるし、などゝ悪る口は言ふものゝ、矢ッ張り昔ながらの所やさかい、今やかて五萬の人口があつて、京

百舌鳥野耳原

仁德帝陵

と大阪と神戸とを除けたら、上方にはこんな繁華の所は外におまへんさうなり。



堺の東南は百舌鳥の耳原の地にて、むかし仁德天皇が御生前にこゝに御陵を作らしめ給ひし時、百舌鳥が鹿の耳へ噛み付いて、鹿が死んだといふ騒ぎから、かく呼ぶと云ふ履歷付の所なり。天皇の御陵は即ち百舌鳥耳原の中の山陵と申し、日本一の大きさにて、御堀の廻りが十八町、恰も大きな山の如しとの事で、世に大山陵と稱す。一昨年とかい、此天皇の一千五百年に相當するとかにて、大阪市は天皇宮址のある地なれば、其地を求めて紀念碑を建設し、こゝに大祭を執行せりといふ、面白き證據によりて定められたる宮址も妙なり。亦日本紀の紀年によりての一千五百

年も妙なれども、とも角天皇の御仁徳は、長しなへに薫ばしくして、近ごろ更に御陵大修繕、取擧げ工事中なり。此工事によりてお堀の中より數多の珍らしき埴輪を堀り出す、牛あり、馬あり、鶏あり、鵜あり、馬具など殊に精好なるものありきといふ。

大山陵の北に反正天皇の陵あり、百舌鳥耳原の北の陵と云ひ、南に履仲天皇の陵あり、同じく南の陵といふ、此耳原の地で、古書に現れて居る山陵は此三陵のみ。然れども此邊一帶に、古代の帝室又は權門の御葬地でもありしにや、大なる、小なる、堀を繞らせる、堀を繞らさぬ、或は堀の水の干涸らびたる、丸形なる、瓢形なる、無数の古墳、算を亂して存在せり。

此等の古墳の中にて、最も大なるは勿論仁徳天皇陵なり、今の御陵兆域の大きさは、周圍千二百四十六間とかなれど延喜式には東西八

仁徳帝陵

町南北八町とあり。泉州誌に記する所によれば、當時存する所、外堤千二百八十三間、即ち約二十一町半、中堤九百五十五間、即ち約十六町、山の根七百六十三間、即ち十二町半餘、前峯高さ十四間、後峯高さ十六間四尺、陪塚九個とあり、誠に大山陵の名に背かず。確か英人チャンペン氏であつたと覺ゆ、仁徳天皇の御名を大鷦鷯尊と申すは、生誕の際の瑞祥を平群の木菟と取り換へたる故なりと古史にはあれど、あれは謠にて、御陵が極めて大いなるより、後に稱し奉りし御名ならんと説ける事あり、面白き觀察なり。明治五年とかに此御陵崩壊して、石槨現はれ、其中より玻璃の鉢二個出でたりと、黒川博士より聞きたる事あり、此陵は所謂壽藏にて、天皇御生前に造らせ給ひしもの、天皇の御威勢の盛なりし事以て見るべし。或人此御陵を見て曰く、天皇を勤儉の君なりと云ふ信じ難きに似た

履仲帝陵

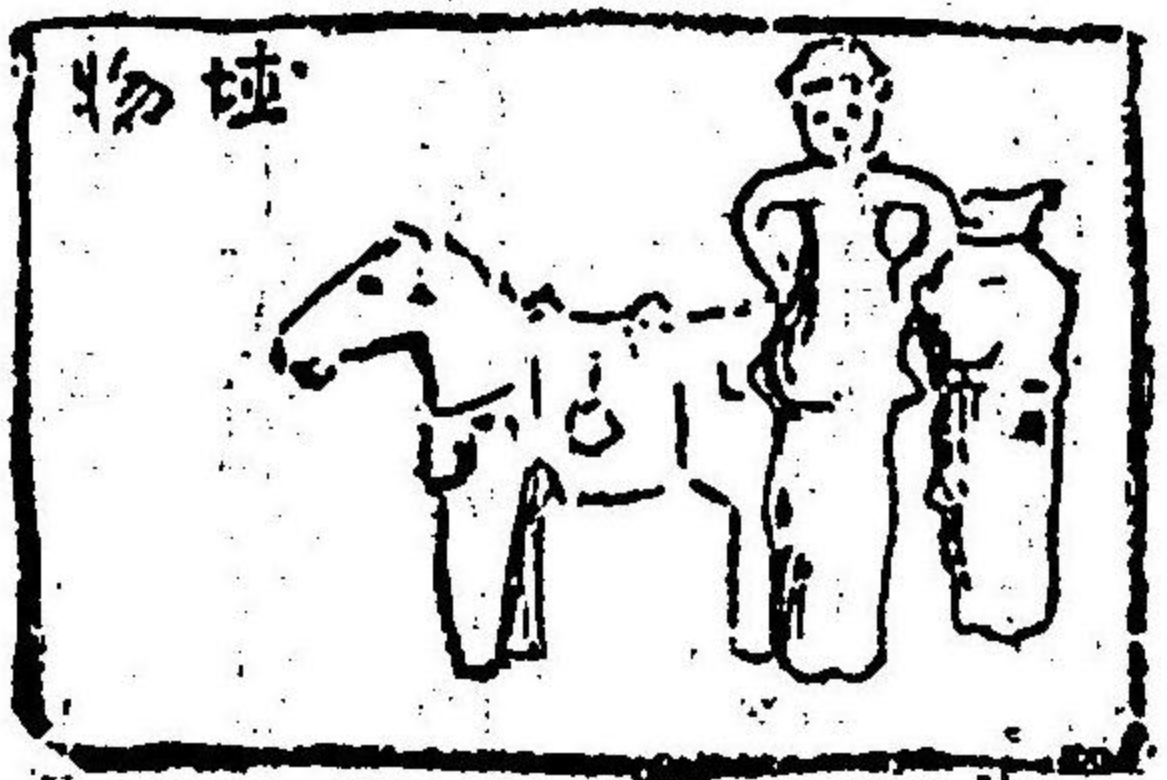
りと、余曰く、庶民子の如く來りて工に従事す、依て此大を致し、ものと解すべきかと、とも角大きなものなり。
履仲天皇陵大きさに於て此に次ぐ、延喜式にも兆域東西五町南北五町とありて、泉州誌には、お堀りの廻り八百八十三間、即ち十四町四十三間、凡そ一哩なり、山の根は六百三十六間、即ち十町半餘、前峯高さ十四間、後方十六間とあり。

反正帝陵

反正天皇陵は更に小なり、皇宮御勢力の消長する所、亦以て見るべきに似たり。延喜式には東西三町南北二町とありて、今は大に修繕して、お堀を繞らしたれど、泉州誌記する趣によれば、周塹も埋もりてなく、僅かに田となりて存し、山の根總て二百三十間、即ち四町にも足らざりしなり、土地の人の言ふを聞くに、維新後此御陵を修築する迄は、山上に或る人の別荘ありしと、誠ならば恐れ多き事なり。

土師陵

り。
反正天皇陵よりも、其何人のなりやを詳にせぬ古墳に遙か大なるものあり。其最も大なるは、西百舌村村大字百濟の東方にあるものにて、土地の人は之を「ニサンザ」又は「ミサンザ」といふ、文字など捻くる人は御山座の義ならんなど云へど、古來これをミサンザと稱するより考ふるに、泉州志の所謂土師陵なる事明なり。ニサンダ、ミサンザ、共にミサ、ギの轉訛なる事疑ふべからず。泉州志によるに、此陵周塹の回り八百三十一間、即ち約十四町、後峯高さ四十六間、前峯高さ三十四間、俗に反正天皇陵とすれども、これ誤りなる由を記せり、實にそれは誤りなれども、高貴の御陵たる疑ふべからず。仁徳、履仲、反正諸帝の皇



后陵何れも古史に記載なければ、今に知るよし無けれども、此邊に散在する高貴の陵と思はるゝもの、中には、此等の諸皇后の御陵の混じて存在する無きを保せず、強て推測せんには、此土師陵は、仁徳の皇后八田皇女の陵を以て擬せんか、俗に神功皇后の舊陵なりとの説ありと云へど、素より従ふべくもあらず、此山數十年前石材を得ん爲發掘せりとの説あり、北方の陪塚上の石、亦近年架橋の爲他へ移せりといふ。

御廟山

御廟山大さに於て之につぐ、土師陵と大山陵との中間にあり、吉永悦卿といふ人の大阪朝日に寄せたるものによるに、周漣の回り三百四十間、水洋々舟を泛ふべし、陵上樟樹枝を交へ、蔚然として森林を成す云云、こゝに毛須八幡宮あり、古來此陵を應神天皇の舊陵なりと稱するによりて此神社あるか。古事記に天皇陵は川内惠賀之裳

伏山岡にありとあり、こは今の河内古市郡の譽田陵をさす事勿論なれども、古事記の分註に、百舌鳥陵也とあるを見れば、之を天皇陵なりとするの説も古きが如し、和泉もと河内の中なれば、かく故事附けん、故事附けられざるにもあらず。毛須八幡社家の説には、はじめ應神天皇はこゝに葬りしに、後譽田陵に改葬すとあるよし、兩方の顔を立てたる仲裁説なれど、六かしい哉。此山官有にして、樟樹に富むの故に、公賣に附するの議あり云々。○大阪朝若し眞ならば舊蹟の荒廢、其恐なしとせず。

右の外前方後圓の古墳、之に屬する陪塚、其他の小塚甚多く、一々列舉し難し、中にも御廟山の西南なるイタスケと稱するもの、周漣二百七十間、履仲陵の南なる大塚と稱するもの、之は堀埋れて田圃となる、周圍二百五十間位、など、最も大なるものなり。又大山陵

累々たる古墳

の南に長山といふあり、之も堀は稻田いなだとなりて、尙百間位の周圍ありとか、上石津村かみいしづの東の乳岡山ちのおかは、泉州志には山の根二百三十六間、前峯高さ四間、後峯七間と記るしたり、之は野見宿禰のみのすくねの墓かとあれども、固より據なし。但、此地方和名抄わめうしやうに土師郷はにしとありて、古へ土師氏はにしこゝに住し、今も土師村あるを見れば、野見宿禰の子孫は、大和菅原の地より、早くこゝに移りしは明なり。土師氏は土器を作る氏人にて、古く此地に住し、崇神天皇すじんの時に已に陶たうの村あり、今の陶器村たうきは其名殘なり、斯くて土器を作る土師氏は、また墳墓に樹つる埴輪はにわをも作り、葬儀にも關係するに至りしものにて、孝徳天皇崩御かうとくの時に、百舌鳥ももぢの土師連はにしのらぢ土徳を召して殯宮ひんきやうの事を主らしめし事、日本紀に明文あるなり。

和泉國の古墳、もとより此外にも甚多し、こゝにはたゞ堺市の近傍のを擧ぐるのみ。

大阪に

大阪の地上
古の地

此等の古墳を採檢したる我等は、翌日南海鐵道の便りを借りて大阪に出づ。行くてを急ぐと、度々見馴れて珍らしからぬによりて、住吉、天下茶屋など降りても見ず、素通りに難波の停車場に至り、豫て此行の調査の目的の一としたる、高津宮址かうづのみやうぢ、仁徳天皇の難波堀江址など、近ごろ大阪市の考定せるもの、和氣清麻呂わけのきよまろの攝津大夫たりし時に計畫して失敗せし荒陵あらかの堀江址に低き平野を成せども、太古には此等一帶の地海水の浸す所なりしと見え、其ころ難波崎ななばさきの名あり。然るに此地は山城大和河内三國の



諸水の盡く集合する所なれば、下流に土砂の堆積する事極めて夥しく、今や遂に現形の如き陸地をなし、寶永年間大和川を南方に移し、安治川口を開いて大に河道を改めたる後と雖、尙常に浚濬工事を要する程なり。されば仁徳天皇が、此丘陵に都し給ひし時には、もはや、もとの難波埼ではなく、此丘陵の四邊は郊澤曠遠といふ有様となり、而も未だ田圃は少なく、河底は土砂に埋りて淺くなりたれば、河水横に流れて、流末滯滞し、聊か霖雨に遇へば、河水また逆上し、巷里船に乗り、道路泥土を以て被はるゝに至る。○仁徳天皇勅即ち宮北の郊原を掘りて南水を引き、以て西海に注ぐ、之を難波堀江と云ふ、郊野を穿ちて新河道を作れるなり、之れ即ち後の堀江川にして、淀川流末の一派及び、大和川も亦之に注ぎし事は、磐之姫皇后が、堀江を浜りて山城に入られしにても明なり。されば、此

高津宮址

川の、今の大川なるべきは疑を容れず。

かゝれば仁徳天皇の宮址は此堀江の南なるべく、近ごろ大阪市が考定したるもの、誤謬なるべきは、分明り切つた事にて、已に我等が數回「歴史地理」誌上にも述べた所なれども、尙其實地をも見、如何なる紀念碑の建ちたるかをも知らんとて、こゝには來れるなり。

空堀

空堀は其名の如く誠に空渾なり、大阪城の三の丸の外を限る爲のものにして、もとより堀江でも何でもなし、我等之を昇りつ降りつして、漸く真田山に至る、真田山は空堀の外部にある小丘にして、大坂役の際真田幸村こゝに出丸を作りて敵に備へしものなり。今實地に臨むに及びて、我等の所見の益正確なりしを確むるを得たり、此等の事、已にくだしく度々述べたれば、こゝには言はず。

味原池

空堀より南して味原池といふ池の堤上を横ぎり、桃多き所を過ぎて、

紀念碑建設の地に至る。此味原池といふが一躰問題なり、例の偽作難波圖にありて、此圖を疑ふ程の人にも、此池の名は正しきものゝ如く思ふがある様なれども、我等の見る所にては、大躰こゝを味原といふが已に根據なきを覺ゆ、味原池に關する事、固より未だ古書に出づるを見ず。古歌に三原池とあるをこれに擬するも如何あらん。此地を味原とする事、孝徳天皇の味經宮をもこゝへ引きつけんとする、例の難波圖偽作者の慾張りたる横着より起れるならん、此事別に考證して公にすべし。

今定高
津宮址

高津宮址紀念碑は誠に立派なるものにて、「高津宮地」の四字は宮様の御筆を煩はし、鏽のつきたる花崗石の大きな自然石に深く彫りつけ、鐵の玉垣を繞らし、四方に空地を設け、前面に一町餘の道あり之に通ず。切り立ての花崗岩美しく、敷きたる砂利誠に美しく、草

一つ生やさぬ所、土足で踏むに勿躰なき心地す。京都市に先年桓武天皇奠都一千百年祭を執行して、其大極殿の遺址を表彰したる紀念碑に、其時には立派なるものが出來たものと感服したりしも、今之見るに及びては、遙かに其れよりも立ち勝りて見えて千萬歳動かざるを覺ゆ。而も此地點指定の理由が、大阪市の發表したる高津宮址取調書の如くれば、全く例の難波偽作圖や、寛政比に爲にする所ありて、かれこれ悪戯を成したるもの共の術中に陥りたるものにて、毫末も正證なきもの、是を思ふて此を見れば、立派なるだけ夫れだけ殊にお氣の毒なる心地す。



荒陵
天王山
寺

○偽作圖の事は歴史地理二卷七號を見よ

桃林を出て、南し、天王寺に至る、荒陵山四天王寺あり。こゝを荒

荒陵

陵といふ事、茶臼山チャウヤマの荒陵あるによる。茶臼山何人の墳墓たるを知らず、前方後圓の偉大なる古墳にして、堀の一部分は水涸れたれども、尙其西南部は水満々と湛え、いたづら小供の數群りて泳げるを見る。固より極めて有力なりしもの、墳墓たるを疑はず、而も其子孫の斷絶せし爲か、其傳説を失して有名なる荒陵となり、遂に地名と迄成れり。荒陵の名古く已に日本紀仁德天皇の條に見ゆ、此名、日本紀著者の追記と見るに見られぬ事はなけれど、荒陵の松原の南道に當りて忽ち兩歷木生じたり」と傳へたる所を見れば、荒陵と成つた時代の古さも推測し得らるゝに非ずや。天王寺に傳はる聖德太子の御手印縁起ミテノイミヅノキといふものに、此荒陵を仁德天皇の舊陵にて、天皇はじめこゝに陵を作り、後百舌鳥耳原に移せるなりとの趣を記す、固より従ひ難し。こんな事を書いて置くから御手印記迄が人に疑は

阿部野の古墳

れるなり。

荒陵より南方、安倍野、住吉より、和泉の百舌鳥に至る迄、古墳頗る多し。南海鐵道で塚より來る道すがらにも、住吉神社の北に、小松の一二本生へたる奇麗なる芝山あるを見たり、之も其一つなり。此等の古墳中、百舌鳥の三陵の外は、何れも荒墓となりて、祀り人もなきに、ひとり安倍野の大名塚のみは、如何なる故にや古く享保の頃に於て、已に北畠顯家卿の墳墓と間違へられて、飛んだ尊敬を受ける事となり、今は別格官幣社も出來て、鄭重なる祭儀に預る事、仕合せよき墓といふべし。近ごろ顯家卿泉州石津に討死したりとの神皇正統記の文句専ら世に重きを成して、此墓の風向き悪くなり、神社を石津に移轉せんとの請願を成さんするものある由なれど、二百年來受け來たる尊敬は、時効によりて既得の權利となりたれば、

容易に失ふ事はなかるべし。

天王寺は我等しばし詣て、珍らしくなければ、行くてを急ぐ身のよくも見ず、茶亭の鮓に腹を拵らへて直ちに茶臼山の南に出づ。後にて聞けば、近ごろ「巻物石」として石棺の蓋を置いてあるよし、見ずに過ぎしは惜しき事なり、他日の再遊を期せんのみ。

茶臼山の南に低地あり、西に通ず、これわけ和氣清麿きよまろが掘りかけて中止したる堀江の址なり。仁徳天皇の時難波堀江を掘りて南水を西海に通ぜしも、其後また流末埋もりて、爲に清麿此工事を起す、遠く北方迄浚濬して度々埋もるの姑息工事を成さんより、一舉丘陵を横斷して永く禍根を斷たんとせしなり。其事の英斷なるだけ、それだけ無鐵砲にて、單功二十三萬人を役し、工遂に成らずして止む、此工事中止の事日本後紀、和氣清麿傳○群書類等に見ゆれど、寛政の頃

堀江

關西鐵道

河南鐵道

叡福寺

まで此等の書は世に流布せざれば、以前の學者に單は續日本紀の記事により、清麿が堀江を開鑿せし事をのみ知りて、其成らざりしを知らず、故に古き地誌多くこゝに堀江のありし事を記す。難波圖偽作者亦之により、こゝに堀江を描出して河内川の水の直ちに西海に通ずる趣に作り、以て其化の皮を現はす、小氣味よき事共なり。

天王寺驛より關西鐵道によりて河内柏原に至り、更に河南鐵道列車に轉乘して喜志驛に至る。磯長、通法寺邊の史蹟を見んとてなり。

東して石川の清き流れを渡り、先づ太子に至る、太子の名聖徳太子の廟あるより起る。叡福寺あり、秀頼の再興にかゝる、椽側の勾欄の擬寶珠に刻して曰く、



河内國石川郡叡福寺御太子堂御再興、内大臣豐臣朝臣秀頼卿奉鈞命御奉行伊藤左馬頭則長、于時慶長八曆癸卯十一月吉祥日

秀頼は徳川家康の勸誘によりて各地の神社佛閣建立再興に巨多の資を費し、最後に方廣寺洪鐘を鑄るに及びて遂に其の乗ずる所となれり、今此堂に上るに及びて、追懷禁ずる能はざるものあり。

聖徳太子の墓

太子の御墓は本堂の上方にあり、太子の御母及び妃を併せ葬むると稱す。圓形の古墳にして、古來之を御墓山と稱し、其周圍は、經文一字宛を刻したる結界石を以て繞らす。すべて二重、上層にあるは梵字を刻し、弘法大師の建つる所と稱す、此もの年と共に腐朽したるが故に、享保年中更に下層のものを作れるなり。古來上下の尊信厚く、御墓の後方には無数の五輪石塔婆の堆積せるを見る、蓋古く信徒の寄進にかゝるものか。

瑪瑙碑

寺に有名なる瑪瑙の碑を藏す、太子生前に豫め作りて地中に埋み置かれしに、天喜二年に忠禪上人之を掘り出せるなりといふ、我等急ぎの旅行に、之を拜觀するの暇なかりしも、古事談の記する所の如くんば、誠に恐入つたものなり、其碑の文中に曰く、

吾入滅以後、及四百三十餘歲、此記文出現哉、爾時國王大臣發起寺塔、願求佛法耳、

斯の如くにして、寺塔の建立は成つたものと見ゆ。僧侶の善巧方便かは知らぬど、むしろ太子の徳を傷くるなからんや。天喜二年は恰も豫言の時に相當するなり、尊い哉。

陵墓

此地方は磯長と稱し、陵墓多し、御陵には、敏達、用明、推古、孝徳諸帝のあり。何人のとも知れぬ古墳は例によりて其數多く、高屋連牧人、紀廣純の女吉繼、采女竹良等のは、嘗て其墓誌、墓標を掘り出したる事あるによりて明と成れり。此外大なる多重塔の極めて

古きもの、路の傍、山の端などに多し、叡福寺の前方の丘上、西方
 尼院の傍に、三塔相並ぶもの、之を月益、日益、玉照姫の墳となす。
 太子の乳母のよしなり。之より少し東へ行けば、路傍に同じ位の多重
 塔ありて、馬子の塔といふ、共によい加減のものなるべし。
 磯長より南へ出づれば、南北朝頃の史蹟多けれども、それは再遊を
 期する事として、西北、通法寺に出づ。

通法寺

通法寺は一に靈井寺といふ、源頼義の建立にして、頼信、頼家、義
 家三代の墳墓あり。此地は源頼信が河内守たりし時、こゝに邸宅を
 構へしものと見ゆ、寺は今廢して、僅かに門一字を残す、白鬚の生
 へたる老翁、もとの門衛の詰所より出て、我等の爲に茶をすゝめ、
 寺の由緒、もと立派なりし事、寺格のよかりし事、維新後住職の不
 心得より遂に此荒廢を見るに至りし事、自分が三十餘年間こゝに住

頼義の廟

頼信頼義の墓

する事、慷慨悲憤禁じ難き事、源家の墳墓も今に廢たれて仕舞ふべ
 き事等を説く。頗る詳密、熱心其面に現はる、話説半分に聞くも、
 尙時勢の遷移に憤慨せざるを得ざらしむ、門を入れば、左上方に頼
 義の靈屋僅に存す、彫刻
 なども立派に、もとは見
 事なる建物なりしならん
 も、今や瓦落ち、柱朽ち、
 椽板剝落してまた上るべ
 からず。



震の時伽藍破壊し、再建の際石棺を掘り出す、開き見るに御骨歴然
 たり、とあり、然らば此石棺の出でし所は本堂のありし邊なるべき
 が如し。又曰く、

更に門を出て、左する事二
 町餘、紆曲したる磴道を上
 れば、山上に頼信義家の二
 墓、相對するあり、町餘を
 隔つ。永徳三年○後小松帝即位の年
 の古文書によれば、先年地

殊此在所猶在御實院、自身撰地植松被築御廟、伊豫入道殿、八幡殿、被立三基之
石塔、並有御建立墓堂云云、

之によれば頼義義家の石塔もあるべきなれども、今見る所なく、却
つて頼信義家の墓と稱するもの相並び、頼義の廟がひとり離れて本
堂の傍にあるなど、不審なきに非ず。若しくは掘り出したりといふ
石棺は此頼義の廟の下に埋めあるべきか、其石棺と云ふは果して頼
義のなりしか、尙不審なり。然れども、とも角由緒正しき寺として
今此荒廢を見、僅かに残れる頼義廟も、作る、事今兩三年を出てし
と思へば、門番の老爺ならぬも、懷舊の念禁し難し、近ごろ出來た
る帝國古蹟取調會などは、先づ此等のもの、調査保存を圖るべきな
り。

壺井八幡宮

通法寺を出で、壺井八幡に詣づ、此社康平八年源頼信の建立にして

頼信告文

其氏神八幡大菩薩を祀る、もとは魏然たる大社なりしも、今は頗る
衰廢せり。頼信が此社に納めしといふ告文の寫し、石清水の社家に
あり。一度史學雜誌に現れてより、從來清和源氏と何人も信じたり
し源家一流は、清和天皇の後裔にあらざして、實は陽成源氏なりと
いふ途轍もなき一新説を出だすに至り、告文に曰く、

大菩薩の聖體は忝くも某廿二世の氏祖なり、先人新發、其先經基、其先元平親王、其先
陽成天皇、其先清和天皇……其先繼體天皇、其先彦主王子、八幡宮五世の孫なり……

此文書眞物となれば、清和源家一流變じて陽成源氏とならざるべか
らず、又此文書によりて源氏が八幡宮を氏神となす由來も知らるゝ
なり。

壺井社を出て、石川の流れを渡り、北に進んで安閑天皇の陵を拜す。

安閑帝

道筋に古墳少からず。

安閑帝陵は古市村字古屋敷の北にあり、皇后春日山田皇女の古市高屋陵また其ほとりにあり。天皇陵は前方後圓の大丘陵にして繞らすに濠を以てす。東に石川の流れあり、西及び北には其支流の繞れるあり、自ら形勝の地を成す。茲に於て畠山氏は、此形勝を利用し、南方を限るに溝渠を以てし、二陵を中に取りこみて周圍に城壁を築きて、所謂高屋城となし、御陵の御堀は直ちに内堀に代用して中に本丸を築けり。戰國亂離、皇室式微の世とは云へ、恐れ多き事ならずや、かゝれば當時にありても、尙其威靈を恐れしものによ、續應仁後紀の記する所によれば、

當城は昔安閑帝御廟所の跡なり、恐れ敬ひ本文をば違さけ、二の丸に居住す、とあり。應仁後紀にも、

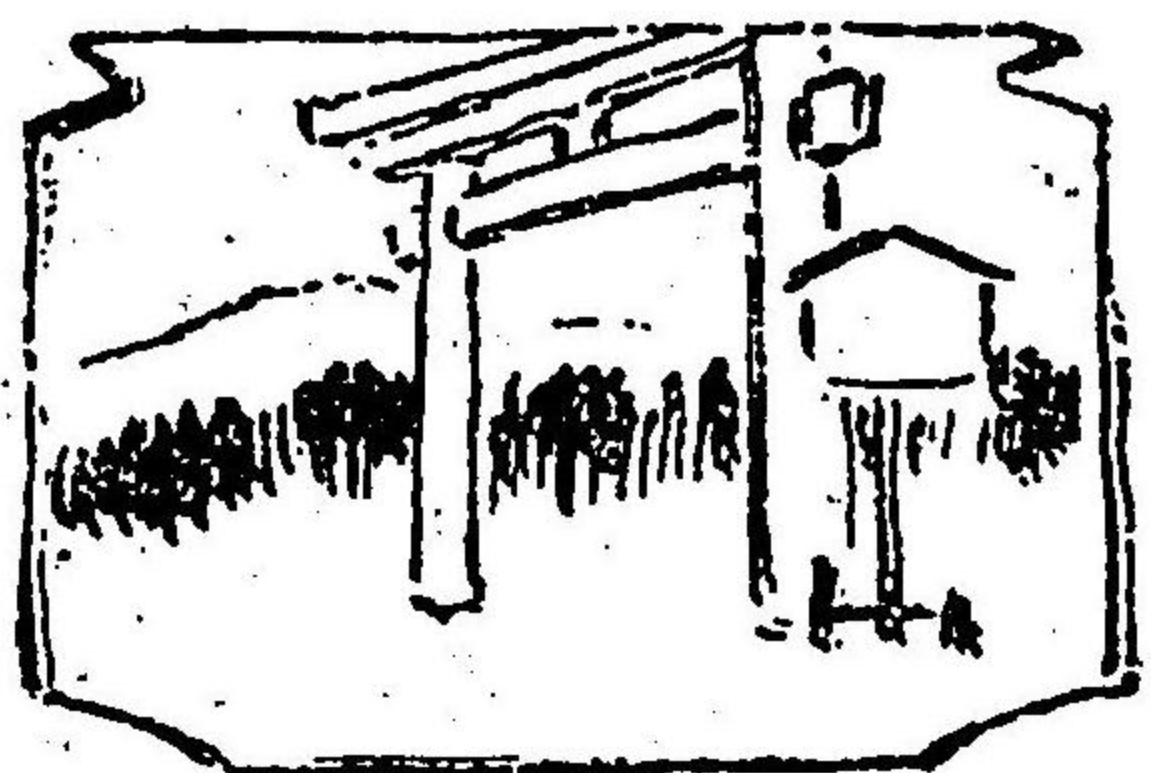
御陵を
城地に
利用す

抑高屋の城は、安閑天皇の御廟所なりけるを、要害よき所なりとて、尙順國日始て城廓に取り立て居住せられしが、靈神の崇りにや程なく落城したりける、

と記して、落城の原因を説明せり。誠に古墳を城に利用するはよき思付には相違なきも、不都合言語に絶すと云はざるべからず。

白鳥神

御陵の東に新道あり、路傍の土層中偶々焼けたる布目瓦の破片を得、高屋



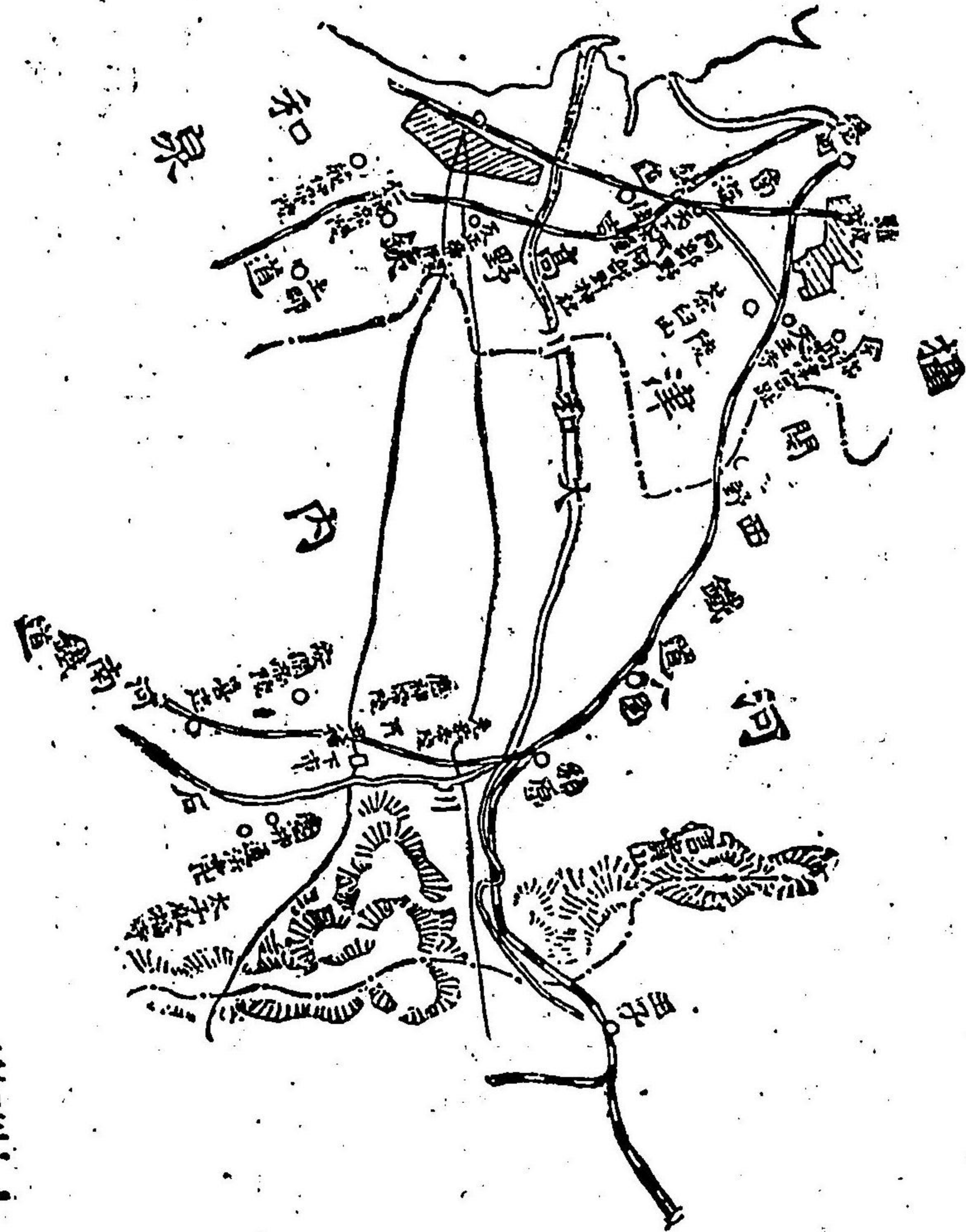
町に入りて、白鳥神社に御陵を離れて西方に日本武尊の白鳥陵、清寧天皇陵等を遙拜し、古市の

累々たる古墳

詣つ。此社また古墳らしき小丘の上に立てり、此上にのほりて西北を遠望すれば、大小無数の古墳の散在せるを見る。實に此地方は奈良の西方、和泉の百舌鳥野などと共に、古代皇室の御葬地にてもや

古市

ありけんと思はるゝ程なり。さればこゝにも字を土師といふ所あり
 大和の菅原、和泉の百舌鳥など、共に古墳多き所には必ず土師氏の
 住したりしを知る。此多き古墳の中にて現今確定せるは右の四陵の
 外、應神、應神の皇后仲姫、允恭、仲哀、仁賢、來目皇子等の數陵
 墓に過ぎず。其他の數十の墳墓は、何れも荒陵となりて存す。
 白鳥社を出で、古市の○屋といふに泊す、時恰も舊曆盆に相當する
 を以て、盆踊を見んとて人々騒ぐ。
 ○屋は古市第一の宿屋なり、豫て上等なりと教へられてこゝに投ず。
 家は石川の清流にのぞみて、成る程建具道具などは、田舎の宿屋と
 しては珍らしきまで上等なり。蓋此古市は、鐵道の未だ成らざる以
 前は、竹内街道の衝に當り、大阪、堺などより、南大和地方、伊賀、
 伊勢等に通ずる街道筋の一名邑なれば、此驛に宿泊する旅人も多く、



畿内横断四日の旅

頗る繁昌したりしによるものなり。然るに現今の有様は、其宿帳を見るに、八月になりて泊り客は、我等を併せて四五人に過ぎず、不繁昌驚くに堪えたり、而も彼方の室にも、此方の室にも客はありて、都々逸うたふもの、管捲くものなど、三味の聲と和して聞こえ、給仕に立つたる女頭に我等に酒をすゝむ、サテハと合點しつゝ、我等元來下戸なれば酒は斷はり、ラム子と西瓜とに、給仕女の不機嫌なる顔をながめて、面白からぬ一夜を送りぬ。蓋、大阪鐵道開けてより、旅客は何れも此便を借りて、竹内街道の淋れたるが爲に、神聖なる宿屋は曖昧屋と早變りを成したりしなり。已に曖昧屋たり、曖昧ならぬ我等のこゝに歓迎せられざる尤の次第なり。翌朝書き出しを見るに曰く、一、金、金、御泊りお



二人様、一金、金、ラム子十何本、一金、金、西瓜も二人前、一金、金、コハクも二人前、このラム子と西瓜との代は、大きな盆に盛り上げてたゞ我等の前に見せたる見賃なり、成る程昨夜之を片づける時に、モウおわがりに成りませんかと念を押したは之が爲なりしかど、漸く合點したれども、コハクも二人前と云ふもの如何にもおからず。問ふは一時の耻なり、後學の爲にもと、其由來を聞けば、それはお茶菓子之事と極めて簡単な挨拶、さては昨夜些少ながらもお茶代はさしあげたれば、此の書き出しの中にも其項が見えぬのですなと、憎まれ口の捨せりふ叩きつゝ、身の皮をまて剥がれざりしをせめてもの幸に、鬼の口を逃れたる心地して譽田へ急ぐ。譽田の村はづれに、應神天皇の譽田陵あり、大きき仁徳帝陵にも次ぐべく、此地方にては一番大なり、こゝに譽田八幡の社あり。源頼

譽田陵

信が壺井八幡を己が邸宅に勸請して、之を氏神と尊崇せしもの、其皇胤たるによるは勿論なれども、一は其河内守となりて下りし時、此八幡宮の國府の近所にありしもの、一の動機を與へたるにあらざるなきを知らんや。

八幡の祠は譽田陵の東南にあり、もと磴道を以て陵上に通じ、上に六角の寶殿あり雜人の上るを禁ぜしよし名所圖繪に見ゆ。陵に埴輪はにわ圓筒多きよしなれど、陵上のは見るを得ず、お堀の外の松原の中、亦圓筒の列をなして連れるを見る。是れ譽田陵の千坪と稱して著名なるものなりといふ。古墳に埴輪のあるは、何も珍らしい事は無けれど、此譽田陵の埴輪に關しては、また格別の因縁あり。雄略天皇の九年に、河内の國司上奏すらく、田邊の伯孫なるもの月夜此陵下を過ぎしに、赤馬あかうまに乗りたるものに遇ふ、伯孫之を見て、心大に之

埴輪圓筒

陪塚

を欲し、己が乗馬と交換せしに、翌朝之を見れば赤馬變じて土馬となる、即ち還て譽田陵を求むるに、其乗馬は土馬の間にあり、依て之を交換す、云云、誠に狐に化かされたる様な嘯はなしなれども、以て此陵の周圍の埴輪の中には、土馬の並びありしを稱すべし。譽田陵陪塚多し、河内志によるに、馬塚、鞍塚、圓塚、登久理塚、久豆塚等の名あり。又曰く、陵の東に馬鬣封あり俗に武内宿禰墓と傳ふ。又御神塚あり傳へて當宗神社々司阿部有遠の墓といふ、云云。今どの塚が何れだかよくはわからねども、陵東にある瓢形の塚は他のに比して大なれば、恐らくこゝに所謂武内宿禰の墓なるべし。我等之に上りてつらく埴輪の配置を調査するに、先づ塚の中腹に、殊塚を取り巻きて一列あり。上方には、更に二列、三列に排列し、殊に後部の丘上は圓形を成して取り巻けるを見る、其圓形の中央は四

仲姫陵

入す、思ふに石棺を發掘したるものならんか。

應神天皇の譽田陵を辭して、更に皇后仲姫陵の陪塚を檢す、埴輪の
排列は見ねども、石槨の蓋石の現はれたるものあるは注意すべきも

のなり。陵の正面に相對して一大荒陵あり、周漚
は埋れたれども尙其形を存し、陵の大きほ仲姫
陵に似たり、上に小松あれども、叢生といふに至
らず、又以て埴輪配置の狀を察すべし。



更に北して道明寺の天満宮を拜し、允恭帝陵の陪
塚に石棺の二ツ迄現れたるを見、之より直ちに汽

車にて大和に入る。

大和路

大和にては畝傍より耳成山に上り、崇神紀に見えて最も有名なる箸
墓其他の古墳の累々たる間を過ぎ、三輪より長谷寺に詣で、翌日奈

良より山城に出て、遂に大阪に歸る。

此行費す所前後僅かに四日、足跡とも角も畿内五國に亘る、依て假
りに畿内横斷四日の旅と名づく。但其後半は已に數度旅行せし所の
復習にして、殊に匆々の飛脚旅なれば新しき發見も少きに、記事あ
まりに長きに失したれば、一先づこゝに筆を擱く。他日更に機會を
得て、古墳に關する事蹟と共に、筆を改めて記するの期あるべし。

桶狭間古戰場に遊ぶ

清洲より發し、名古屋熱田を経て
桶狭間に至る

川住鎧三郎

名古屋の西北二里半に名邑あり、清洲と謂ふ。美濃路の驛次にして、今東海道鐵道の停車場を設く、往昔織田右府居城の地なり。五條川北より南に流れ、其西岸に一小丘を見る。之を遺趾と爲す。瘦松園む所、清洲城墟碑を樹つ、文久二年齋藤拙堂の撰文に係る、一讀以て是地の梗概を窺ふべく、伏仰三百年、双眸に映するは唯麥圃の遠く連るのみ。然れども當時の所謂清洲城市は東西十五六町、南北二十六七町にして東は西春日井郡阿原村、西は中島郡増田村、南は海

清洲城址

東郡今宿村、北は中島郡六角堂村に及び、尾張の首府として、一國繁榮の中心、大小道路の輻輳せし所なり。抑も桶狭間の役は、今より三百四十有一年前、即ち永祿三年五月十九日（新曆を以て算すれば六月二十二日に當る）に於ける戦鬪にして、其結果は織田氏興起の端緒となり、遂に朝廷の内勅を拜して、西戦東伐、海内を治め、以て勤王の壮志を伸へ、足利幕府に代れるもの、實に此一戦に起因せるもの、如し。信長此時年二十七歳、敵將今川義元は四十五歳。低徊幾回、先づ是遺址に少壯血氣なる當年の信長を想ひ、行々此貴公子の印せる沿道の史的事蹟を尋ねつゝ、桶狭間決戦の地を探るの頗る趣味あるべきを考え、輕裝其の途に上る。



駿河塚

清洲を出て、東南須ヶ口村を過ぐ。是地織田公清洲在城の時は、繁榮の一區にして、「酒はさかやに、よい茶は茶屋に、女郎は清洲の須ヶ口に」と、古謠稍々卑なりと雖ども、當時の盛況、宛然見るが如きの感あらしむ。須叟にして土器野新田に至る、駿河塚あり、新川の西にして、街道の南方に在り、此役信長捷ちて義元的首級を梟せし址なり、數圍の古松ありしも、天保年中の暴風に倒ると云ふ、惜むべし。名古屋市に入り、南に岐し、巾下新道町に法藏寺を訪ふ、寺は寛延年中小田井より移す所、境内に義元的首級を灑ぎし古井あり。更に名古屋城を背にして橋町を過ぎ、日置祠に謁す。祠は寛永正保の交、尙ほ千本松八幡の名あり。傳曰織田公是役に捷を祈りし所、靈鳩の奇瑞ありとて松千株を養して之に報せりと、今僅に存するは其一部なり。東方に東派本願寺の大伽藍を望む、古渡城址にし

法藏寺

日置祠

妙安寺

て、嘗て信長の父信秀之に居る。南して熱田神宮第一神門の舊址に達す。西に妙安寺あり、其辨財天祠の地は、古の神門の遺墟、老松は古道の並樹の残れるなりと。今用うる道路は、慶長中新に名古屋城を修め府を清洲より移すの後、更に開く所、永祿の當時用るし主要の道路は、妙安寺の地より斜に名古屋の西部を經過して、清洲に達せしなり。旗屋町に出づ、第二神門の遺址存す。舊史に、信長進んで旗屋口に達せし時、其地の住士加藤順盛迎接の事を載す、即ち此附近なり。信長の熱田に着せしは午前八時頃なり、(今清洲より熱田に至るは名古屋の中部を経て四里なるも、永祿頃の線路は名古屋の西部を斜に通過せしを以て三里半内外なり) 隨從の士卒二百餘人なりしと云ふ。順盛の裔孫二家あり、羽城町に居るを東加藤と唱へ、旗屋町に住するを西加藤と呼ぶ。並に今尙ほ家名を墮さず。老檜古

旗屋口

杉の左方に鬱然たるは、熱田神宮の神苑なり、千木勝男木の巍然として其間に高知れるは、轉た神世の古を忍ばしめ、寶劍長へに土川殿の奥深く、皇祖の神靈を秘して、天壤と無窮なるべく、日本武尊



以下の五座は、正殿に奉祀せられて、永く東海の表を照せり。西門は鎮皇門と稱す、處士桑原甚内の初めて信長に謁せし所、信長の神宮を拜するや、順盛傍に侍し、神酒を酌む、信長洒落として言ふて曰く、「加藤が酌に立ち、今日の軍にかとう」と、又武井夕庵に命じ、戰捷を祈るの願文を草せしめ、之を寶前に奉る、皆是れ此宮殿に於て爲されたる所のものなり。右府此地に於て士卒の集合を待ち、大約千人を得たり、南して上知加麻祠に詣り、祠前に於て、鷲津、丸根の方位に、黒烟の天に漲る

を見る、此れは今の市場町の地とす。時に午前九時乃至十時の頃なり。今や此地の附近は、人家櫛比遠望の自由なきも、當年の海岸線は、實に此邊なりき。又北に跟を回らし東門即ち春敲門に至る、此方位より東方に通する一條の小徑あり。今は唯田夫野人の來往するに過ぎざるも、古は主要の道路即ち上野街道なりしなり。今熱田町の中央即ち上知加麻祠前より、東に通ずる東海道の國道線は、當時に在りては、干潮時の通過に適する海濱に過ぎざりき。故に満潮に際すれば、必ず上野街道を採れり。

鳴海潟鹽瀬のなみにいそぐらし

うらのばまぢにかゝる旅人

大江忠成(玉葉集)

たひ人はさそいそくらむなるみかた

しほひの鴻の道にまかせて

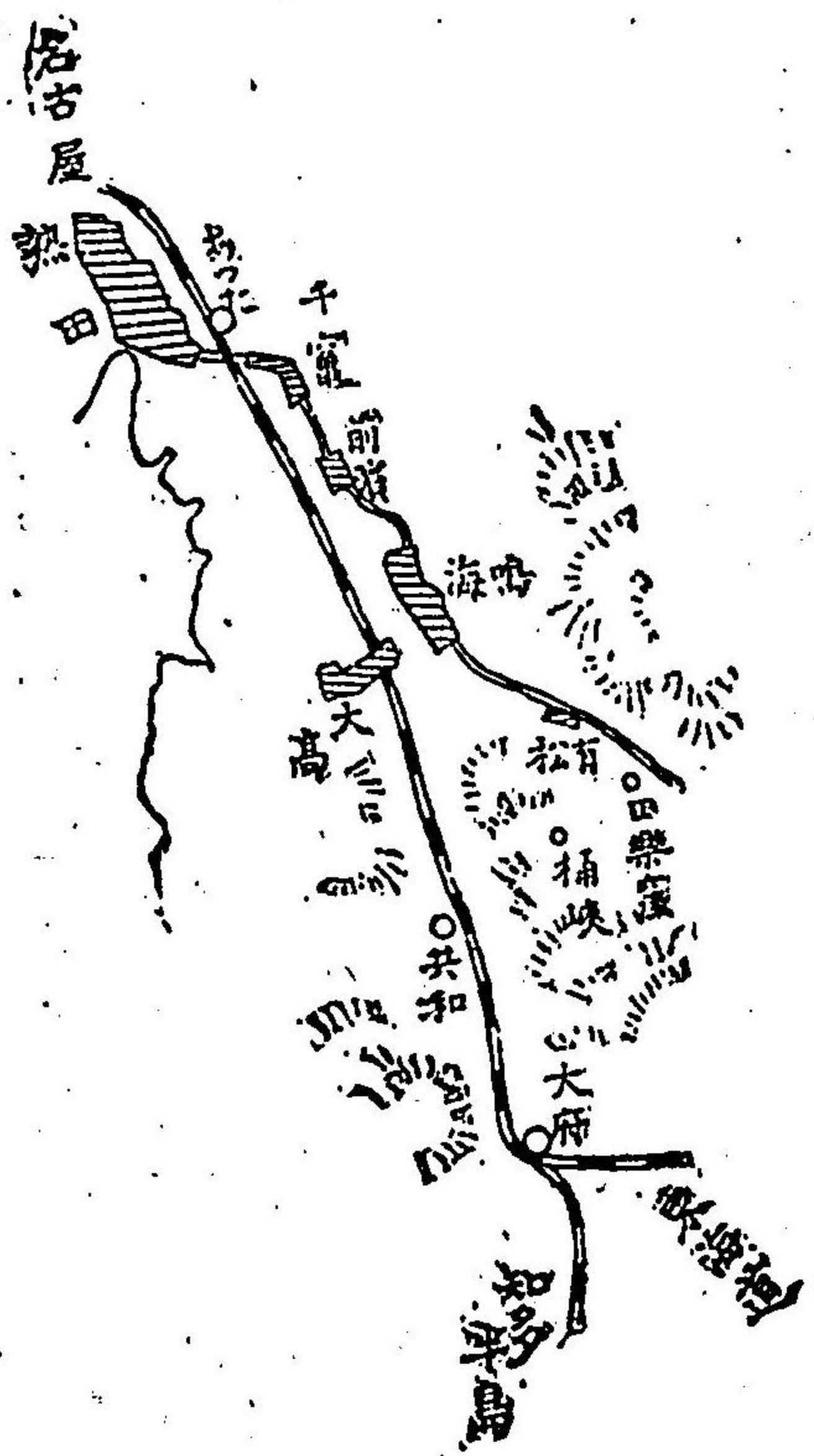
前大納言爲氏(新千載集)

桶狭間古戰場に遊ぶ

等皆往昔の實況寫し出して餘蘊なし。抑も熱田の地たる、嘗に信長の桶狭間役に關聯して、斯く著名の史蹟たるのみならず。神宮の祭神日本武尊の此地に留め給ひし事蹟は云ふも更なり、武門政治の創設者として、國史中の傑物たる源頼朝も亦呱呱の聲を此地に揚げしにあらずや。由來東海道の諸地、我國史の歴史時代を造れる偉人を生ずる二三にして足らず、而して其大半の尾張に生るゝは亦一奇と云ふべし。徳川氏三百年、東海道の驛次にして、單に宮と稱して其上下幾萬の旅客が必ず賽拜の誠を致せしは、實に此神聖なる熱田の地なり。伊勢との交通は海路桑名に達し、上野街道は今の國道と併行し、鳴海町の北に於て、古の鎌倉街道に合す、鎌倉街道なるものは、鳴海より二村山を越え、沓掛に出て、參河矢作の西、宇頭に於て、今の東海道の會す。彼の貞應海道記、東關紀行等に載する二村

鎌倉街道

足利代の街道



山は即ち此の山の謂にして、鎌倉街道は實に當時の國道なりしなり。永祿年代の國道線は、熱田より今の如く笠寺、鳴海に出で、更に南下して、大高を經、東に折れ、桶狭間を過ぎ、參河に至りしものゝ如し。上野街道の井戸田は、治承中太政大臣師長流謫の所なるを以て著はる。

探尋者は織田右府の進路、上野街道の路脈を進み、山崎附近に至る。

桶狭間古戰場に遊ぶ

なるみかた鹽干に浦やなりぬらん

上野の道を行く人もなし

藤原景綱(夫木集)

地形の變遷

の一首以て此路の海潮干満に應ずる實況を見るべし、此地戸部笠寺
一帶の丘陵にして、西は豊饒の田野遠く連り、古は丘陵の基脚を限
り、大概海濱にして、鹽田を設けし所、呼續濱の名あり。潮満つれ
ば、熱田との交通絶へ、呼應以て相辨すと、名を得る所以なり。

なるみかた夕波千島立歸り

友よひ綴の浦になくなり

殿阿上人(新後拾遺集)

信長の進路

沿海地形の變遷眞に驚くべきものあり。信長が丸根砦將佐久間盛重
戦死の報に接せしは、この山崎戸部の間に於てせるものにして、大
約午前十時乃至十一時の頃なりき。信長痛く其死を惜み、從軍將卒

笠寺

丹下砦

鳴海城

扇川

を顧み、「盛重我より一時早かりし」と、念珠を肩に掛け鞍坐を正し、
「汝等生命を我に授けよ」と告ぐ、是に於て衆大に奮ふと云ふもの、實
に此附近に來れる時なり。笠寺は笠覆寺の觀世音を以て聞ゆ、天平
年中の創建とす。其南方星崎は、今川軍の一部、五千許の兵數の駐
屯せし所、野並、古鳴海を經、丹下の砦址に達す、織田の將水野忠
光等の守りし所、鳴海町の北端、丘上にあり。此地たる、地位最も
高く、一望四方の風光、双降に落ち來る。南方鳴海町の中部に接せ
る遺趾を鳴海城とす、今川の將岡部元信の守備せし所なり。元信は
此役に主義元的首級を請ひ、奉して駿河に歸りし人なり。又其南の
田園中を流るゝを扇川とす、丹下の西よりする天白川に會し、黒末
川と爲り、大高の北より海に入る。今は其下流僅に舟楫を通するに
過ぎざるも、舊記に「兵船を黒末川に浮べ」云々とあれば、當時河

桶狭間古戰場に遊ぶ

鷺津砦

幅の大なりしを察するに足る。而して遙かに南なる丘岡の中、北に突起せるを鷺津山とす、鷺津砦址あり、大高道を下瞰す、砦址の南麓に寺あり、長壽寺と云ふ。又鷺津の東南に聳ゆるを丸根砦址と爲す、桶狭間道に枕む。並に織田の設けしもの、甲は織田信平等之を守り、乙は曩の佐久間盛重の守りし所なり。丸根は松平元康の攻撃せる地、普く史に見ゆ。兩砦の東北に位する丘陵は、今川の將朝比奈泰能等の駐屯せる所、織田の將佐々政次、千秋季忠等三百餘人の戦没せしは、此方面の敵に當りしなり。又兩砦の西南、低地を隔てし部落は大高にして、其南方丘上の遺址は即ち大高城なり。初め今川の將鵜殿長照之を守備し、後に松平元康之に代る。此城は維新前、尾藩志水氏の采地にし



大高城

善照寺砦

中島砦

成海洞

て、鳴海に次げる小市邑なり、今東海道鐵道の停車場あり。丹下より東南せば、丘陵の上、善照寺砦を望むべし、老松三株砦上に存し、獨り古を語るもの、如し。織田の佐久間信辰の守りし所、史に「信長善照寺砦の東に至り、其兵を點檢し三千人を得たり」とあるもの、是地とす。南方扇川の左岸、藪林中の低地に中島砦址あり、砦將は梶川一秀なり、此附近を中島と稱す、扇川の繞れるか故なり、信長前進に方り、林通勝、池田信輝、柴田勝家等の馬を控へて諫止せしは此處とす。以上の丹下、善照寺、中島は皆鳴海に屬す。町は古來鳴海絞を以て其名夙に著はる、連檐稍々市街を備ふ、鳴海に成海洞あり、古昔は東宮大明神と呼べり、弘治三年十二月三日今川義元の彌宜二郎左衛門に與へたる社領認許狀を存せり。當時今川の尾張を蠶食せし勢力範圍を窺ふの證左たらん。今同町下郷氏之れを保管

桶狭間古戰場に遊ぶ

信長の進路

す。善照寺より相原に出て、古鎌倉街道に沿ふて崎嶇たる小徑を攀ぢ、太子ヶ根に向ふ。而して信長當時の進路は、一たひ敵眼を避けんか爲め、大約午前十一時より正午頃、善照寺より相原の北なる山間に入り、更に相原の東より南に迂回して、太子ヶ根に赴きしなり。朝野舊聞稟稿に收むる桶狭間合戦記に

予編者山並英龍

若年の昔此合戦の時、信長公の馬牽僕にて有しと云へる大老人、未だ存

命にて、鳴海邊に子孫に掛り有りと聞及ひ、成瀬氏同道にて、彼孫か宅に在て、老人に

對面し、古昔の物語を問聞に、信長公御馬にて、山へ乗上げ乗下し給ふなど云より外別

事なし。唯能覺たる事とては、此合戦の日、五月十九日暑氣甚きこと、此年に罷成迄終

に不覺、偏に猛火の側に居るが如し。午前より日輪の旁に一點の小黒雲か何ぞと怪しき

物見えたり、其一點忽ち一天へ廣く漫こり漫々として暗く成り、稀有の大風雨なりしと

語りたり。

と、是れ一馬卒の言を寫したるに過ぎざるも、其身現に此役に従ひ

桶狭間合戦記

信長記

し者なれば、織田軍山路行進の状態、當日の天候等を察するの一資料たるを疑はず。該書の編者英龍は、尾張の藩臣にして五千石を食み、從五位下淡路守に叙任せらる、寛永二年に生れ、元祿十六年七十九歳を以て卒せり。本文同行の成瀬氏とは誰なるや、其名諱を的知し難きも、蓋し隼人正、若くは其同流に於ける知名の士ならん。世に是役を詳叙せるの單行本は、此書を以を始と爲す。織田軍は太子ヶ根に到るの途中、正午より午後一時の頃、大風雨に會へり、信長記に其狀を載す、

山際迄御人數被寄候處、俄急雨石氷を投打様に敵の輔に打付る、身方は後方に降かゝる、

沓懸の到下の松の木に二かい三かゝの桶の木、雨に東へ降倒るゝ、餘の事に熱田大明神

の神軍かと申候、

とあり。本文記者太田資房は、もと尾張西春日井郡常觀寺成願寺村にあり今成願

寺とに住せり、還俗の後、和泉守又牛一とも稱し、信長に仕へ、當時
 見聞する所を筆記す、即ち世に所謂、太田本信長記と稱するもの是
 なり。織田の三記録中、最も先きに出でたる書にして、記事淳朴愛
 すべし。彼の風雨を以て神威に擬するが如き、蓋し又當時に於ける
 思想界の一斑を窺ふに足る。太子少根は現今國道線の北方に位し、
 有松町の東に方れり、有松は今や其産出の絞、鳴海の右に出て、全
 村擧て之を業とす。戦役以後の立村にして、慶長中、遂次に大脇附
 近の人民移住し來り、以て今日の繁榮を見るに及ぶ、太子少根今は
 大將少根と書す、蓋し後人の附會なり。信長の馬上鞭を揚げ、諸將
 卒に先んじ、敵營を襲撃せし初動の位置は、實に此山にして、敵營
 は此より直徑凡そ七町にありき。時に午後二時頃なり、桶狭間決戦の
 場は、太子少根以南の低地、即ち今の國道の南方狹隘とす、今は字

有松

太子少根

屋形狭間

して屋形狭間と云ふ。大脇村の地域内にして、鳴海より今の國道線
 に沿ふて約一里の路程なるも、信長の行進せる山間の路程は、一里
 半以上を迂回せしなり。此地もとは田樂狹間と呼びしと云ふ。其屋
 形狭間と云へるは、當時の名流所謂屋形なる大諸
 侯の是處に死せしに因るならん。蓋し今川は足利
 將軍の門族にして一大名流たりしを以てなり。古
 戰場に入るの所、左右に道標各一個を植う、文化
 十三年五月相羽氏之を建つ。此附近、今二三の茶
 店及瓦焼場あり。茶店に古戰場の畧圖、吊古碑の
 摺本及戰鬥略記等を掲ぐ、其略記は概ね彼の眞顯太閤記の類を抄録
 せしものにして、信憑すべからず、唯摺本及略圖は一顧の價あり。
 道標の指示に従ひ狹隘に進む、廣袤僅に一町内外に過ぎず、四顧寂



桶狭間古戰場に遊ぶ

窶荒草脛を没し、鬼氣暗に人を襲ふ。地勢北の方國道線に接する一面は稍々開豁なるも、他の三面は丘陵連續屏障を爲す、是は史に稱する所謂桶狹間山にして、北方の松原は即ち狹隘屋形狹間是なり。其中央に碑あり、北面して立てり、題して桶狹間吊古碑と云ふ、尾藩の儒官秦鼎の撰する所、其文左の如し。

桶狹間
吊古碑

桶狹間吊古碑

登高原三砂遠、慨歎與敗于前跡、何國護有、余獨悲此桶狹云、記曰、永祿三年駿侯西征、五月十九日陣桶狹山北、織田公以奇兵襲之、駿侯發元滅、夫駿強國也、方其圖霸、相甲請以賦從、尾人亦徃々送款、於是大舉入尾、攻鷲津丸根拔之、曰、明且居清洲而朝食、衆皆賀慶酒軍中、會黑雲起西北、風雨暴發、敵人鼓聲亦從背震、皆不意其猝至、中軍大亂、格闘死者二千五百餘人、夫自足利氏失鹿、四海戰場、周以修亡、甲以暴滅、而未若有若此一戰而跌者也、勝敗如此、誰知其極、但勝之不_レ可保矧可_レ驕哉、悲也夫、雖然或聞軍敗自先鋒還闕、與其卒二百人皆死、或

守孤城不_レ走、請_三主尸_一而歸、若斯類者、累世所養、豈不_レ皆忠烈哉、籍使_三後人一_一有_三庸主之材_一、外結_三強援_一、內用_三若士_一、師徒雖_レ斷駿遠之地尙全、猶足_三以向_レ四報_レ仇也、游蕩忘_レ歸卒以播遷、悠々蒼天此何人哉、今生_三平世_一、砂歎前跡、跡已歷_三二百五十年_一、時雖_レ遊事猶昨、則後人吊_レ之、亦猶_三今世_一、則是千萬世、亦何有_レ極、請建_レ碑以記_レ之、銘曰、三軍覆、野茫茫、孰有_レ後、孰孤傷、建_三片碑_一、酌_三古邱_一、來吊_レ之、千萬秋、亂之思_レ治、已值_三今時_一、治不_レ忘_レ亂、視_三舊跡碑_一、文化已_レ夏五月、尾張儒官秦鼎撰、大阪天滿邸令中西融書、

碑陰記

此碑也、豐長輩有_レ所感而建_レ之、碑文所_レ載先鋒還闕、在_三他人_一猶且扼腕、况於_三豐長輩_一乎、觀_三其故_一而吊_レ古、颺_三其蹤_一而慘目、是情何歇、故願_レ不_レ使_三前跡_一徒蕪也、後來有_三懷舊君子_一與_レ我同志、亦將_レ有感、予_レ茲、秦士鉉作_レ銘、中西仲長書_レ之、皆我尾張國臣也、津島神主氷室豐長建、

又碑の右方即ち東に面して立てるは「今川上総介義元戦死所」「天澤寺殿前禮部侍郎秀峯哲公大居士」及「今川治部大輔義元墓」其他佛

桶狹間古戰場に遊ぶ

桶狭間七石表

像、石塔各一基通計五基、北より南に並列せり。其甲は桶狭間七石表の一にして、明和八年十二月、乙は萬延元年五月、丙は明治九年五月の建設なり、以上の内、丙最も首位を占め且つ大なり、山口正義等の建つる所、高島崇の撰文なり、同標に墓とせしは非なり。義元の墓は駿河國安倍郡大岩村舊天澤寺及參河國寶飯郡牛久保村大聖寺に在るものを真とす、是れ一身を分ちて、其頭首を駿河に、軀骸を參河に葬りしを以てなり。知多郡桶狭間合戦聞書は寛延三年三田慶行の記する所、其一節に

今川義元墓

山の腰貳間半四方内に御塚有り、駿河御屋形の御生害所故、其時分御屋形廻間と申候、とあり、是れ古傳にして證するに足るべし。前記五基の標と相對して小塚五個あり、皆題して「士大將塚」とす。桶狭間七石表の一にして、並に其戦没將士の氏名を傳へず。張州雜誌に、

山田塚、自義元塚隔三十六七間有山下、山田新右衛門某墓也、又曰右の塚と相並て四五尺計の塚二基あり、村民傳て一を小姓塚、一を草履取塚と稱す、誰人の塚たるを知らず。

とあるを觀れば、是等の氏名を失ふは、既に久しきことたるべし。

尾張藩臣人見穢邑の桶狭間懷古に、

嗚呼悲哉、虎丘之途、疎松摧殘、野草荒蕪、沮洳遷家、有而若無、

又香川景樹の

あと問へは昔のときの聲たて、松に答ふる風のかなしさ、

と詠せるもの、善く是地の實況を寫し得て趣あり。抑も織田軍が清洲より屋形狭間にする行進路程は、之を今日に計算すれば約七里にして、往復は即ち約十四里なり。而して前夜今川軍の運動に關する情報を得、進軍準備に着手したる時を當日の午前二時前後、其日出

信長の運動

桶狭間古戰場に遊ぶ

高野山
大德院
派出所

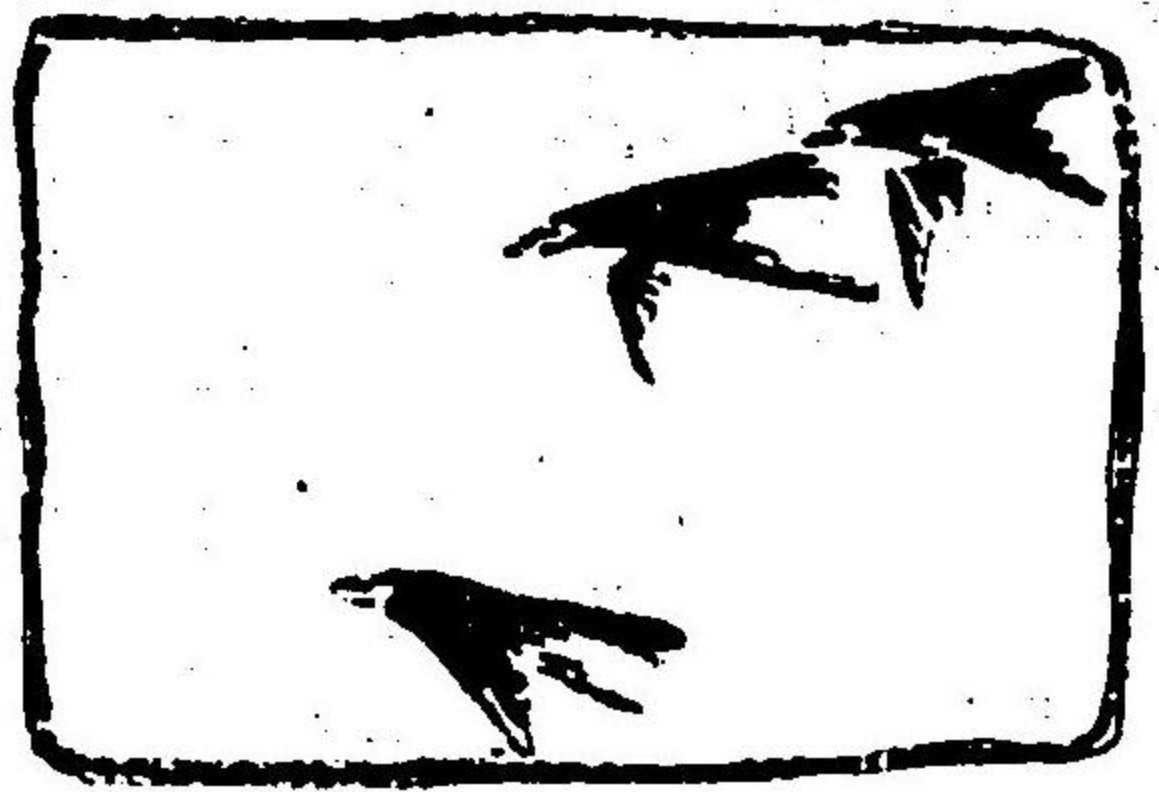
松井宗
信墓

を同五時、日没を午後七時と假定すれば、織田軍の勞働は通計十七時間に及び、更に詳述すれば、決戦二時間（午後二時より三時に至る）にして、他は準備及行軍其他正面の陽戰等に費せし計算なり。當時行動の如何に劇甚にして、如何に迅速なりしやは、之を以て其一斑を推測し得ん。彼の狹隘の西なる丘上に、高野山大德院の派出所あり、近年の建設に係り、規模大なりと雖ども、修營未だ全らずして、殆んど風雨に絶へず。堂の前に今川の將松井宗信の標あり、「松井八郎塚」及び「松井兵部少輔宗信墓」の二基とす、並に東面せり、一は明和八年十二月建つる所にして、七石表の一たり。他は明治九年五月山口正義等の力に成る。松井家譜を按ずるに「宗信首送二二侯_二葬_二天龍院_一」とあるは、是地は蓋し其軀骸のみを葬れるか。宗信は遠江二侯の城主にして、全隊此地に殉せり、主家今川氏眞駿河に

滅亡の後、子孫遂に尾張に仕へ、今現に其裔孫たるもの凡七家を存す。庵原守富等の紀行友千鳥に、

御屋形廻間也、今川義元戦死の處、(中略)其時討死の衆の塚いくつも有しが、多くつれ失けるとそ云々、

とあるは、明和の七石表設立以前の景況なり。狹隘の東南山上に鷲の森と稱する地あり、傳曰熱田神靈の奇瑞に依りて、白鷲織田軍を導きて此處に止まると、明治九年十一月山口正義、石を建て、之を標せり。然れども、此種の傳説は各地の古戰場に於て聞く所、彼の鎧掛松と好一對の談なり。當地にも亦、國道の北方、山麓に鎧掛松と呼べるものあり、土人は鷲の森、鎧掛松等に就き、頻りに饒舌を弄するも、皆後世附會捏造のみ、固より信すべきものに



鷲の森

鎧掛松

桶狭間古戰場に遊ぶ

あらず。當時今川軍の此地に進み來れる目的は、前方の大高城と、後方の連絡を絶てる敵の二砦鷺津丸根を抜き、先づ其交通を安全にし、此日の夕、首力は大高に入り、爾後の方策を立つるに在りたり。是を以て義元は、唯行進路の開通を待んが爲め、今朝沓掛を發し、一時駐止せるの際にして、先頭諸隊より齎らす所は、悉く勝利の吉報ならざるなく、全軍の意氣爲めに昂り、眼中既に織田なく、又清洲なかりしなり。今其兵數を算し、部署を按すれば、此狹隘に在りしは、義元旗下の兵、約三千人、桶狭間の村落附近に備へしもの凡二千人、他は曩の笠寺方面に五千、鳴海方面に七千、通計正面に配布しありし戦闘兵は、旗下を合し一萬七千人にして、餘の八千人は知立今岡附近の監視隊及岡崎、沓掛、鳴海城の守兵なり。而して此一萬七千人の兵員、悉く一地に集團しあらんには、其戦闘力も亦從

て強大なるべけれども、惜哉概ね過度に前方に進み、主將義元の掌裡に在りしは、旗下僅に三千人に過ぎざりき。是れ織田軍二千人の奇襲に對し、敗滅を免れざりしなり、況んや將驕り、士卒懈るに於ておや。嗚呼駿遠參七十八萬石の領主、其率ゆる所の貔貅二萬五千を擁し、十二分の一にも及ばざる織田の爲めに、一敗地に塗れ、復た起つ能はざるに至りしもの、其原因を窮むれば、實に用兵の法其宜きに適せざると、士氣の懈怠より來りしを思ふ、誰か寒心せざらん。史に曰ふ、此役今川の死者二千五百に上ると、蓋し旗下三千人中、生還せるもの、多からざりしを想ふべし。三田本合戦聞書に「御陣場十町斗の内手負死人不知數有之候事」とあり、何ぞ悲慘の甚しきや。又義元戦死の情況は、田宮篤輝の新編桶狭合戦記に載する、尾張丹羽郡大赤見村服部氏の家傳に於て一斑を窺ふべし。曰く

忠次、義元に近づきけるに、義元我家來と心得、今のかんとす、馬引と命せられ候故、扱は大將也と心得云々、忠次の孫、孫六へ常々物語せし由、正保元年孫六か手記に見えたり、

と、復以て義元の狼狽遂に空しく首を敵手に委するに至りしを知るべし。

遂に幾たびか低回して、古戰場を去り、道を東南に進み、落合を過ぎ、前後に至る。北に屈起する岡陵を間米山と稱す、戦人塚其頂に在り、石標を建つ。信長既に義元を討ち、駿河の敗兵を追撃し、午後四時の頃、軍を此地に收め、往路に依て清洲に歸りしは、將に日暮に向々とする時なりしと云ふ。若有隨筆に、

今川義元落命の後駿州亡命の士を埋みて千人塚と號すと、然れとも必らず其尸骸を埋みたるには不レ非か、信長大に勝利を得玉へる證に塚を築きたるならん、(中略)里老の傳説に此塚の有處此の邊の高山たる故、凡そ三州岡崎迄見ゆ、因レ之塚を此地に築しとなん

戦人塚

沓掛

桶狭間村

云々、

又里傳には義元二百年回到當り、大脇村曹源寺の僧、此處に千人の供養を爲したるより、千人塚の名を得たりと、石標には戦人塚とす、蓋し其正を得たるものならん、所傳區々一定せず。沓掛は此山の東北方に當り、知立及今岡は東南方とす、沓掛は義元戦鬪の前夜宿營の城にして、戦勝に至り曹源寺を訪ふ、義元及宗信の牌を安置し、又山崎克明の桶狭間合戦記を藏す、其載する所、山澄本を増訂粉飾したるに過ぎざるなり。更に西して桶狭間村を過ぐ、邊陲の一小部落にして、而も



桶狭間古戰場に遊ぶ

頗る著名なるは、是役の世に紹介せる故ならん。永祿の當年、桶狭間は大脇村の一部にして、大約三十五六戸なりしと、今は社寺民家を合して百四戸あり、此戦役か如何に當時世の耳目を聳動せしかは、之を以てしても推知するを得べし。西北して曩の丸根砦下の道に出で、大高に達し、鐵路名古屋に歸り、筆を扶けて之を草す。

名護屋城墟に遊ぶ記

探古生

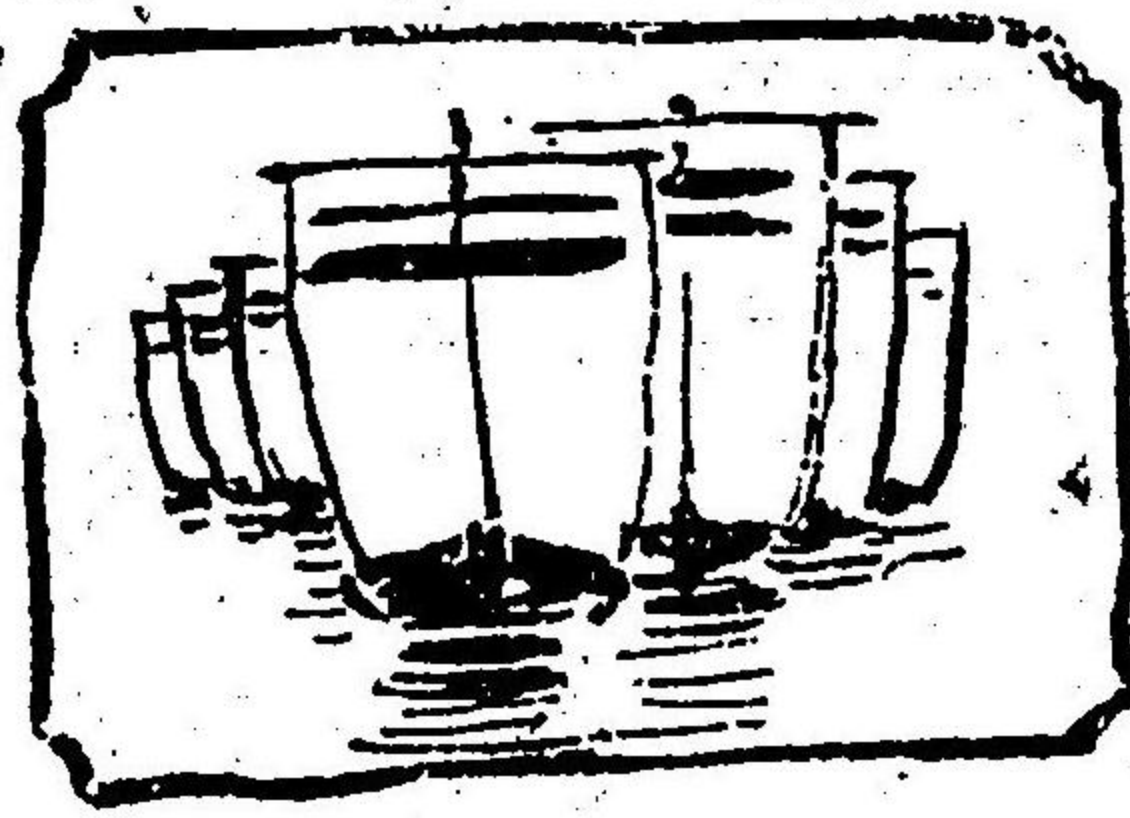
修學旅行

時維明治二十八年十一月、我征清の軍やみて、臺灣の掃討に忙はしき頃、予熊城の下を發して、九州の北岸を巡る。此行もと、西國の歌枕見むとの風流にもあらず。銃を肩にし、劍を腰にし、以て筋を練り、武を習ひ、傍名勝舊跡を搜り、一見以て百聞に代へんと、所謂學校の修學旅行にて、其月の四日、學寮を發し舟路を取り、五日早旦、肥前國角の江に上陸し、武雄に至りこゝに泊し、六日駒鳴峠の山路を越え、松浦川に沿ふて下り、彼の小夜姫が、唐土船を慕ひし、領巾振山を望みつゝ、唐津に若し、翌七日を以て、文祿征韓の役、大本營たりし、肥前國東松浦郡なる、名護屋に向ふ。當時の紀行篋底にあり。今其一節を抜き、名護屋城墟の記と名け、未遊の士の乘となさんとす。

七日、晴、早旦、唐津を發して名護屋に向ふ。路傍の枯草霜白くして、あと吹き送る朝風に、征衣もいと冷なり。西に行くこと三里

餘、呼子の浦に達す。呼子は一漁村に過ぎざれども、人家櫛比、頗る富めるもの如し。前は入海深く陸地に浸入して波靜に、漁舟點々、櫓聲憂々たり。此地捕鯨を以て名あり。今現に、捕鯨會社を設けて、盛に捕具を製す。乃ち入りて之を見る。

午下舟を僦ふて、對岸なる名護屋に渡る。萬頃一碧鏡面の如く、唯仰軋たる櫓聲、時々沙鷗を驚かすのみ。既にして舟岸に達す、村吏迎へて我行を待つ。即ち以て嚮導となし、崎嶇たる細徑をたどり、先づ本丸の址に向ふ。唯見る突兀たる廢墟、菅茅霜に枯れ、灌木荆棘雜り生ずる間、古松十數株龍の如く、讓々として潮風に嗚咽す。眼下は玄界の荒灘、波濤奔馬の如く、岸を打ちて白沫霧散す。而して九州の北岸、或は出て或は入り、迂曲凹凸、遠く



して淡く、近くして濃に、更に眺を決すれば、海波の盡くる所、水天髣髴の間に壹岐の島を望み。其間白帆點々として、半天に溯るかど疑はれ、其風光の明媚なる、雲谷狩家の筆と雖、遠く及ぶところに非らず。加ふるに後は松浦の翠巒、透迤として連り、其海角をなして海中に突出する所、是名護屋にして、以て玄界の風濤の障壁をなし、灣内廣濶、水深く波靜に、大艦巨舶泊すべし。而して城址は海角の尖端に位し、地形雄大、豊公の此地を撰み、征韓の大本營を置くも亦宜なる哉。

夫れ英雄は、能く其地を相するものなり。而して又能く其地を利用するものなり。英雄に非ずんば其地の形勝なるも、之を捨て、顧みず。知らず豊公は、それ如何にしてか、見聞此邊陲の地にまで及びしか。初め豊公、小西行長寺澤正成をして其地を相せしむ。還り報

秀吉名護屋に入る

城圖

じて曰く、地形雄濶大軍屯すべしと。即ち加藤清正其基趾を畫し、
 黒田長政其工を督し、九州の人夫を集め、諸將に課して分擔工を急
 げり。文祿元年三月廿六日秀吉京師を發し、四月二十三日筑前宮崎
 に着し、韓地の捷を得意氣更に軒昂、二十五日深江を經、金甲燦爛
 駿足に跨り、假髻を着けて威風堂々名護屋に入る。將士環甲之を迎
 ふ。是より先き、家康景勝政宗等を初めとし、十萬の將卒此地に集
 り、旌旗天に翻り船艦海を覆ひ帆檣林立す。而して城墪既に成り、
 高樓巍然として半空に聳ゆ、當時の壯觀思ふべきなり。
 村に一大地圖を藏す。大さ方四五尺、色彩以て一々當時、諸將陣營
 の跡を記し古色掬すべし。蓋し當時のものにかゝるか。村吏一々之
 を以て實地に對比し、予等の爲に教へて曰く、此は誰の陣跡なり。
 彼は誰の營趾なり。家康彼にあり、景勝此にあり、と指示懇篤、身

當時にありて、目覩する思あらしむ。謂へらく豊公高樓に坐して、
 朝に舳艫相啣む戰艦を瞰し、暮に篝火焚き連ねたる諸營を望み、徐
 に方略を定めて諸將を指揮し、天下を打て一丸となさんとす。何ぞ
 夫れ壯なるや。聞く一夜其諸營を巡視するや、小屋に「朧月夜」と額
 うちたるものあり。其誰なるやを問ふ。野間藤六出て迎ふ。豊公莞
 爾、老くものなきかとて、蓆及び米を賜ふ。蓋し古歌に、「朧月夜
 にしくものぞなき」とあるを以てなり。英雄の心中、閑日月あるを
 見るべし。然れども出征中途、萬腔の恨を抱きて空しく暝し、絶世
 の雄圖悵としてやみぬ。星移り物換はる茲に三百年、舊物一も見る
 ところなく、當時の跡たる、山林荆棘にあらざれば盡く隴畝、唯山
 水舊を語り、古松悲風にむせぶあるのみ。時々杖を以て草叢の間を
 探り當時の布目瓦を拾ふを得べく、或は桐葉を紋せるもの或は鯨瓦

の鱗片あり、當時の宏壯なる臺閣を追懷し、宛ら今昔の感に堪ふ能はず、予愁然、舊址を徘徊して去り難し。乃ち謂へらく、昨は征清の詔を發して、大露廣島に下り、豊島の海に敵の堅艦を破碎し、一舉して鷄林八道を席捲し、旅順威海衛の堅壘を抜き、今や媾和の批准を終はれり。豊公の靈又以て、阿彌陀峯上に瞑すべきなりと。時に舟子來りて行を促す。仍て將に城墟を降らんとして、名殘惜しくも見かへれば、日は漸く西海に傾きて、斷雲空に迷ひ、豊岐の島山模糊たり。

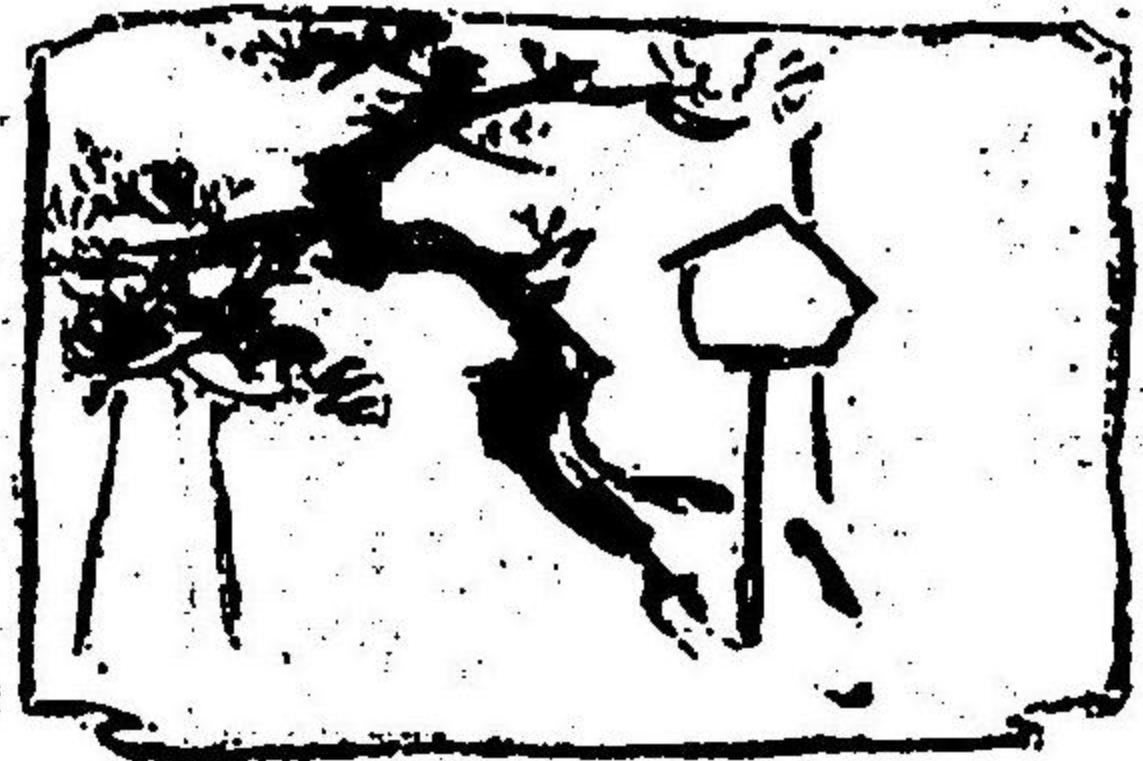
廣澤寺

歸途廣澤寺に至る、寺は廢址の下にあり。征韓後五十餘年の建立にて、秀吉の愛姫、廣澤の局の居りしところ、茲に寺を建て其菩提を吊ひ、其名を取りて命ずとかや。庭内一大蘇鐵あり。傳へいふ韓地より齎せるものにかゝると。寺を去りて埠頭に出つれば、舟子願し

七ツ釜の奇洞

唐津に歸る

て待てり。時に議あり、是より直に海路を取り、彼の玄武岩の露出として有名なる七ツ釜を見、唐津に歸らんと。衆之を賛し舟に乗じて灣口を出づれば、玄海の風濤漸やく荒し。舟子帆を開展すれば、滿面風を孕みて走る事箭の如く、時に波頭を蹴つて飛沫衣袂を濕し、一上一下孤島出で又没す。既にして土器崎を過く、岬端石柱壘々として重疊騰するか如く、其奇なる名狀すべからず。舟此處を過きて、漸く右折すれば、松浦の灣に入り波亦靜なり。而して日は早や没して海波闇く、烏帽子島の燈臺微光を放ち、其唐津に上陸せしは、月舞鶴城址



を上る頃なりき。

觀名護屋城址有感而作

内田 遠湖

大海淼茫濤拍天、碧灣斜通古城邊、古城高在萬仞上、坂道如梯壘壁堅、憶昔豐公抱奇策、欲奴三韓臣明國、
 占得形勝築行營、層樓連雲不可測、英雄何須五湖游、
 俯弄八道四百州、絕海連檣從此發、意氣軒昂貫斗牛、
 今見山郭幾百雉、中央之嶺平似砥、遠望對州近壹州、
 風光兼領海山美、侯第伯邸東洋風雲惡、猛鷲奮翅圖食攫、懷古慨然感不堪、誰道遺老遇雄略、



斷礎存、想見千軍萬馬屯、土人往々獲古瓦、桐章猶認舊時痕、勿謂窮兵出躁佻、
 勿謂喪兒慰寂悄、漢武雄才石勒胸、磊々落々日月皎、
 我來探勝自唐津、呼子灣頭喚波瀾、秋深氣清景更好、
 村老爲導語慇懃、吁噫如今

五箇庄めぐり

むらさき

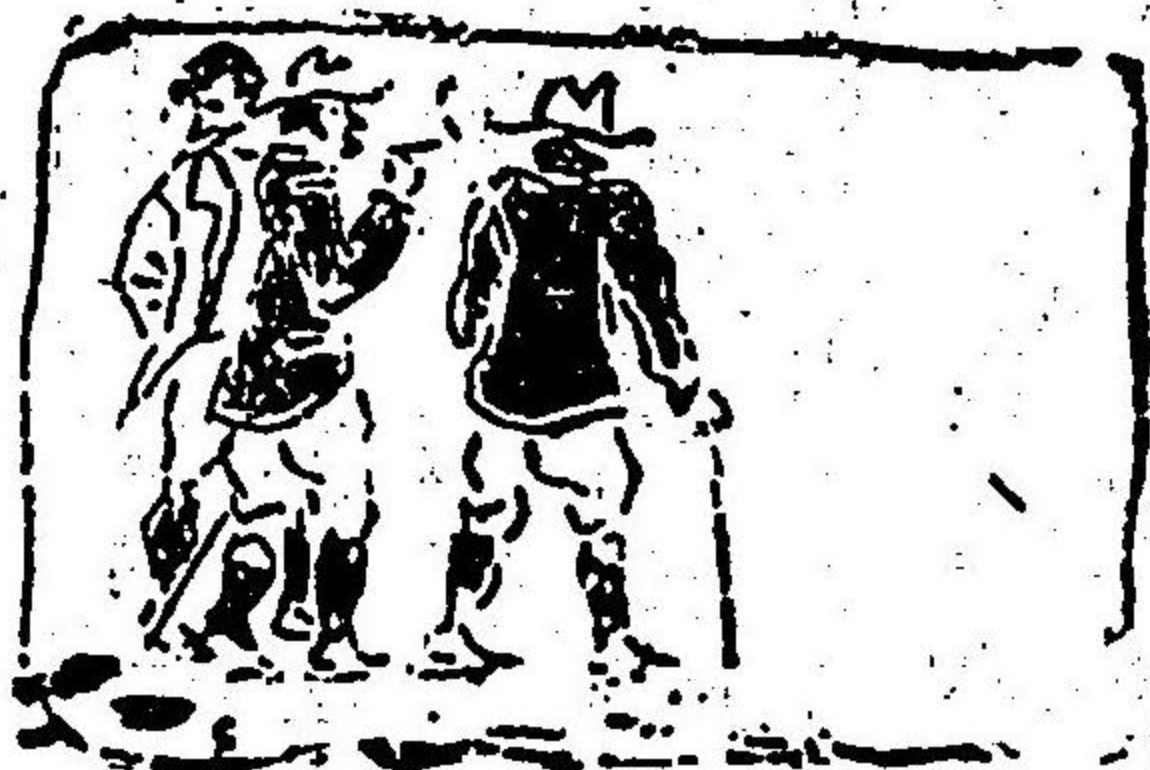
おのれ幼時より肥後の奥山には、五箇庄といへる處ありて、平家の一族が没落し來りてこゝに籠り、爾來子々孫々相承け相傳へ、今猶山深きわたり、谷幽なる邊に家を構へて世を送れる者ありと聞けり。然るにたゞび圖らずも、東肥銀杏城下に住ふこととなりしかば、いかで此有名なる未開の地を踏みて、異日歸國の土産にせばやとの好奇心は、曾て念頭を離るゝ能はざりき。偶然今春同地に旅行せずと勸むるものあり、直に賛同して装を修め、四月二日雨を衝て熊本を發し、峻を攀ち幽を探り、六日の苦楚を嘗めて、遂に年來の希望を果すこととなりぬ。そのよし聊かかきつけて後遊の諸士に示すとなん。

四月二日、夜來の雨全く止まず、雲霧濛々、未だ晴雨の何れを辨ずる能はず、同行四人輕装して龍田口に會す。洋装子三人折衷子三人といへども、實に奇々妙々的のいでたちなり、麥葉帽子に雨傘、色さめたる毛布に口の開いたる革包、破れたる風呂敷包に骨の曲つたる

熊本を發す

五箇庄めぐり

編幅傘、五尺七寸の大男と四尺九寸の小男、眼鏡が二つに遠眼が二つ、其外此類の辻褃の合はぬもの書立つれば敷限なきことなるべし。午前七時にいよいよ出發となり、明午橋を渡り水前寺を経て御船街道に出づ。道路泥濘噓へんに物なく、泥深き處は足趾爲に没し、土質滑なる處は頭々として、さながら千鳥足ともいふべき有様、身を支へんに由なく、各倒るゝもの敷たび、皆身に旭日大綬章といふべき一々の勳章を附するに至りぬ。十一時御船に着す、此地は南北朝の頃甲斐氏の城地なりしが、その菊池と戦ひなれる處なり。御船の村端より路を右して、一小時を越え、一望平坦なる沃野に出で、緑川に沿ふて進む、河水降雨の爲に増加し、水勢いと烈して、岩に觸れて激し、滔々として漲り、混々として流れ、風物轉た慘憺たり。偶々雨中筏に棹して此激濤を下る者あり、眞



御船町

岩下町

に一幅の繪畫の如し。やがて此あたりの茶店に晝餐を終へ、甲佐岩下町を過ぐ、此町豪家甚多く、壮大なる家屋櫺を接せり、雨はいよいよふりしきれども、路は前のやうに滑かならざれば、進みも思ひの外抄取り、再び緑川の堤に沿ひて上ること數町、川屈曲す、屈曲し終りて水分け自ら島形をなす、河堤數十株の櫻梢を接して羅列し、花恰も満開なり、風雨の爲に惱める風情、えもいはれぬ景色なり、風に誘はれて散亂し、水に落ちては漕となりて流をせき、地に落ちては雪となりて路上にしき、流れもあへぬもみぢならぬけしき、落花の雪に踏み迷ふふせい、盡しかゝるさまをやいふらん、花を避けて草に泥する亦文士の心づかひなり。落花流水多情と古人のいひけん、亦ことわりにこそ。此處を櫻の馬場といふ。こゝより進むこと二三町、上揚村に至る、甲佐三宮大明神の社あり、阿蘇宮の攝社にて、其創建の年を明にせざるも、頗る古き時代なることは疑なきが如し、甲佐祠記などいふものあれど、信ずるに足らず、今は神社の社殿は焼けしか壞れしか、建築甲のよしにて、鳥居のみあり。其社前より川に下りて、渡舟を呼び、川を渡りて寒野村に入る、村内の一茅舎に蓆蔭編める男あり、いと面白き節にて、俚歌を謠へり、暫く立聞して思はず時を費しぬ。之より路を左して峠を輪ゆ、上り坂いと長し、漸くにして登りつき、亦降り

甲佐三宮大明神

原町

道となる、雨はいや増しに降り来り、風さへ吹き加はり、いとちどろくしきけはひなり、傘は折れんばかり、衣は濡ひ身は勞れ、四人一盲も發する者なく、唯原町を目あてにはやく着けかしと祈るのみ。漸くにして濱町街道に出て、午後三時過に一同無事原町に着す、かろちや麴屋といふ村中最上等の宿屋に泊る、宿屋の主人番頭小僧(?)さては村の若者とも思はるゝ人集まりて、小兒を執へて袋手刀にて、お面お小手と騒げる亦沙汰の限といへども、兎に角此地方の風習として滑稽なり。隣室に二人のいと恠げなる商人風せる男と、外に田舎紳士の夫婦連と見ゆる者あるのみ、吾人の室は先づ最上等と見えたり、宿屋に湯はなく四五町もある所の、いとく恠げなる男女混浴(しかも二室あり乍ら一室をわかすのみなり)の湯に入りて先づ一日の勞を收め、一酌と出掛けべき所なれども、下戸連の寄合なれば土地の名物の注文をなし、恠しげなる菓子に舌鼓うちぬ。

三日、けふは神武天皇祭なれば、例の如く盥嗽して東向遙拜す。天氣は昨日より少しは宜からんとは、全く空想にて、いやましの悪き言語同断なり、雨はいや降りにより、風はい

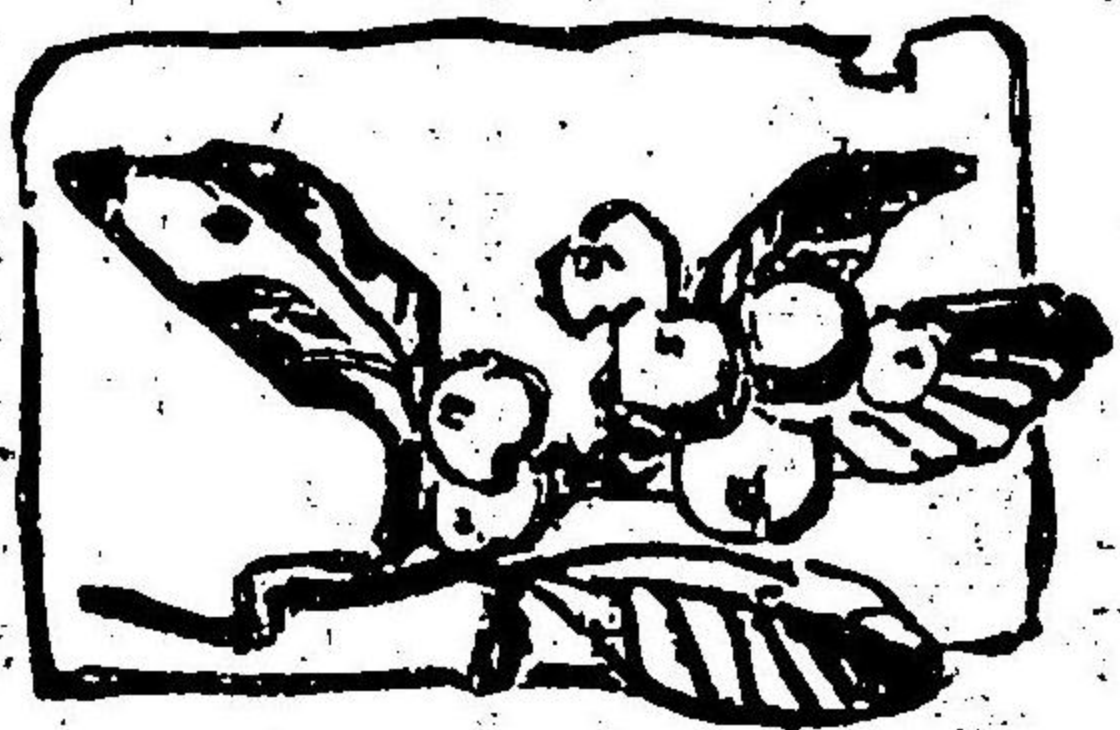


準備

吹きにくく、到底山又山と分け入るなどは、思ひもよらぬ空模様なり。主人口を極め五家入りの不可なるを説きて曰く、かゝる雨天に嚮導する人もなし、嚮導なくては、必ず山奥に迷ひ入らんと、されども余等きかざれば、主人さらばとて、今幸に五家の人の前夜來來りて今朝歸宅する人あれば、いざ諸共に行かれよ、離れもせば、蓋し途上の苦多からんと、乃ち直に喫飯し、草鞋は各五六足の準備をなし、腰にぶら下げることに仁王堂の奉納に似たり。蓋し五家庄には一足の草鞋なく、今より十數里の路の準備なり。主人亦曰く、卿等なとて白米を携へ給はざる、五家山中一粒の米なし、此等の準備なくして五家山を過ぎ得べけんやと、吾人もとより五家に入るに、白米味噌醬油の類の必要なること知らざるにあられど、かく天氣も悪しく、さまざまの荷物も多きに、なほも堆きものを擔はんには、いかで峻坂を登り嶮岨を攀するを得ん、まゝに彼地人の食ふものとして、同じく人の食ふものなり、粟とて稗とて食ひ得べからざることやある、僅に三日の生命を繋げば則ち可なり、支那の伯夷はくいしやくせい叔齊とかは糜を食ひて首陽山しゆやうざんに歳月を過しと、若し夫れ一朝道を誤らば、宜しく夷叔を學ばん、無事に通過し得て、粟稗なり何なり彼地の人の食ふものにて三日の命をつなげば、是れ亦一興なり後日の話の種なり、何を苦んでざる重荷を負はんやと、評議

一決、大膽にも米はもとより何等の複食品も携へず、餘人のなす準備は一切廢して、唯當日の午食を準備し、亭主の熱心なる勸も聞流して、遂に午前七時に原町を出發す、雨降れば降り、風吹けば吹け、腹へらばへれ、道誤らば誤れ、腹をくくりて五家庄遊觀の途に上る。

時に午前七時、眞の五箇庄の人果していつくにあるやを問へば、はや出發せりと、遺憾限なかりしも、亦路上出遇ふべき人もあらんといへば、一樓の望に繋れて終に原町を離れ、町端れの僅なる上り坂を經、漸く山路



なれば、往かう人いと稀にしていと心細き限なり。さればいかで先の五家の人とやらに追いつかんものと、足を早めて進み、やうやく二三軒許ある村にて追いつきぬ、いざ共に行かんといひしも、彼は待つ人あれば先づ行かれよ、これより先き早楠村まではいと分り易

となり、谷川傳ひに進む、雨はいよ降りしきりて、更に止まらんやうもなし。時々彼方より汚穢鼻摘むべき和布やうの衣を纏ひ、茅の蓑を着け、破れ果てたる傘を磨げ来る者あるは、蓋し五家庄の人なるべく思はる。されども昨日より降りつゞくる雨

早楠

雁俣峠

き路なり、又五家に入るも迷路とて更になしといへば、一同愈々進むことに決し、ひたすら谷川傳の路をいそぐ、進むに従ひて山漸く迫り、路益狭し、殆と一里許も來りしと思ふ頃、十四五戸許の小村に出づ、是れ即ち早楠なり。こゝを過ぐれば愈々名にしおふ雁俣峠の右肩一里餘の急坂にて、五家の難路に入るなり。一行ははからずも此登り口にて既に路を誤り、村人の教に従ひて正道に立かへる、熟ら以爲く、かゝる入口にてすら此の如し、是れより先は山愈々深く路益々危しときく、此有様にては到底五家の探檢などは大それた謀叛なりとそゞろに心細く、未だ彼の五家の人ば來らずやと、後を顧み首を伸して待つも、けはひ更になし、一行の間諸説紛々未だ前途の評議決する能はず、幸ひ彼方より四五の男女うちむれ、板擔ひ懸負ひて來れるものに遇ふ、行先の路々を聞きしに、迷ふべき路更になしとの事なれば、斷然勇奮一番瀾々山路にかゝる。初の程は樹木いと少く、雜草叢生し、處々に茶畑粟畑あり、此間を過ぎ山の半腹に沿ひて進む、山路羊腸崎嶇急にして長く、右は崎嶇たる峻崖、左は嶮峻たる深谿、潤底遙に滌々たる溪流の音時々耳に入り來るを覺ゆ。凡そ二十町許も登り來りしと思ふ頃、森々たる杉林に入る。是れ有名なる七郎次の杉林にて、幾百千の歲月を経たるや、凡そ十圍もあらんは思はるゝ老樹、箭筒として茂

七郎次の杉林

五箇庄めぐり

岐路

り、晝猶暗く、降る雨さへ落ちぬばかりに繁茂せり、實に九州屈指の大森林といふもげに然らん。森に入りて登ること數町、忍ち岐路あり、右せんか左せんか議決せず、徒に進で不慮の禍を受け、暴虎馮河の晦を受けんより、寧ろ前掲の人の來らんを待つべしといふあり、或は否と雨路共に同大なり恐くは先に合一すべしといふあり、傘を打たて其倒るゝに任せんといふあり、磁石を見地面を按じて地理を究むるあり、道先探検すべしと出懸くるあり、實にいつ果べうも見えず。若し此あたりに踏み誤らんには、山又山、盡させぬ森林の間に、果ては雨を冒して打伏し、愈々首陽山の一段となりて、干死の苦を受けざるべからざるに至らん、いかんすべきと千思萬考、何等の益なきが如し。いざ彼の五家の人の登り來るを待たばやとの説、力を得て徐に身を杖に托して彼方此方をまもるも、來るべきやうもなし。たま／＼前年此地に遊びし人の案内を物せられたるものありしを思ひ出で取り出し見るに、林中の岐路は森盡きて相會すべしとあり、さてはこれなんぬり、かゝる事に早く心附かばいらぬ心配はせざりしものと、今更悔ゆるも及ばず。乃ち右方の岐路を進む、路甚だ峻、岩根、杉が根踏みしだき、始と七八町も來りしと思ふ頃森漸く開け、今まで雨なりと思ひしは、いつしか霞となり、浙瀝として天蓋を破りて降り來る。漸くにして

掘立小屋

森林も盡き、再び雜草茂生の邊に出づ、果して一路來りて之に會せり、蓋し是れ曩の左道にて即ち牛馬の道なりといふ。此邊道路泥濘汗濼處々に存して、甚しきもの脛を没するに至る、かゝる路をからうじて打ち過ぐる間に、今までの霞は雪となり、足趾殆ど感覺を失ひ、冷氣喻へんものなし、漸くにして時に達す。あたりは雪積で一面の銀世界をなせるも、遠くは雲霧濛々として前に塞り、何等の眺望も眼に映せず、こゝに掘立小屋あり近頃まで住めりし人ありしにや、屋根裏は煤煙に蔽はれ、地上には床を張れるも、到底座し得べき限にあらず。此處に息ひて晝飯を了へ、いざと葉木村さして急ぐ。又右方に小舎あり、人げあるが如し、手足冷へ亘りていと堪難ければ、入りて暫し身を暖めんを請ふ、主人直に諾す、家内の模様をみるに、一尺計の高さの床に蓆を敷き、一隅に爐を切り、天井より自在鉤を以て鐵瓶を懸けたり、主人瀝茶を入れて薦む、二三の在舎の人々と共に爐を圍みて専ら前程を尋ね、種々の話談をなす、傍に二頭の獵犬あり、來りて余等の側に伏す、さすがに異種を交へざる純然たる山間の日本犬なれば、面貌猛烈甚だ氣味悪し。加之彼の原町にて同



宿なりし二人の男來る、何となく風采怪しげに、しかも其指して行衛は未定なりといふ、かゝる深山幽谷の間に目的もなく、迷ひ入れるなどは實に怪しき限にて、或は胡麻灰か、はた罪を犯して身を入るゝに處なき無賴漢の類か、とにかくに一曲ある奴なるべしときながら薄氣味悪く、余等はいざとて主人に謝辭して、小舎を立出で、葉木路を取りて急ぐ、これより葉木までは、定めて下り坂のみにて、一氣呵成の勢もて進まんといひあへりしも、進むに従て、路は愈々狭く、雪融けて水流れ、宛ら溪間を行くに異ならず、足は再び感覺を失ひ、さなきだに蹶滑すべき路なれば、進行更に捗らず、困難に困難を重ねるに至りぬ。呻きく進むうち、仁田尾と葉木とに向ふ岐路に出づ、教へられたるまゝに左方を取りて行き初めて苦界を遁れ、漸く踏み堪ふべき路となりぬ。いでや急がんと上り坂下り坂を辿りて、谷川を渡ること凡そ四回、皆例の丸木橋なり、橋の材既に濡ひ、已が鞋も潤へるを以て、いと滑にて時々倒覆せんとす、下は是れ淙々たる溪流、漚々たる湍湍、岩に激して水砕け、或は流れて瀬となり、或は溜りて淵となれる如き有様なれば、氣味悪きこと限なし。やがて巖の小舎より二里許も來りしと思ふ頃より、山漸く高く谷愈々深く、右方は脚下幾百仞とも知れざる溪谷にて、左方は斷崖聳立高さ知るべからず、僅に山を旋りて山腹

葉木村

に出入參差する一條の通路、吾人を運ぶものあるのみ、一步右轉すれば蓋し是れ長夜の鬼たちん、猶上りつ、おりつ、谷を越え山を旋り、やうく葉木村に達す。村としいへばせめては三四十戸もあるべしと、思ひきや僅に五六戸のみにて、是れぞ葉木の本村なるとは、皆茅葺の屋根にて、爐たく柴の煙の棟木の隅より立昇れるを見る。村端の小舎に入り路を尋ねんとすれば、一人の老翁あり、四尺の小男も頭うたんばかりの低き天井の下に薪をくすべ、例の襪はしき衣を纏ひて眠れるを見る、げに太古草莽の住居とはこれに近きものこそ思はれたれ、

五家の山踏み分け入れれば千早振、神代のさまぞ知るべかりける、

なども腰折し、こゝより前と同じやうの路を上下し、下りては溪水の清かなるを渡り、上りては峰の尾花を踏みしだき、凡そ一里餘も來りしと思ふ頃より全く下り坂となり、つゞらなりなす路を深き溪底まで下りて、遂に葉木下屋敷しんやまといふ家三四戸計ある處に着きぬ。未だ時早きも、路歩み難く雨はいや増に降り來れば、已むを得ず樅木に出づるをやめて此處に泊せんとし、兼て聞きたる此村の豪家豪かたさく方佐熊氏を訪ひて、今宵一夜の宿を頼む。幸に快く諾せられ遂に足を洗ひて座敷に上る、さすが村中の豪家だけに四五の間あり、我等

葉木下
屋敷

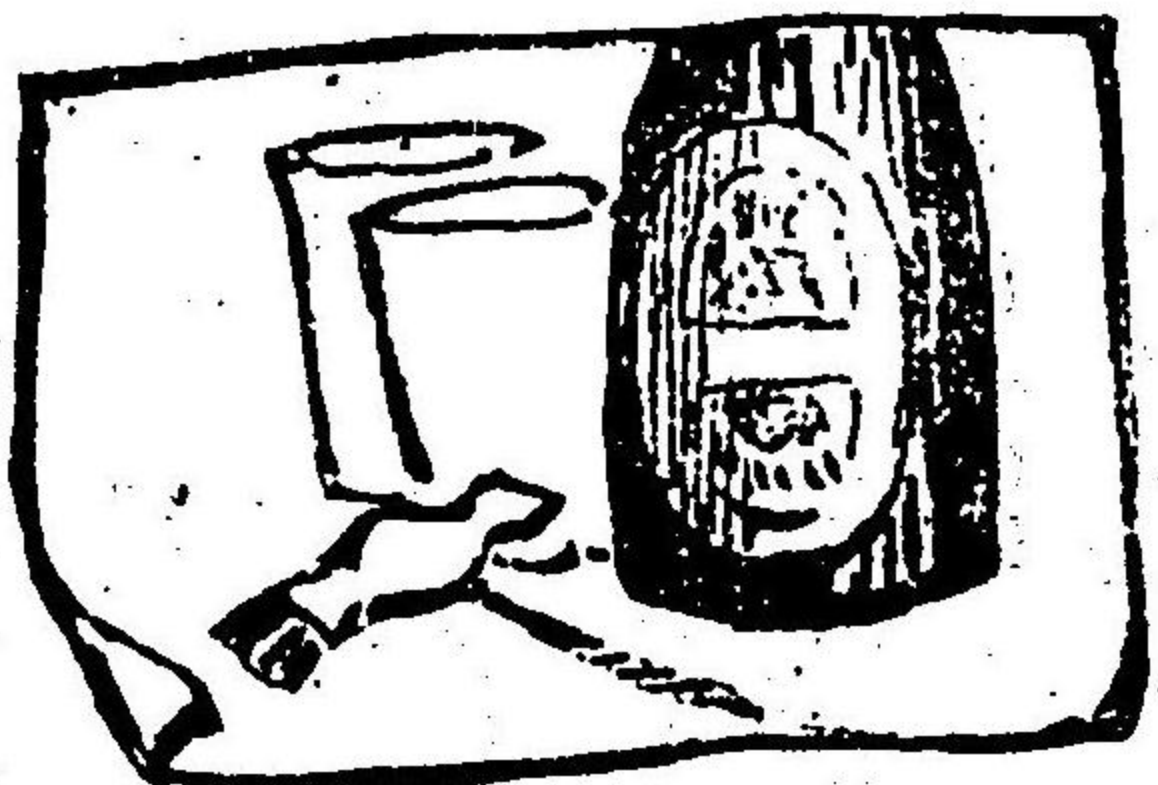
生活の模様の

の通されたるはその支關の間なり、蓋し爐を此處に切りたる故なり、木材はいと豊なれば建築は粗造なれどもいと美し、されども四方メ切にて室内の暗き加減言語同斷なり。爐にくすぶる薪の煙は棟の一隅より外に遁道なければ、煙室内に充滿して燻さいはん方なく、げに窒息せんばかりなり、肺病患者などは先づ赴かざるを宜さす、爐には例の自在鉤にて鐵瓶を懸けたり、鐵瓶の蓋を取りて急須を置く風習は、肥後風と異る所なし。家内の者は晝山に入りて草を刈り木を伐り、夜は絶えて何事をもなさず、火をも點ぜず、漸く爐に燃ゆる火の光を以て、物の黒白を分つのみ、身に纏へる衣も絶て洗滌せし事なしと見え、いと垢つきわたり、汚き言語に絶す。加之五體も餘り洗ふことなしと見え、何となく煤黒く一種の異色を帯びたり、かゝる豪家にて然り、況や他の家々に於ては之に一步を踰ゆることなるべし、其生活のいかにシンプルなる推して知るべし。されども一種異様の容貌に特色あるは亦注意すべき所なり。

其家の妻君と思はるゝ人は何くれと世話なしくれ、案外にも明日は節句なればとて菱餅の饗應あり、思はぬ馳走を受けぬ、やがて主人めきたる男入り來りて、爐の一隅に座を取りぬ、吾等は其何人なるを知らず、徒に聲かくるもいかいと扣へ、濡れたる衣を乾かして居たり、されとも彼は一言だに發せずして隣室に入れり、吾人其横柄千萬なるに驚きぬ。曾て聞く五家山内の人には皆桓武天皇の後平氏の苗裔なり、今こそ深山の賤が男なれ、もと金殿玉樓に綾羅錦繡を纏ひし貴公子なりし、汝等書生輩よりは一級上なりといふ如き考を懐けりと、かてゝ加へて維新來世の

其夜

犯罪者が多く此地に通れ來り書生風商人風をなして、此地の質朴なる性情を悪化せしめしを以て、今はかゝる横柄なる者多しと、此主人の如き人も亦此類なるべし。やがて夕食も出で來る、原町の亭主の忠告も杞憂に過ぎ



燃えず、絶えずくすぶり、息の苦さ目の痛さ限なし、やがて隣室に床とりたれば、眠りたまへとの事にて、直に入りて臥す、蒲團は上蒲團のみにて敷蒲團なし、唯寢蓆を敷きて其上に眠るなり、加之蓆一枚の下に疊なく板敷なれば、寒さと痛さとは言語道斷なり、かて

加へて蒲團も例の衣服と同一轍なれば、汚穢限なし、よもすから寒さと苦さとにて、よくもまどろます。

さなきだにさゆる深山によもすから夢結ばれぬけふのわびしさ

夜半に入りて寒さ一入身にしみ堪ふべくもあらず、然れども晝間の勞にていつしか夢境に入り、フト目を覺せばはや時儀七時を示す、驚て起き出で戶外に立出づれば、けふは意外の好天氣なり、一同相賀し爐を圍て此家の夫妻と四方山の談話に移る。主人もけさは少しく口を開て物語る所あり、余は話の序偶々記録系圖寶物類の持傳へ給へるものなきやの事に及ぶ。彼曰く我が家には悉く集めて之を蔵すれどもそは容易に出すべきにあらず、加之近頃書生輩の來て此を謄寫する如きあり實に以ての外なれば、今は如何なる人にも見せずなど、宛ら吾人に當付けたる如し。吾等もさるもの例の奇怪の寶物なるを信ずれば、敢て見んともいはず、さて道筋を尋ね、朝餐を喫し、樅木村は五家山中にてはや、賑はしき山なるも、途上より見下すを得べく、此處に赴きて椎原に出でんには、再び此處に歸り來らざるべからざる山なれば、遂に樅木行を中止して仁田尾に出で、直に椎原に出でんとす。十時頃漸く葉木下屋敷を辭し急阪を登る、此間、路は手を伸べて地に達するを得べく、足

記録寶物類

一小舎

趾高く天を仰ぎ峻嶮言語に絶す。此あたり一帯の地は玉蜀黍を植ふんが爲に焼枯したる所なれば、旭日背後を照して燦くが如く、氣息燄々流汗津々、さながら人心地せず、漸くにして少しく平かなる地の一小舎に達す、横平よこたひらと稱す。五六の男女例の褌襦に捲かれて余等の一行を熱視し、獠惡牙を磨ける獵犬數匹其傍に据れり、此茅舎の内には獵銃と生々しき獸皮をかけたるのみにて、家財の如きものもなく、吾人をしていと薄氣味惡き心地をななさしめ、轉たカラブリアのアドベンチャーを追懐せしめぬ。之より上りつ下りつして仁田尾なに着す、途上五家の人としては卑しからぬ風姿の姫君の、いと苦もなく此等の坂路を昇降せるを見、五人赧顏の至りにたへず、これも古なれば一步の踏出しさへ人手をかりし錦帳紅圍にあるべかりける人かと思へば、げに氣の毒千萬の心地こそしたりけれ。

仁田尾

仁田尾村は其範圍甚廣くして此處は其中の字屋敷といへる地なり、戸數十數戸もあるべく茅舎のみ列れり、途上右方に一神社ありて菅公を祭る、之より一谿水を渡りて字フウノ木に出づ、犬類に吠ゆ。やがて峻急なる下り坂となる、續りて下るべき葛蘿の這ふものもなく、攀ふべき樹木もなし、危き加減筆紙の及ぶ所にあらず、六十の老媪水桶を擔ひて此處を上り來る、殆ど人間仕業なるや否やを疑はしむ。聞く五家の人には却て平地を歩むに苦む

と、げに此手際にてはいかなる峻坂も朝飯前なるべし、下り詰て川あり、水奔湍にほどほしりて、清冽掬すべし。かゝる小川を屢々渡り、山々上下し、岩角を攀ち峻坂を登りて、路上崩壊せる峻崖に膽を冷し、獨木橋を渡りては足を震はし、道に陸を求めて休息し、水を吸んで恠しげなる腰辨當の握飯引出し書嚢を終へ、次第く々に稜先上りを迎る、此邊山は愈々高くして谷は益々深く、一步を誤たんには、正に是れ長夜の鬼なるべし。漸く登り詰めたりと思ふ頃、遂に重疊せる層嶂と幾々の深溪を隔て、稱檀轟瀑を見る、蒼鬱たる樹間に白練を垂れたる如く、碧樹の間に隠見し、水聲耳に達し難しと雖、岩角を怒撃し、玉瑩き珠跳るの概は猶此處より親ふを得べし。然れども惜いかな下部は繁樹之を遮て見えす。之より椎原の家々も見えしかば、元氣も一入つき一息を以て下り坂の曲折したるを馳せ下る、下り詰めたる所に音に聞きたる釣橋あり、其構造を見るに大木の兩岸よりさし向ひたるを求めて、其枝より藤蔓の太やかなるものを幾條となく垂下し、其蔓を以て結び合せたる竹を釣りたるものにて、曾て見し祖谷山の釣橋と異なる所なし。川



稱檀轟瀑

釣橋

椎原

幅いと廣く水は溜りて深窪をなし水色藍の如く、奔湍の飛沫雪の如し、橋板を踏く凡そ半過まで來れりと思ふ頃、フラーリ／＼と動揺す、猶鞦韆の如し、下方の深淵を眺めて氣味悪きこと喩へんにもものなし。之より少しく上れば人家あり、是れ即ち椎原村なりとす、さすが五箇庄の地頭平家正胤緒方氏の居村だけありて人家も堅牢にて清潔なり、到底葉木仁田尾樅木の比にあらず、時に午後三時ともなりしかば、此村に今宵一夜の宿を借らんとて未だ議決せざるうち一巡査に出遇ひぬ。地獄で佛といふ心地して直に區長緒方氏の宅を尋ね、かしこの大木ある家なりといふ、巡査更に言を添へて曰く、緒方氏は近頃在宅や否やを明にせず、且此村に過日來天然痘輸入せられ、今七八人の患者あり、余の出張し來れる其爲なりと、一同驚て緒方氏の家に泊し種々の談話を聞かんと欲すれども、天然痘は何より恐し、かゝる深山の間にて取付かれてもせば、それこそ大事なれ、いでや今二里許を急で久連子に至らんと、毛虫に觸れたる如き心地にて、早速椎原を去て坂路を上下し、川を渡り酸をくぐり、茶畑粟畑を分けて日の暮れざる中にと、大急ぎに急ぎて、六時頃漸く久連子に着す。直に區長平森氏を助て一夜の宿を依頼す、前夜の如く、爐邊につどふも、このたびは一家内妻君も小兒も皆其周圍に列し、例の薪を焚きて又恠しげなる夕餉したむ、飢

久連子

五家の
由來の

悉たる身にはいと旨し、腹もふくれ爐火いよ／＼盛なる頃、主人を叩て五箇庄の由來現況等くさ／＼の事を問ふ。主人口を開て諄々として語る所あり、曰く、元暦元年平氏の檀浦に一敗し、諸將袖を連れて海底の藻屑となりたるとき、重盛の三男左中將清經以下主従六人、同年三月廿五日を以て潜に逃れ、豊前小倉の内裏(大里)に渡り、夫より中津へ落ち、暫く此處に日を送りしうち、豊後竹田領に緒方三郎實國といふ者あり、此主従六人の苦めるを聞き、同年七月に清經を其の館に招き、二年許の日月を送る。問もなく實國はふとしてたる風の心地よりやみつき、はや餘年も少なくなりしかば、一日清經を招きていふやう、我が病もいと頼み少うなりぬ、おこころは今より薩摩國へ志さるべし、かの地には御一門の方々も多しと聞く、いまはのきはにいと心残せらるは一人の娘、願くば御身が朝夕の助にも召し遣はれ給へかし、唯是のみの御頼ぞよといひて、遂にみまかりぬ。時に清經は十七歳實國の女十五歳なり。實國の死後清經主従は直に薩摩路さして落ちのぶ、途中豊後國竹田藏岡といへる所にて三十六人の山賊に出遇ふ、彼等矢庭に斬附かりしも、こなたすかさず戦ひて遂に十二人を生捕り他は行方不知なりたり。時に山賊の首領に數馬といへる者あり、命を助け給へかし、我れ今より白鳥嶽の住家へ御身を案内すべし、とて遂に今

五家の
世に知
られし
始め

の五箇庄の地に入込み、久運子椎原樞木中村藏座と分て之に住したり、是れ實に文治二年の事なりき。椎原は左中將清經の住居したる所にて今の緒方氏は其正胤なりといふ、或は此等の人のすまゐしは久運椎原樞木にて葉木(中村)仁田尾(藏座)は右山賊數馬の後なり、其地に緒方の姓を名乗る者は後世の偽稱にて、眞に緒方とか平森平木などいへる姓を稱するは上の三村に限れるなりといふ。かくて五家庄の山奥に人を知るは普通世に樞木川の下流に櫛の流れ來りたるによりて之を知りしといへども、實は五家庄の事にあらず、更に下にある五木村の事なり、(五木の地はいつの世にか源氏の落武者の求めて住居したる所にて、圖らず兩地の人落遇ひ衝突を起したることあり、今猶此地には畠山樞原など名乗れる家多しといふ)其五木といふは櫛の事なれば、其名の起りはこゝにあるなり。而して五家庄の知られしは、八代の奥川侯の鹽商人に何兵衛とかいへる者あり、一日圖らず山に踏迷ひて五家の人に遇ひ、鹽の輸入を托せられ、夜間竊に鹽を輸入して巨大の利潤を得、世人に恠まるゝ所となり、始めて五家庄あるを知りたり。爾來緒方藏座二家儼然たる地頭として五家庄に於ける權力を一手に掌握し、維新に及ぶ。明治六年始めて他と交通を始め、各家を分て轉住せり、以前は一家五十人位の家族にて平素は小倉に住居し、年頭盂蘭盆會

由來の
異説と
史的價
値

などに出て、會するなり、などいいと詳細に語らる。談いと面白く折焚く柴の夕煙り、爐の火も漸く絶えんとし、主人の談は四方山の話に移り、いと趣味深きも更既に聞ければ身の勞も甚しからんとて、遂に一同昨夜の如く爐邊の一隅に煎餅蒲團をかぶりて眠に就く。五箇の由來に付ては五箇庄由來記といへるものありて大略右平森氏の談の如くなれども、他に異説少なからず、或は藏座中村の一族を以て菅公の裔なりとなす、笑ふにたへたり。其他由來のをかしきもの夥多あり、何れも多少の異同出入を免れず、其傳説として歴史的價値に付ては雜誌「歴史地理」第三卷第二號に載せられたれば多くはいはず。唯清經といへる人が此地に來りたることは諸傳説一致せり。されども其源は又一なるものか、今俄に判定し難し。又到底其正確なる事實は知るべくもあらず、序ながら近世の沿革と現今の狀況に付て二三の事を附記せんとす、五箇庄覺書といへるものによれば、肥後阿蘇大宮司の勢を得たる時、此地は其支配の下にありしが、其後世亂れ何人の手をも脱しをりたるが、加藤清正の熊本に治すや、山知行の安堵狀を賜ひ、尋て細川氏來りて後も綱利公の時まで五人の地頭在りて之を治したり。貞享二年より天草代官服部六左衛門に移り、庄屋制を施され、租税をも納め獵銃税家宅税等を徴收せられ、「きりすたん」御法度の宗門改あり、踏繪を行

近世の
狀況

はしめられたり、之より代官相つゞきて此所を支配したる山見ゆ。教育は明治に入りて、安岡熊本縣令が明治七年九月に此地を巡回し、大に此道を盛にし、僅に十數戸の村にも必ず一校を備へ教化頗るよく行届けりといふ。此地は猶在外の者と結婚する事なし、(女子は時に庄外に嫁すことあり)庄内血族互に婚を結ぶものなりといへども幸に忌はしき病に罹れる者を見ざるは實に喜ぶべき所にして、熊本病院長も實に此地に特有なりといひならるゝ由なり。此地の人々の風采の九州的ならざると、言語の上方的なるとは最も注意すべきものといふべし。地勢峰巒重疊し、日島岳高く秀で樅木川僅に狹隘なる峽路を開き、即ち此五家庄一帶の溪谷を作れり、地味全く瘠せ、享保の覺書には「めめ高四石四斗六升七合とあり、米の如きは殆ど作り得べき地にあらず、人民は皆五穀としては粟稗玉蜀黍の如きを常食とせり、椎茸及び茶は此地の特産なり、良材は山より伐り出さると雖、運搬すべき途なし。アルコール的飲料は稗より採る、麥漬など又特産なり。

四月五日、此朝は粟飯の饗應に遇ひぬ、印ばかりの謝儀を出して平森氏を辭し、久連子を離れて人吉に向ふ。これにて五家庄も一廻を了へたれば、今日は五木四浦の村々を経て人吉に出でんとす。例の如く、山を上りつ下りつ、獨木橋を渡り、岩角を攀ち、凡そ二里計

眼鏡橋

岐路

はえ村

も来りしと思ふ頃、近頃成りたる眼鏡橋に出づ。これは十數年前まで例の釣橋にて、上下急にして屢々滑り落ちて命を失ふ者多きより、明治廿八年二月平盛永喜氏の力により今の如き堅牢なる石橋に改造したるなりといふ。こゝにて先づ五箇庄境域は終りとなり、又暫く休息し、紀念の爲なりなどとて木を白げなどす。川を渡りて登り途となる、岐路あり、其何れなるを知らず、川に沿て下るを至當と考ふるも、此路甚狭小なり、疑ひながら右の路をとる。幸に一小茅舎あり若夫婦住めり、其如何なる種類の人なるを知らず、試に路を問ふに全く誤れるが如し、蓋しこれは柿迫に出づる路にて、五木に出づるは川に沿ふて下るべしと、今更途勞を悔ゆるも及ばず、再び舊路にかへり溪流を踰えて靜着たる杉林に入る。猶變化なき山路を上下し「はえ」と稱する小村に入る。こゝは既に五箇庄の外にて、兩側の山々も遙に低下し、縦木川の下流混々として流れ、復五箇内の如き深山幽谷を見る能はず、進むに従て人家は所々に散在し、復四面閉塞人蕃の咫尺を認めずといふ如き所なし。藪あり林あり、麥稷の田畑も處々に連り時々平坦の地を見る。此邊は一帶に五木村と



宮園

いひ、久連子區長の所謂源氏の裔といふ所なり、されども五家の如き特色ある容姿の人を見ず。字宮園といふ所に來る、廿間許ある川を渡る、道路は川に沿て走り、或は山角を繞り或は林間を貫く、川は獨り深々として奇岩の間を流れ、或は深々として砂を走らす、急瀬疊湍深潭碧淵愈々出て愈々奇に、亦山水明媚の隈なり。曩の眼鏡橋より四里許も来りしと思ふ頃、漸く五木の本村銅山の麓に出づ、時に日既に四山に傾て暮色將に至らんとす。是に於て一同相談じ、今宵は此處に宿し明朝銅山を訪はんと、先づ旅店とも思はるゝ家々を數軒尋れたるに何れも満員なりとて拒絶せられ、或は六疊の間に四五人を詰め入れんとする如き所のみなれば、何處へも宿する能はず、一同茫然なさんすべなし。日ははや全く落ちて暮色沈々として至り唯銅山夜業の火の輝くを見るのみ、一同つぶやいて曰く、深々山中道路峻 日没西山薄暮近 四人求宿銅山麓 館主拒之不徳人と狂氣めけるもいとをかし、然れどもかゝる戲談をいひ居る時にあられば、更に十數町もと來し路に歸り、一軒の宿屋を見附たり、一同喜悅措く能はず、入て一宿を依頼す、案外にもいと美しき家にて待遇亦頗る宜し、樓川に面し山に添ひ風景亦可なるが如し(夜なれば見えぬと御察あれ)終夜涼々たる潺湲たる溪聲を聞て眠る。

銅山

五日、晨起五木銅山に至り鑛穴を見る、鑛石を採集する所より、分解する所、精製する所、一々詳細なる案内を受け、或は梯を下りて深く地下數十尺の處に至り、或は遠く開鑿する狹路を進む、窟内暗惰氣味悪きこと限なし。分解する所は硫氣四面を閉塞して永く居るべからず。やがて銅山を謝し人吉方面に向つて出發す。此銅山は近頃開けたるものにて餘り世に著はれたるものならねど、此地方の銅山にては先づ屈指のものといふべし。渡船にて前岸に渡り、五木村を過ぎ川を越え、初めて四浦村に入る。川は諸水を併せて愈々大に名を阿邊川といふ、蓋し樅木川の downstream なり。又いと長き處々に散在せる四浦の一村を過ぎ、山はいよゝ低く田圃漸く相望むに至る。四浦村は郵便局もあり五木村より更に大なり、之より川に沿ふて下ること凡て二里川邊村に出づ、山益低く川幅益々大にして復五家の趣を見る能はず、やがて川を渡りて四岸に出て深水村を過ぎ、千偏一律の變化なき上下の路を踏みて、四浦より凡そ五里にして人吉町に着す。

人吉町

球磨川

人吉町は肥後南部の一都邑にして、土地高燥氣候順和、球磨の大川を狭て兩岸に建築せられたる山間の一寔區なり。山水の風景頗る雄拔にして江代市房の二峰東方に峙ち、白巖山東南に連り、作鳥帽子岳北岳照岳等連絡西北に重疊す、球磨川は源を江代片尾山に發し、

人吉城址



多良木深田等の諸村を過ぎ、柳瀬村に川邊川を併せ、人吉の中央へ貫き蜿蜒として西北に向ひ走る。水の清冽なる、流の急激なる、兩岸の峭壁巖峯の奇絶なる、實に他に類なき河流なり。人吉は實に此川を挟み中央の砂洲ありて、斷橋を以て連結せり、北を大橋といひ南を小俣橋といふ、江南は則ち舊城下にして江北は市町なり、吾人は先づ江南に至りて舊城址を訪ふ。城址は川を渡りて左方字籠町といへる所にあり、川に沿ひて今猶舊壘を窺ふを得べし。建久九年十二月遠江國相良莊城主相良長頼新に此地に封せられ、所謂球磨三莊の地を治す、當時此地は平頼盛の采色たりしかば、城代矢瀬主馬介尙城に在り、門を閉して降らず、長頼之を攻めて陥れ、遂に其居住の地となす、爾來連絡相傳へ、九代前頼十代頼頼十一代長頼十二代爲頼十三代長每等、南北朝より足利中世に及んで、菊池阿蘇との關係に付ては沙彌洞然長狀に詳細見ゆるが如く、亦當時肥後の一名族たりなり。之より徳川代に及ても安堵して舊領地を所轄し、長每後廿二世を経て頼基に至り王政維新となりて、舊領を奉還したるなり、長頼の始めて據りしは今田畝となれる上原城なり。今の城地は其

人吉神

西南戦
争紀念
碑

物産

西遊記

壁壘長吉莊にありしより長吉城といひしを、長頼の封後人吉城といふ、又別に織月城の名あり。天守閣の址に登れば前岸の人吉市街はもとより滔々として張れる球磨川の水悉く脚下に横り、風光絶佳なり。人吉神社は其傍にありて相良氏歴代の靈を祀る。此處は廿一代頼寛よりの居住地にて、今社殿を其跡に新築せしなり、境地蕭洒にして風趣清絶なり。又城地の傍に西南戦争の紀念碑あり、西郷隆盛の破れて南走するや、土手町の永國寺といへる所を本陣となしたりといふ。其他寺には觀音寺願成寺大信寺等あり、江南の市街は多く舊士族屋敷にして社寺官衙の類大概此處にあり。江北は商賈物を連れ、百貨悉く備はり、實に日向薩摩肥後の三國を連結する要衝に當りて、最も重要な地點たり。其産出する物産としては材木或は植物性の材料を用ひて製するもの等の種類あり。一行は町の中央とも思はるゝ邊の十蔵屋といへる旅館に泊る。

六日、けふは愈々日本三急流の一と稱せらるゝ球磨川くまがはを降らんとす。橋南くまがはの西遊記此川の奇を説くより續々單に其勝を探らんとして遠く來る者あり、近來は外國人の來遊する者多しといふ。船は十文字角を右し川端に出でたる所に出船所あり、毎日七八時頃に定期の乗合船あり、船は長さ三丈幅四五尺計のものにて、乗組人員十一名を満員とす、然れ

林正盛

球磨川
を降る

鎗倒

ども乗合船は日殿等を作りて甚不快なり。人吉より八代に至る凡そ十六里、普通六時間か以て過すべし。橋南くまがはは唯二時計といへり、最も水量の多かりし時の如くなれば四時間位にて着せしものなるべし。此川古は舟筏を通する能はざりしものなるに、九日町の林藤右衛門正盛まさもりといへる人、寛文四年に土工を起し、私財を投じて凡そ五年間拮据經營の餘に成りしものなり、今其恩恵を蒙る者實に少しとせず、而も之を知る人少なきは甚だ慨嘆の至りに勝へざるなり。世人徒に球磨川の奇を説くも、更に此奇を探くるに便を興へし人に付ていはず、蓋し以て得たりとなすべけんや。人吉町に舟を續し川發したるは午前八時過、暫しは崔乎たる四山の春光を眺め、優々として下る、漸くにして流俄に急に、愈々進て益激し、渡村を過ぐる頃には高山峰を挾て立ち、船は奔湍に駈て矢の如く、舟夫前後にありて楫を併川し、相應じて嶮礁を避く。山去り山來り右折左旋、流は益隘く水は愈々激す、惟巖奇岩亂水の間に蟠り、惟岩峭壁削れるが如く、實に奇觀たるを失はず。球磨太郎山下か過ぎ、有名なる「鎗倒し」の岩に至る。傳へ云、昔藩君川を下るに會て其鎗の鎗を倒したることなし、然るに此所に至ては船嶮の頭上より口を開て相逼まれる如き所に入るものなれば、さすがの傲慢なる君主も遂に此所にては其鎗を倒したりとて、しか名づけしと

神瀬

いふ。川迂回する處巉巖頭上に廻り、流勢激甚最も快哉を呼ばしむる所なり。御前岩に到れば大盤石河心に蟠り、水之に碎けて飛瀾粉沫迸て船に入り衣袂爲に濡ひ、船客をして思はず毛髮を豎たしむる思あり。神瀬カウリセに於て休憩し、晝食を終ふ、此所は入吉八代間の半程なり、此地より奥に入ること十八町にして鐘乳洞ありといへども暇なければ往かす。益々下り益々奇、兩岸の巖壁奇草怪樹を生じ、青紅相交はり頗る美觀なり、時々晚鶯の林間に囀づるを聞く、唯乗合の田舎男の愚にもつかぬ談話が耳障りとなるのみ。漸くにして鞆鞆たる雷聲の如き波瀾も終り、兩岸の山も低く、川幅廣くして流亦從て緩となり、漸次沖積層の八代平野に出で、蜿蜒たる堤塘に沿て、徐々に降り午後二時過八代に着す。顧みれば球磨川六十四瀬、大小種々ありと雖、高曾二侯修理網場鎗ヤリタニシ倒の如き其最も激烈なるもの鎗倒に於て妙最も極まれりといふべし。げに橋南谿の球磨川記更に虚を傳へざるものにて、富士最上は未だ之を下りたることなきも恐く並て日本三急流の一といふ名に背かざるべし。八代に上陸し直に停車場に至り熊本に無事歸着せしは、午後四時頃なりき。

名蹟巡錫記 終

八代

南薩の三勝

鷗

南薩の風景

薩摩南部の地、頗る佳景に富む、しかも其風景は悉く雄大跌宕、近畿地方の風景を平安朝の文學に比せば、此地方には奈良朝の文學を見るが如く、爛熳たる芳山嵐峽の華美艶麗なるものなしと雖、自然の風景は雄偉卓抜にして、大海若しくは火山の作用に成り、一見覺えず快哉を叫ばしむるもののみなり。辛丑の冬、吾適々閑暇を得て、此地方に旅行を試みぬ、今當時の旅行記を全躰こゝに登載せんと欲するも、少しく長きに失し、到底此小冊子に收め難きを以て、特に其中より拔萃し、南薩の三勝と題して、吹上濱フキノハマ、坊津ボラノツ、開聞嶽カイモンタケの三者を記述する事となしぬ。

(一) 吹上濱

大砂濱

吹上濱は薩摩國西海岸の名勝にして、我邦に於ては他に到底見るべからざる大砂濱なり。我邦の海濱由來白砂青松の風色到る處に饒多なりと雖、多くは青松主にして白砂是れ客たり、獨り此地の砂濱は數里の間、白砂主にして松は唯客たるに過ぎず。其幅一里より半里に及び、狭さも數町に亘りて、實に絶大の大砂濱なり。地は川邊郡田布施村より加世田村の間に及び、田布施村大字池邊より高橋の附近を以て其中央となす。中央に一條の川を通ず、萬の瀬川といふ。此大砂濱の生ずる理由は、蓋し此地西北大海に面するを以て、亞細亞大陸より吹き來る風激烈に衝き當り、海中の砂陸上に吹上げられ、遂に此偉觀を呈するに至りしなり。殊に冬季の強風來る時は白砂空に捲き、海濱に堆積して山をなし、更に之を吹散して漸次陸地に侵

位置

砂濱の生ずる理由

其狀況

入し、林叢岡阜田畠草木爲に埋れて、全く砂を以て山をなし、谷を作り、爲に老松埋れて稚松に似、或處は砂阜獨り堆くして際涯なく、げに大陸の沙漠なるものは、此の如きものなるべしと思はるゝばかりなり。景色雄大にして清冽に、四方白皚々、雪月の夜に髣髴たり。吾人の赴きたるは恰も冬季の事なれば、西北の風甚だ強く、殊に此地に至りし時は最も激烈なりしを以て實に爽快にして豪壯に、一陣の疾風吹き來る時は思はず快哉を呼ばしめたりき。疾風起りて白煙忽ち奮起し、四面暗澹殆と咫尺を辨ぜざるに至るもの屢なり。殊に陸地に向つて田地を埋むる勢は實に驚くばかりにして、一回の烈風能く數頃の田畠を埋没し去るが如し。若し此勢を以て進めば、田布施村は遂に沙中のものとならんを保し難し。其勢の強烈なる、其風色の壯大なる、實に他に比類なきものといふべし。正木葛卷十雜部

に、
吹上の濱の眞砂にうづもれて老木ながらの小松原かな
といへるは、眞に實景にて、巨大なる老松も、其頭を現はせるのみ
なれば、稚松と撰ぶ所なく、眞に絶景といふべし。殊に蓮の峯とい
へるは諸人遊觀の地にて吹上の中にて最も高く、是に登れば吹上沿
海數里の砂濱一眸の下に聚まるなり。西遊記さいゆうきにも此濱を嘆賞して、
諸國に吹上の濱といふは數多あり、海風荒き遠淺の濱に白砂を吹
上ぐる地を何方にても吹上と名付くるなるべし。就中優れたるは、
薩州西南の濱の吹上なり、其海元より限なき大洋にて、風荒けれ
ば白砂をうつ高く吹き上げ、又是を吹き散らすゆゑに、其砂の高
低定まらず、殊に濱長く數十里を一目に望む、潔白の海上にて白
砂一点の塵もなく風景不双なり云々、

神代の
古跡の

此濱は更に加世田村に通じ、之れより屈曲して、小湊村附近に及べ
り。小湊村より大浦の港灣を隔て、一面には長屋山、一面には野間
岳聳立せり。是れ共に神代の故跡、即ち笠狭崎といふは、實に此處
なるべし。今野間岳を以て高千穂峯たかちほに擬し、長屋山を以て吾田長屋
に擬す、必しも故なしとすべけんや。殊に吹上濱の地勢の如き、大
に此等の徵證に供して、一考の値あるべく、今吾人がこゝに南薩三
勝の一として、抄出せしもの單に風景を賞玩するのみの目的にあら
ず、聊か其中に歴史上の其理を抽象せんが爲なりとす。然れども吾
人が此處に赴きたる時は、時日に乏しく、單に匆々加世田を通過せ
しのみにて、未だ詳細なる研究をなす暇なかりしを以て、猶ほ我が
所説に至りては、少しく考ふる所なきにあらねど、他日再調の上之
を述ぶべく、爰にはまづ省畧に従ふ。

(二) 坊

加世田より南方三里、枕崎港あり、南薩漁業の中心にて頗る繁盛を極む。是より西方二里にて坊津に入る。此地の詳細なる記事に至りては、歴史地理第四卷第五號に之を記載せしが、猶爰には少しく紀行牒に物せんとす。

余が此地に來りしは、辛丑の大晦日なりき。三十日の夜を枕崎に過し、卅一日の朝西向し、和田濱の砂濱を過ぎぬ。此處は彼の文祿中近衛信輔公が坊津に來りし時上陸したる遺跡と稱する所にて「薩摩かた和田の崎なるひとつ松霧の中より船よはふらし」の詠を残せりといへる近衛松を過ぎ、小湊川を渡り、一二の小村を経て、路は蜿蜒たる並木道となる。南島地方の風習にて、婦人が物を運ぶに之を頭上に登載するは、鹿兒島邊にも屢々見る所なるが、此地に於ては

坊

吾が旅行

和田濱

婦人の風俗

最も多く、恰も歳末匆々の際なれば、吾人の如き無責任なる生活をなす者は明日の正月に痛痒を感じることもなきも、來往の人は皆各明日の準備とて、頭上に諸種の物品を載せて往來せり。或ひは大なる鱈一尾頭上に載せ行くあり、或は米俵を運ぶあり、或は酒を載せて巧に操り行くあり、されば一般に婦人の姿勢正しき事驚くばかりなり。並木路は爪先上りにて、容易に盡くべくもなきも、上るに従て眼界漸く開け來り、南薩の絶景將に一眸の下に聚まらんとす。絶頂を耳取峠といふ、此處に到れば眼の及ぶ限り廣濶なる一幅のパノラマにして、海陸数十里の好景を悉く爰に收め、開聞嶽は正東の海中に漂ひ、其形状富士に異ならず、大隅佐多岬は海中に突出して黛を布きたるが如く、硫黄屋久竹の諸島之より西に連り、水天髣髴の間に點綴せり。眼下の港灣は枕崎港にて、立神巖突兀として海中に立

耳取峠

ち、之より長汀曲浦、あるは枕崎港の人家櫛比するもの、あるは穎娃知覽の田野草邑、點在するもの、曲折集散頗る奇巧を弄せるを見る。其眺望の絶佳なること、實に南薩に於て第一と稱するに憚らず。而して此時を耳取と稱するは、冬季大洋より吹き來る西北風を眞受するにより、行人の耳切取らるゝの感あるを以て、此名ありといふ。風さまで甚しからざりしと見え、吾等は此難に遇はざりしは甚だ幸なりき。此峠を踰ゆれば、眼界忽ち變じて山中の湖水に似たる小區劃の港灣を見る。是れ即ち坊津にて、水を周りて市街建設せられ、宏壯なる家屋櫛比せり、十町許の急阪を降りて遂に村に入る。

此地は平安朝末に於ては、攝家の所領たる島津莊の要港にて、菅原道眞が遣唐使廢止の議以來、朝廷の彼國と交通することは中絶せられたるも、商賈僧侶の輩の渡航する者多く、此港よりなし、博多津阿

坊

濃津と共に日本三津の一に數へられたるなり。鎌倉時代の初に天野遠景が鎮西奉行として來りし時も、此地には特殊の取扱をなしたりといへば、此地は藤原氏の所領たると共に、外國品を輸入せし最も樞要の地點たりしものなるべし。島津氏入國以後も猶盛に貿易を營み、西洋船も屢々來着し、當時宣教師の如き者も夥多來り居りしもの、如く、織豊時代の宣教師文書類にも屢々現はれ、徳川代の初までは、猶多少盛なりしならんも、慶長以後平戸開かれ、長崎起り、此地復いふに堪へず。

此地三面悉く山を以て圍繞し、内に一小灣を抱き、港口は西方に向ひ、口狭うして奥遠く、港灣小なりと雖、各方面の風を保障して頗る安全なる港なり。底甚だ深くして大抵三四十仞あり、大艦巨舶を繋ぐに屈竟の地なるも、悲い哉灣内狭小にして夥多の船を容るべか

地勢

らず。然れども往古は船も小にして、さまで大數にもあらざるべく、藤原氏の領地として支那に通ずるに、陸路の最南端にて、比較的支那にも近ければ、不完全ながら其繁盛を維持したるなり。平戸長崎開くるに於ては、到底何れの點より見るも比較し得べきものならず。其交通の不便なる、決して車力などを通ずべからず、市街は山の中腹以下に建築せられ、村内の來往さへ頗る其難を訴ふべきばかりなり。或人の狂歌に、

道すがら車にあはて大臣を乗する魔鳥荷ふ坊の津

といへるは、實に此地の實情といふべし。されば今は商賈もなく唯一漁村に過ぎず、其一二豪家と見ゆるものは、魚問屋にて、近來の鰯漁に巨利を博したるものなり、されば今は七八代より古き舊家といふ如き家なし。

港内の
絶景

午前十一時頃此地に到着せしが、一行はまづ坊津港内にある絶景を探らんとし、海濱に立てる一老翁に依頼して船を出さしめんとす、言語双方容易に通ぜず、漸く我等の目的も分り、別に水夫を一人伴ひ來りて、海上に乗出す。港内に鶴ヶ崎といふ岬角あり、凡そ一町に濶三十間許斗出して土人遊樂の地となれり。此邊最も絶景にして、奇巖あり恠松あり、海水亂礁を洗つて頗る趣あるを覺ゆ。港口に向ふに従つて、此日風猶已まされば、波濤強大、舢舨爲に海上に翻弄せられ、上下左右進むに従つて更に甚しきを加ふ。漸くにして港口に横はれる雙劍石に至る。是れ坊津の奇景を以て鳴る第一のものにて、高さ凡そ七八丈の巖石二箇相並びて、其間相距ること五六間、卓然として波間に屹立し、満潮の時は漁舟能く其間を往來することを得、恰も兩刃を建てたるに似、實に比類少き偉觀といふべし。雙劍石の

雙劍石

高立神

秋月

西北に高立神あり、これは東の一方陸に接して、三面海水環り、高三十餘間、周廻廿餘間あり、巖上草樹生せず、海鳥群立して甚だ奇なり。秋月といふは高立神の西北にあり、東より西に丸き穴透りて、周廻二丈許なり、これを見るに、恰も月輪の如く、頗る絶景なりといふも、恰も海上大に荒れ、船頭行かざらんと欲するを以て、遂に陸に廻航す。西遊記にも、

坊津は邊鄙なるゆゑに、世に普く知らざる所にて、勝景雙ふ所希なり、丹州天橋立巖島など、競べ見るに、天の橋立よりも海面の眺望廣大にして、島の風景いはん方なく、如何なる畫師たりとも、寫し得かたき所なり云々、秋の月と稱する岩穴至りて雅所にして、こなたの岸より見るに、其孔丸く、旁にならべる岩、一つとして同じからず云々、雙劍石と稱するは、五丈許りもあらんとおぼし

き石にて、海面に竹を立たるが如し云々、といひて、此地の風景を激賞せり。其雙劍石の如き、澎湃たる波濤の間に峭然として矗立し、奇絶壯快いふべからず。實に眞個の鬼工といふべし。坊津は歴史上に於て、幾多の回想を起さしむると共に、此絶景奇觀は亦一賞の値あるものにて、地僻せりと雖、歴史家と共に文人墨客の漫遊を慫慂する所なり。

外海の波濤に動搖せられ、少しく不快の感ありしが、上陸して漸く神氣恢復し、乃ち村内唯一の某旅店に至る。先客あり部屋僅一にて宿泊し難く、遂に謝絶せらる。まづ晝食を認め、一同額を聚めて談議す、つらく考ふるに、明日は明治三十五年の元旦なり、大晦日を野宿して、元日を迎ふるなどは、甚だ氣のさかぬ話なり、さりとて折角此地に來りしに、何等の調査もなさずして旅宿のある枕崎

旅宿

一乘院

に歸るは甚だ遺憾なり。しかも昨夜の宿は餘り感心の出來た旅宿にあらず、いかゞすべきと議愈決せず。遂に數年前に一たび旅宿をなしたる家ありとの事なれば、之に赴きて談判す。容易に承諾すべうもあらざりしも、漸く談判功を奏して、一夜の厄介を依頼す。乃ち荷物を預けて、一乘院に赴く。今の一乘院は古の一乘院と所を異にし、これは一時破壊せられしものを、再興して今の如く其形のみを残したるものなり。寺僧適々寺庭にあり、吾等の至るを見て箒を止め、種々一乘院の頽廢を慷慨し、津の今昔に付て語る所あり。然れども此住僧は近頃赴任せしものなりとて、更に隣家の山崎氏を介す、乃ち之に赴いて暫く語る所ありしも、別に聞く所の新事實もなかりき。此家地は之を近衛屋敷と稱して、近衛信輔配所の跡なりといふ。信輔は前久の男にて信尹と號し、三藐院と稱す。天正十三年秀吉の怒

近衛屋敷

近衛藤

に觸れて薩摩に配流せらる、乃ち鹿兒島に來り、島津義久に厚遇せられ、立野に館を設く。暫くにして坊津中坊に謫居せらる。是れ當時の邸址にて、一樹の藤あり、根幹周圍一丈餘、其枝四方に繁茂して頗る古木なり。慶長七年赦され、鹿兒島大隅日向を経て志布志より歸京せりといふ。

一乘院の遺址

近衛藤を辭して、所謂坊津の名を得たる、往時の巨刹一乘院の跡を訪はんと、現今小學校地となれる處に赴く。此寺はもと鳥羽帝の頃草創せられしものにて、眞言宗の大寺なり。如意珠山龍巖寺といひ又西海金剛峯寺とも、摩尼珠院ともいふ。鳥羽後奈良兩帝の勅額を拜して、往古より頗る隆盛を極めり。坊津の港灣隆盛なりし當時は、寺院も盛大にて、末寺末坊も甚だ多く、寶物古文書の類も少なからざりしに、度々の炎焼と、維新の際の破壊にて、今は何物をも止め

ず。寶物の如きも四散五分し、鹿兒島地方にて、一乘院の藏品たりしと稱せらるゝものにて一私人の手にあるもの甚だ多く、今は曩の再興一乘院に兆殿司の十六羅漢像あるのみなりといふ。今小學校の敷地は維新の際まで金堂山門などの巍然たりし所にて、猶四五十歳の人は皆當時の宏壯なりし事を語りをれり。小學校前に石像の仁王洞切の刑に處せられて据えられたるものあり、其形の偉大なる殊に石にて造られたるなど驚くべきばかりなり。又小學校内に鬼瓦の碎片あり、丁子鉢の臺に用ゐらる、是又甚だ大なるものにて、其金堂の壯大亦推して知るべきなり。かゝる由緒ある壯大なる寺院も、維新の際の排佛棄古の主義の爲、此悲狀を見るに至りしは、かへすくも嘆ずべき限といふべし。

小學校の後山に寺僧の墳墓あり、之によりて足利中世以後の住僧の

石像仁王

僧侶の墓

名を知るを得べし。其墓制は甚奇異なる様式にて、他に類なし。葬りたる上に土を盛り、其周圍を井戸側の如く築き立て、上には大なる石を置きて蓋となし、周圍に其人の名を刻せり。是より泊浦に出づる間は郷人の墳墓あり、正保元祿頃の古きものも多くあれど、墓石は皆火山灰の塊なる脆性のものなれば、磨滅して讀み難し。此泊浦に出づる間の坂を鳥越坂といふ、其右側に又墳墓多し。中に五輪塔一基あり、近世の修覆なれど、此墓は畠山頼國なる者の墓にて、此人は天文中亂を避けて此地に來り、一乘院に寓して自ら橘隱軒と號し、島津氏よりも賓客の禮を以て遇せられたる人なり。會々墓守の老翁來りしにより、之を叩いて古墓を探り、墓碑より多少の史實を得んとせしも、何等の文字の見ゆるものなければ、失望して泊浦に向ふ。老翁獨り一乘院往時の盛大を説いて諄々たるのみ。

畠山頼國の墓

泊浦

泊浦は坊津と一小時を隔て、次の港灣なり、此港も坊津と共に往時商船の來着せし所にして、坊と併せて坊泊と稱す。港灣は寧ろ坊津より廣く、却て碇泊所としては彼に一步を踰ゆるものなり。唯其風波を避くるに於て安全なる度は少して彼に輸する所あるを見る。加之坊津は水利に乏しく、爲に市街地として良好の地にあらず。泊浦は水多くして住居地に適せり、されば坊津の繁盛なりし當時は、人々皆此地に住し、坊は唯交易の市場たりしものならん。時間に乏しうして泊浦は唯之を望みたるのみにて歸路に就き、當時南薩漁業の霸王として最も盛大を極めをれる坊鯿漁株式會社はらうりぎよかふしきくわいしやに赴く。村を距る事凡そ半里、新道を開鑿して會社道あり。既に時晚くして此日の漁獵は終りたるならんと思ひしも、又明日を期し難きにより、會社に赴きて社長森氏しんぢやうもりしに面晤す。豫め山崎氏よりの紹介ありしにより、氏懇

坊鯿漁
株式會社

鯿漁

款到らざるなく、種々漁業の過去現在に語られたる所あり、併せて坊津の今昔につき氏の口より得たる所少なからず。其談話によれば、此地方は一般に鯿鯉かりかつをの如き魚類最も多く、現今に於ても秋冬の二季は鯿、春夏の二季は鯉を捕へ、之を鹿兒島長崎中國大阪兵庫邊まで輸出せるなり。鯉は各自の隨意に捕獲するものなるが、鯿は此會社にて漁する事となれり。南薩地方は一般に鯿漁を以て有名なるが、殊に此地を距る東方二里なる枕崎港は、其最も盛なる所なるが、此地の會社と此坊の會社との間には、電話を通じて盛に往來せり。共に盛に鯿を捕獲し、日々大抵平均百五六十尾の漁あり。近來坊は枕崎を超えて盛に、初三圓許の拂込さへ、人々溢りをりし株は、今は六七十圓に上り、配當も常に八九圓に上り、最初明治卅三年創立の際は、各拂込さへせざりしものが、現今は皆争ふて

大晦日
の夜

買入るゝ有様なりといふ、其盛況以て知るべきなり。
是より社長と同道にて歸路に就き、曩に一夜の宿泊を依頼せし家に
至りて、大晦日の夜を過ぐす事となりぬ。時に黄昏既に至り、四境
物色を辨せず。宿に入りて座敷は明日の準備に必要なればとて、天
井なき二階にほり上げられ、強ていへば泊めぬといふ氣息なれば、
遂に虫を抑へて鼠と同居する事となりぬ。夜竈の煙二階に舞ひ上り
來りて不快いふべからず。

元旦

元旦の御馳走を並べたる膳部に屠蘇も出て、雑煮餅こそなければ
鹿兒島地方は元旦に雑煮を作ることなし正式の正月を、立派なる八疊座敷に於て迎ふる事と
なりぬ。門外には學校生徒の輩、拜賀式に登校せんとて、三々五々
來往すること、賤も都も變らぬ、新年の狀況なり。やがて「臨時旅
宿」を辭し山崎氏を訪ふて昨日の厚意を謝し、再び行を起して昨日

來りし道を引かへして枕崎に向ふ。

(三) 開聞嶽

海路鹿兒島かごしまに來らんと欲する者、神戸港かたべに解纜して瀬戸内海せとないかいを過ぎ
日向灘ひらがたなに出で、遂に大隅海峡の波濤を蹶り、佐多の岬角を廻りて
船將に鹿兒島灣に入らんとする時、其天邊の一角に於て磁針の向ふ
所に、秀絶なる富士山狀の孤山の、海上に屹立せるものあるを見る
べし。是れ實に薩南の名山開聞嶽にして、此地方を航海する者此山
を見ては常に嘆稱措く能はざるところ、殊に此附近にて夜明け、大
隅の方面より出づる日光之に反映し、淡霞薄雲山の一面に柵引く時
は、其風色の絶佳なる、到底詞華言葉の及ぶ所にあらずといふ。
開聞嶽、山甚高しといふべからず、海拔僅に九百十五米突、然れど
も其山姿の秀拔なる、山勢の雄偉なる、實に海南第一といふべく、

開聞嶽

世に富士の別稱ある山多しと雖、此山の如く秀絶なる富士形をなすもの、蓋し類稀なりといふべし。されば、筑紫富士、薩摩富士、小富士、金盞山、蓮花山、長王山、海門山等の名を附する、皆此山に對する賞賛に外ならず。山は薩摩國に屬せるものなるも、全く大洋の中に半島の如くに斗出し、一面は蒼涯に接し、一面は平地より屹立し、更に層岡複峯の相接する事もなく、又四隣に高山もなければ、絶巔よりの眺矚頗る佳なり。實に薩南の名山として激賞するも故ありといふべし。吾南薩旅行の途次、一日を費して之に登岳したれば、今其行路の概畧を世に紹介しおかんとす。

時維れ壬寅の一月二日、同行者一人、我と共に二人、新年の大氣を高山に吸ひ、宇宙を併呑の氣を養ひ、今茲を雄飛して暮すの潛勢力を作らんと、談一決して、穎娃村を發し登山の途に就く。

登岳

穎娃

登路

脇浦

登山路

穎娃村の麓よもと○穎娃一村中、昔地頭郷より海岸に出て、白沙青松の間、若士わかしの居りし地を麓ふもとといふ。是れ開聞嶽の西北麓しくはラバ流沼の間を踏み、遂に脇浦に達す。是れ開聞嶽の西北麓なり。抑も此山に攀づるには三路あり、一は脇浦よりするもの、然れども後は東麓川尻浦かほしりうらよりするもの、一は十町村じゅうちょうむらよりするもの、然れども後者は雜樹叢生して殆ど攀ぢ難く、大抵前記二路の何れかよりなすなり。吾人は脇浦に至り、所々に登山の路を尋ね、普通ならば案内者を備ふものなれども、山に喬木なく四方到る處開達にして見えざる處なき山なれば、決して途中に迷ふの憂なかるべしとて遂に備はずして、徐々に教へられたるまゝ登る。登るに従て、火山に普通なる沙焦岩、殊に此山のもの焼灰の塊まれる者多くして、登山頗る困難に、寸進して尺退、一滑すれば砂礫滾々として走り、其止まる所を知らず。山は高さ僅に三千尺許なれども、海面より登るものにて、

山麓既に數百尺の地なりなといふものと異なり。純粹の三千尺、しかもジツクザツクの所謂羊腸たる路ならで、二三十度の斜面を一直線に上るものなれば、登路艱苦言語に絶せり、殊に時々路の破壊せる所ありて、之を攀づるには一方ならざる困難を覺ゆ。山の七分目までは雜樹叢生して、時々眼界開くるも、林間深く入る時は、亦方角を辨じ難きに至る。然れども木樹皆矮小なれば、決して方向を誤るの憂なし。六分目以上に至れば、殆ど灰とラバの流れたる跡のみにて、さまで苦痛を感ぜざるも、傾斜の度は益甚しく、且一滴の水なし。八分目以上は茅草深く繁茂し、冬すら枯草の我が丈を没するまでに成長せり。漸くにして榛莽を排し、茅蘆を分けて絶頂に達す。絶頂に於ては、其一端特に高くして、狭く他の一端低くして廣し。細樹布生して容易に動く能はず、熔岩結集して脚底頗る危し。最高

絶頂

七分目

山の歴史

点に立ち、西南に目を馳すれば、大洋渺茫として眼界際なく、其間に種子屋久、硫黄、竹の諸島假山の如く浮び出で、東南の一面には佐多岬斗出して此等の諸島に對峙し、東北は陸地曠遠にして、郡邑村落一々指點し得べく、其間に池田湖澄碧明奩鏡の如く、長崎より山川港につゞき、遙に鹿兒島灣葫蘆の形をなせり。其間より高隈櫻島の諸峯遙に獨り雲表に秀で、見ゆ。西方は遠く穎娃の海岸屈曲もなく、巨大の弧線を作りて枕崎の尖端に於て終れるを見る。四面の風景悉く脚下にあり、大氣清新にして新年の清氣更に高潔に、胸宇愈々宏恢、意氣益高邁ならんとす。抑も此山は霧島山火山脈中の一峯にて、沖繩列島の鳥島より、河邊六島を經、硫黄島より九州に達する門口なり。是より進んで櫻島霧島の方面に及べり、現今は休火山にて噴火口も埋れ、唯頂上に往時の火口と思はるゝ痕跡を止むるの

み。有史以前は之を知るを得ざれども、有史以後にては或は懿徳天皇の朝或は景行天皇の朝に湧出せりといへるも、今富士琵琶の話談に似て信憑の限にあらず。其確かなるものは、三代實錄貞觀十六年秋七月二日、太宰府の奏言に、薩摩國從四位上開聞神山頂有火自燒煙薰滿天灰砂如雨、震動之聲聞百里餘、近社百姓震恐失精、求之著龜、神願封戸及汚穢神社、仍成此祟、勅奉封二千戸、とあり。されば此頃には大に活動しつゝありしものと見ゆ。神主之を利用して中々ズルイ事をいへるもの哉。更に仁和元年十月十二日の條に、夜晦冥衆星不見、砂石如雨、檢之故實、類娃郡正四位下開聞神發怒之時、有如此事、國宰潔齋奉幣雨沙乃止、八月十一日震聲如雷熱炎甚熾、雨砂滿地、晝而猶夜、十二日自辰至子雷電砂降未止砂石積地、或處高一尺以下或處五六寸以上、田野埋瘞人民騷動云

休火山

々とあれば、今より千餘年以前即ち平安朝の中世頃は此山大に活動しつゝありしものなるべし。其後更に此地の舊記類にも其事見えねば、全く閉塞して現今の如きドルマントステージを作れるものなるべし。其山容を見るも、矮樹の發生せる、ラバの塊まらざる、皆近世の破裂を示すものたり。硫黄島焼け、櫻島霧島共に活火山なり、此山の如きは其中間にありて休眠の姿にあるものなれば、蓋し最も恐るべきものならんか。

石祠

絶頂の熔岩の下に石祠あり、たくまつ 諸冊二尊、天照大神、に、ま 瓊々杵尊、このはな 木花開耶姫命、ひこは、てひ 彥火々出見尊、とよたまひめ 豊玉姫命、よきあへ 葺不合尊及び玉依媛を祭れり、もとより近世の建立にて、方一間許の小祠に過ぎず。此祠北に向ひをれば、十町村に降るには、是より一直線に行くべきものならん、これより一條の通路、恐く直通せるならん、最初の計畫通り十町村

降路

に出で枚聞神社ひらきに詣でんと、あるかなさかの小徑を辿りて、茅蘆の生ひ茂れる間を降り、雜樹叢生せる山の七分目の邊まで至りしに、道絶え、雜木相交はりて容易に切抜け得べくもあらず。高が四五尺のものなれば、折り碎き伐り亂し、四五町許も來りしに、路は絶え果て唯無暗に、木樹の間をくゞれるものなれば、容易に進み得べくもあらず。しかも榛莽荆棘の類多くして、徒らに手足を負傷するのみ。加之路は愈窮まりて絶壁となり到底人力の及ばざる所に迷ひ入り。時既に午後四時、冬期の事なれば、今一時間もすれば暗夜に入らん、太陽は既に西海數尺の上に懸れるなり、いかに矮樹のみにて前方に吾が行先明なりとも、日没後は到底方角をも失ふに至らん。吾輩いかに彌次喜多旅行なりとはいへ、正月早々野宿も策の得たるものならざるべしと、遂に斷決して再び前路に立戻る事となり、再

迷ふ

拾町村

川尻浦

び路を探り漸くにして絶巔に出で、脇浦の方面に一瀉千里の勢を以て降る。脇浦に入りて日は全く没し、是より十町まで凡そ半里、草鞋は切れる、腹はへる、やつとの事にて辿りつきしに、宿屋はなし。暗夜枚聞神社ひらき、じんじやに詣で、社前の一雜貨店に、黒菓子に舌鼓をうち、山やま川まで行かんとせしも、之より凡そ三里ありとの事にて、遂に川尻浦かわじりに赴く事に決す。恰も朝月夜の頃なれば、僅に星明りにて不案内の小徑を辿り、或は人家の垣に衝當り、犬に吠へられ、田地の中に落込み、漸くにして川尻浦に達す。海上烏賊釣の漁火並列して、頗る美觀を極む。村に入る前に川あり、橋なし、暗夜深を知る能はず、一翁あり頗る懇切に教へて呉れ淺瀬を辿りて前岸の村落につき、いと惟げなる宿屋に至り宿泊を乞ふ。既に客ありて之を合宿せしめんとす、更に去て他の旅宿を求む。漸くにして一軒を見付け之に泊す、

家素より粗悪汚穢なりと雖、頗る朴素にして又興頗る深し。爐邊に於て普通語を話し得る此家の十二三歳の男兒を執へて、地方の雜話を聞く。元來薩摩を旅行する他國人は、途上路を尋ね或は何等かの要用を辨せんとする時は小學校生徒に聞くを最も好都合となす。蓋し彼等は學校に於て特に普通語とて、東京風の言語を學び居ればなり。四五十歳の老人殊に婦人に至りては、殆ど其言語を解するに苦むべし。爐邊の談話に主人も加はり、此地の習俗として残れる、設樂曲及びシヨウガブシなるものを聞かんとせしも、彼知らず、今や村中に知れる者二三に過ぎずといへり、○此歌曲の事に付ては歴史地理きたれば就て見らるべし 夜深けて遂に恠しげなる夜具にもぐりこみぬ。此等川尻浦邊より學校に通學するは、拾町村に出づるなり、凡そ半里許あり。學校は新築校舍にて頗る盛大にて、田舎に稀なる壯觀な

枚聞神社

天智帝遷幸の傳説

り、學校の傍に枚聞神社あり、吾人が夜間に詣でし神社なり。此神社は延喜式神名帳に、穎娃郡一座小枚聞神社とある是なり。元來開聞といへる文字は後世書改めしものにて、もとは枚聞にてヒラキ、と訓せしなり、山の名亦然り、之を後世音讀してカイモンと讀み、海門かいもんの字まで當つるに至りたるものなり。祭神は地理纂考には大日靈貴尊おほひのと見ゆるも、一宮記には猿田彦命さるたひこのみことと見ゆ。此社の傳説に天智帝遷幸の事あり、もとより取るに足らねど、其談は、開聞岳の麓に一岩窟あり、孝徳帝の御宇、爰に一仙人あり、一日鹿來りて此窟に神女を生む、仙人之を養育して僧智道ちだうに與ふ。智道女子二歳の時大織冠おほいしやくわん鎌足かまたりの許に來りて之を預け、遂に其許に成長す。之を大宮姫おほみやひめと名づく。やがて天智帝の皇妃に立ち寵愛甚あつし、他の妃嬪皆之を妬みて之を害せんとす、姫遁れて伊勢阿濃津いせあのつより此國に來り、

白鳳元年山川牟瀨の濱に着し、穎娃脇浦の地に住す。帝別離の情禁じ難く、潜に京都を出て陸路太宰府に幸し給ひ、之より船にて、指宿郡由良浦に着し、次で開聞山麓の行宮に居給ふ事三十餘年。慶雲三年崩御す、乃ち此神社の右脇に之を葬り奉る。今神社の傍平石二箇を以て標せる乃ち然りといふ。思ふに是れ天智帝崩御の時、皇位繼承の説未だ定まらず、帝大友皇子を立て給ひしも、猶大海人皇子の野心を知らざるにあらず、晩年頗る不快にあり給ひし状見ゆるなり、書紀には明に疾を以て崩御の事見るも、水鏡には「山科へ御座て林の中に入てうせ給ぬ、いづくに御座と云事を知らず、只御くつの落しを陵には籠め奉りし也」といふ異説あり、従てかゝる地に來り給ひしとの説も起りしならん。又一説には筑前朝倉宮に來り給ひしとの説もあり。又天智帝の御劔なりとて傳へ居れるものある由な

れど、夜間なれば見ず。又御陵と稱せらるるものもよく見ざれば、如何とも評隲し難し、とにかく天智帝がかゝる處へ潜幸せられしとは、素より受取がたき妄説なれども、此傳説は又他の事實を訴ふる如き心地なり。されど未だ證據不充分に且當時充分の觀察をなし能はざりしを以て、異日再調の上論する時あるべし。

(附録) 海道記地理考

文學士 柴田達三郎

海道記は、從五位下伊賀守源光行が、後堀河天皇の貞應二年に於ける、東海道旅行の日記なり、即ち光行の此行は、今を去ること六百七十有餘年の昔にして、鎌倉幕府勅立以後三十二年、將軍藤原頼經の時にあり、當時は京都と鎌倉との交通は、漸く頻繁に赴き、此間の道路宿驛も、從て整備せられつゝありし時代なりとす、抑も、東海道は、諸道の中に於て、最も古く開かれたるものにして、既に 天武天皇の御宇に、畿内七道を定められし時、東海道を以て、其冠首とせられたるとあり、後五百有餘年を経て、源頼朝府を鎌倉に開くや、京都との交通上、此海道は、最も著しき影

響を蒙りて、こゝに一變化を受け、後又四百有餘年を経る、徳川家康府を江戸に置き、天下兵馬金穀の權を握り、三百諸侯をして、年々參勤交替せしむるや、此等諸侯の交通に便せんが爲め、且は、京都と江戸との連絡を充分ならしめんがため、時に或は使を遣はして、各驛を巡察せしめ、時に或は吏を派して、道路橋梁を修築せしめたり、此に於てか、海道は又一變化を蒙り、爾來ますます整備せられ、所謂東海道五十三驛は、三代將軍の時に至りて、已に悉く備はるに至れり、即ち光行の此行は、海道第一の變化を受けつゝありし時なりしなり、故を以て、此紀行載するところの道路宿驛は、ともに今日と著しく異なるものあり、此記事にして精確ならんには、今日に至る變化も、充分にこれを知ることを得べかりしに、惜いかな頗る雜駁にして、而も其觀察極めて不充分な

るを以て、明ならざるどころ少なからず、加ふるに、此地の變化たる、年月の久しき、實に著しきものあるが故に、此等沿革の狀態を審にせんと、元より容易なる業にあらず、況んや、單に記録により地圖に依り、これを究めんとするは、所謂座上の空論にして、實地踏査にあらざるよりは、到底その正鵠を得ること難きに於てをや、然るに、幸にして、此地方に關する二三の紀行あるを以て、今彼此對稱して、以て當時に於ける一般の狀態と、及び今日に至れる變化の梗概を述べん。

當時京を出て、東に向ふものは、皆粟田口より逢坂山に出でざるべからず、光行も亦此道に依れり、逢坂山は、即ち往昔關の存在したる所にして、既に早く廢せられたるもの、如し、其設置せられたるは、文德天皇天安元年にして、今を去ること實に一千五十一年

の昔にありとす、其舊跡の如きは、今より明にこれを知るに由なし

と雖、傳ふるところに依れば、今日の山城近江兩國の境をなせる、即ち逢坂峠の東に當り、東片平町尼寺附近に存在せしものなりと云ふ、親行卿の東關紀行親行は光行の子にして親行の此行は、四條天皇の仁治三年なれば光行の東關下向に後るゝこと僅に二十年なりとすに、

むかし、蟬丸と云ひける世捨人、此關相のあたりに、わら屋の床を結びて云々、蟬丸は延喜第四の宮にておはしける故に、此關のあたりを、四宮河原と名付けたり、

とあり、四宮は、山城國宇治郡逢坂山西北の麓にあり、淀川の一支流山科川は、即ち此傍を流る、親行の四宮河原と云へるは、すなはち是なり、元より單に「此關のあたり」とありて、極めて漠然たるを以て、關の位置は、明にこれを知ること能はずと雖、此附近に存在

せしものなるや明なり、因に記す、山近兩國の境界は、徳川時代にありては、四宮を距る東二十町許、今の追分の地にありしが、昔にありては、逢坂峠の少しく南にして、今兩國寺と名くる淨刹の存する所なりしと云ふ。

勢田の橋 近江國滋賀郡と栗太郡との堺に在り、一名青柳橋と云ふ、和歌に長橋から橋又とどろきの橋など詠めるは即ちこれなり、橋は古來帝城の要害として、最も重きを置かれたるものにして、既に壬申の亂をはじめ、常に事あるときは、此橋を徹して以て防禦に充てたること少からず、此橋或は兵燹に罹り、或は年を経て腐朽し、修築改造したると屢なりと雖、其位置に於ては、今日も猶大差なきが如し。

野州河 は、上流を横田川と稱す、河は源を遠く勢近兩國の堺な

る合螺ヶ嶽に發し、西北西に向て流れ、石部の傍より北に折れて、琵琶湖に注ぐ。

若相、横田山、大岳、内の白河、外の白河、等の地名は、何れも鈴鹿峠に至る間、野州河の上流、横田川の沿岸に存すべきものなれ共、今詳ならず。

鈴鹿山 は勢近兩國の國境に聳立せる、三子山の西腹を通ずる、有名なる山道にして、昔此所に存せし鈴鹿の關は、今僅に其名残を關驛の名に止むるのみ、關は往昔不破美濃相坂近江の二關と共に、並び稱せられたる要害なりとす、關の所在地と稱せらるゝ關驛は、鈴鹿峠の東南約一里半の所にあり、鈴鹿峠は、即ち中央山系を貫ける山道にして、道開けざる當時にありては、其嶮難實に甚しきものありしなるべし、光行は此狀を述べて、曰く、

重山雲さかし、越れば千丈の屏風彌しげく、群樹烟ながし、寒は又萬尋の帷帳ますくあつし、峯には松風かたくに調べて、嵒康が姿しきりに舞、林には葉花稀に残て、蜀人の錦は纒にちりほふ、是のみにあらず、山姫の夏の衣は梢の緑にそめかけ、樹神の音の響は谷の鳥にこたふ、此路を何里ともしらず越行ば、羊腸坂さびしくして、驚馬石にあしなえたり、すべて此山は、一山の中に數山をへだて、千巖の峯にさはり、一河の流百瀬に流る、衆客の歩みに足をひたせり、山里江復は當路にありといへども、萬里の行者はなかばもいたらず、

と、粹道崎嶇として、行路頗る難く、奇松怪柏道路を掩翳し、仰げば峰巒環抱して萬樹天を支へ、溪流激湍旅人を惱ますの狀、炳として辭句の間に表はる、當時多くは道を美濃に取り、番馬、醒ヶ井を

經て不破の關にかゝり、右折南下して熱田に出しもの、或は此嶮路を避けたるに依るならんか、文中「一河の流百瀬に流れて云々」とあるは、即ち鈴鹿川を云へるなり、鈴鹿川は又八十瀬川とも名く、これ川の瀬數支に分れ流るゝを以てなり、俊成卿の歌に、
降りそめて幾日になりぬすゞか川

やそ瀬もしらぬさみだれの頃

とあるは、即ちこれを詠じたるものなり。

市腋 と名づくるるところ更に明かならず、光行は、
夜陰に市腋と云にとまる、前を見おろせば海さし入て河伯の民うしろにやしなはれ、みあぐれば峯崎て山祇の髮風にけづる、磐をうつ夜の浪は千光の火を出し、木々になく曉の語は孤枕の夢を破る、

と、所の有様を記し、その海灣に濱するよしを云へり、今前後の道程によりて之を考ふるに、伊勢國三重郡四日市の附近ならんか、津島の渡、桑名の北三里を隔て、尾張國海東郡に津島町あり、津島の渡とは、昔此近傍に於ける渡を稱せしものなるべし、然れども今の津島町は、木曾本流の分流なる佐屋川の東岸に位するものにして、此所においては、河幅も著しく廣からず、且つ西より東に向ふものは、先づ木曾の本流を渡りて、然る後此所に出ざるべからず、元より木曾の流域たる、著しき變化あるを以て、今の形勢を觀て、一概に推定すること能はずと雖、光行が單に「津島の渡と云所を舟にて下れば」と云ひ、又「渡はつれば尾張國にうつりぬ」と云へれば、昔の津島の渡は、今の津島町よりは遙かに下流にして、本會揖斐兩河の會點より、佐屋川合流の地點との間に存せしものには非る

か、今暫く疑を存して後考に譲る。

萱津の宿 名古屋の西一里許の所、海東郡に上萱津、中萱津、下萱津と稱するところあり、萱津は當時一市場として、稍繁盛なる一小

都會たりしもの、如し、親行は即ち此有様を述べて、かやつの東宿の前を過れば、そこらの人集りて、里も響くばかりと罵りあへり、けふは市の日になむ當りたるとぞいふなる、往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも、かのみてのみや人にかた

らんとよめる花のかたみには、やうかはりて覺ゆ、と云へり、又以て其様を知るに足らん、親行が「萱津の東宿」と云へるもの、恐らくは、此當時他にも同名の地ありしが故なるべし、今日上、中、下の三村あるもの、既に此當時より存せしものにはあらざるか。

熱田の宮 尾張國愛知郡。

鳴海の浦 人口に膾炙する「鳴く音に潮の満干をぞ知る」てふ千鳥の歌を以て、有名なる所にして、又宵月の濱とも名く、今の鳴海町は、熱田の東南一里半にして近く、海岸よりは約一里の所に在り、町の往昔海岸附近に存せし一村なりしが、天白川泥沙を流出すると著しく、海岸次第に隆起して、遂に今日の如き形勢とはなりしなり、元來桑名より鳴海附近に至る一帯の海岸は、木曾川の末流なる鍋田、筏の兩河をはしめ、庄内、山崎の諸川は、皆共に泥沙を流出して、次第に海岸を埋むるを以て、今を去ること六百年前の昔とは、頗る異なるものあり、此海岸附近島、浦、津等の名稱を有する地名多きを見ても、其海岸線の變化如何に著しきかは、これを想像するに難からず、現に光行の當時にありて、東海官道は、鈴鹿を越えて後

遙に北に上り、再び南に下りて鳴海の海岸に通せしなり、又以て當時の海岸線は、如何に今日より遙に内地に存せしかを知るに足らん、光行は、

此浦をはるかに過れば、朝には入海にて魚にあらずば遊べからず、

晝は鹽干瀉なれば馬をはやめてゆく、

と云ひ、干潮の時を待て、北海道を通行したる由を云へり、親行も

ふる里は日をへて遠くなるみ瀉

いそぐ汐干の路ぞくるしき

とて、其行路の頗る困難なる趣を詠ぜり、是より昔交通極めて稀なりし當時にありては、尙一層の甚しきものありしなるべし、光行の此行に先つこと百八十年許以前に於て、此所を通行せし菅原孝標朝臣女は、更科日記に此嶮難の状を叙して、

尾張國なるみの浦を過る、夕しほたゞみちに満て、こよひ宿からんも、ちうげんにしほみちさなば、こゝをも過じと、あるかぎり走りまどひすぎぬ、

と云へり、又光行の後、五十有餘年にして、此所を過りたる、阿佛尼の十六夜日記にも、

鳴海のかたをすぐるに、しほひの程なれば、さはりなくひかたを行く

ことを得たりとて、當時猶他に道なきが如く記せり、然るに後交通稍頻繁なるに及び、満潮に際しては、左の方鳴海の上野を往來するに至れりと云ふ、吾嬭路記に、

いにしへ宮より鳴海へ行には、熱田より汐干がたを浦づたひに、よひ月の濱より登れば、坂ありて山道なりしよし、今は濱路波に

あらされて道なし、

とあれば、遂には海濱の道全く絶えて、山路のみとなるに至りしものごとし、此山路こそ即ち今の東海官道なりとす。

二村山 和名抄には「尾張國山田の郡兩村」とありて、尾張國に入るよし記せども、詞花集には、三河國とあり、光行、親行はともに尾張の國なりとせり、然るに更科日記には又三河の國にあるよし記せり、殊に奇なるは、光行は、

宮道、二村の山中を賒に過て云々、山中に堺川あり、身は河上にうかんでひとり渡れども、影はみなそこに沈て我とふたりゆく、かくて三河國にいたりぬ、

とて、今三尾兩國の境界をなせる境川の西にありとし、菅原朝臣の女都に上るとき、